安曇野市の埋蔵文化財第４集

平成21年度
安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書

塩田若宮遺跡（第２次）

２０１１．３

安曇野市教育委員会

平成21年度
安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書

塩田若宮遺跡（第２次）

２０１１．３

安曇野市教育委員会

塩田若宮遺跡（第２次）調査区（北から）

SB１敷石（東北から）

SB 2 埋設土器（南から）

SB 1 出土土器

序

平成22年度には安曇野市内で発掘調査１件、試掘調査11件、工事立会調査23件、慎重工事３件の埋蔵文化財保護措置が実施されました。安曇野市内では現在約400箇所の遺跡の存在が知られています。これらの遺跡に光をあてることが、安曇野市教育委員会としての重要な使命のひとつです。

本書に掲載した塩田若宮遺跡発掘調査は、明科北保育園改築事業に伴う記録保存です。この発掘は６月から７月にかけての梅雨の時期に行われたため雨天に悩まされることとなりましたが、関係諸氏の多大なるご配意のため無事終了することができました。この結果、今まで断片的に解明されていたに過ぎない約4000年前の縄文時代の集落の一端に新たな知見を加えたことは大きな成果です。特に潮沢川に向かう緩斜面でみつかった敷石住居とそこから出土した多量の土器・石器からは、この時期の安曇野において明科地域がひとつの拠点となっていたことを示唆しているといえます。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、多くの関係機関、関係諸氏にご尽力賜りました。本報告を上梓するにあたり厚く御礼申し上げます。また、今回の発掘調査成果が多くの市民に活用され、広く安曇野の歴史・文化解明に役立つことを祈念し序とさせていただきます。

平成23年（2011）３月

安曇野市教育委員会
教育長　丸 山 武 人

例　　言

1　本書は長野県安曇野市（平成17年10月１日に豊科町・穂高町・三郷村・堀金村・明科町が合併して誕生）で平成21年度に実施された埋蔵文化財保護事業及び発掘調査の報告書である。

2　平成21年度に実施した発掘調査は本書に掲載した１件であり、遺跡名称及び所在地・調査期間・調査面積は以下のとおりである。

塩田若宮遺跡（第２次）　長野県安曇野市明科東川手867番１　外　600㎡
調査原因事業名　明科北保育園改築事業
発掘作業　平成21年６月15日～７月31日
整理作業　平成21年８月１日～平成23年３月31日

3　本書掲載の発掘調査は、安曇野市教育委員会が実施し、安曇野市が費用負担した。

4　本書の編集は事務局が行った。掲載した石器の実測図作成の一部・石材鑑定は株式会社東京航業研究所、自然科学分析は(株)加速器研究所に業務委託し、執筆・編集は土屋和章が担当した。

5　本書で使用した主な引用・参考文献は章末に一括して掲載した。ただし、業務委託した自然科学分析については各分析の文末に引用・参考文献を掲載している。

6　本調査に関する事務書類および出土遺物・記録類は安曇野市教育委員会が保管している。

7　調査全般にわたり以下の方々、ならびに機関からご指導・ご協力いただきました。記して感謝いたします。(敬称略・五十音順)

大澤　慶哲、桐原　健、島田　哲男、鳥羽　嘉彦、西牧　尚人、堀　久士、山下　泰永、
山田　真一

凡　　例

1　発掘調査および整理作業に際して、遺跡略号として遺跡名のアルファベットと調査年度（西暦2009年）の組み合わせである次の表記を使用した。

塩田若宮遺跡（第２次）：SDW09

2　調査及び本書での遺構名は、次の略号を使用している。

SB：竪穴住居跡・竪穴状遺構　SF：焼土遺構　SK：土坑　ST：掘立柱建物跡　P：ピット

3　本書で使用した方位は真北を示し、標高は海抜高を示す。

4　本書実測図で遺物は次のように表現した。

縄文土器、土師器：断面無地　　黒色処理：トーン（薄）

5　土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』に準じた。

目　　次

序

例言・凡例

目次・図版目次・表目次

第１章　平成21年度埋蔵文化財保護事業……1

　1　埋蔵文化財保護事業の概要……1

　2　試掘調査……4

第２章　塩田若宮遺跡（第２次）……11

　1　調査の契機と経過……11

　2　遺跡の位置と環境……13

　3　調査の方法と成果……16

　4　遺構……18

　5　遺物……22

　6　自然科学分析……46

　7　調査の総括……54

　写真図版……59

付表……65

報告書抄録

図版目次

第１図　平成21年度発掘調査等位置図…… 3
第２図　塩田若宮遺跡試掘位置図…… 4
第３図　試掘トレンチ配置図…… 4
第４図　試掘出土土器…… 5
第５図　遺物出土状況…… 5
第６図　出土土器…… 5
第７図　上郷遺跡試掘位置図…… 6
第８図　橋ノ爪遺跡試掘位置図…… 6
第９図　穂高古墳群 A－１(陵塚)試掘位置図 … 7
第10図　押野山遺跡試掘位置図…… 7
第11図　矢原五輪畑遺跡試掘位置図…… 8
第12図　藤塚遺跡試掘位置図…… 8
第13図　三枚橋遺跡試掘位置図…… 9
第14図　中木戸遺跡試掘位置図…… 9
第15図　北村遺跡試掘位置図……10
第16図　寺島畑遺跡試掘位置図……10
第17図　開発後の発掘調査地点……11
第18図　周辺の遺跡分布図……13
第19図　発掘調査位置図……15
第20図　基本土層……16
第21図　調査区全体図……17
第22図　SB１実測図 ……19
第23図　SB２実測図 ……20
第24図　SB３実測図 ……21
第25図　P５実測図 ……21
第26図　縄文時代の土器１ ……24
第27図　縄文時代の土器２ ……25
第28図　縄文時代の土器３ ……26
第29図　縄文時代の土器４ ……27
第30図　縄文時代の土器５ ……28
第31図　縄文時代の土器６ ……29
第32図　縄文時代の土器７ ……30
第33図　縄文時代の土器８ ……31
第34図　縄文時代の土器９ ……32
第35図　縄文時代の土器10……33
第36図　縄文時代の土器11……34
第37図　縄文時代の土器12……35
第38図　縄文時代の土器13……36
第39図　縄文時代の土器14……37
第40図　縄文時代の土器15、土製品……38
第41図　出土石器１ ……40
第42図　出土石器２ ……41
第43図　出土石器３ ……42
第44図　出土石器４ ……43
第45図　出土石器５ ……44
第46図　平安時代の土器……45
第47図　年代測定資料（NO．５） ……46
第48図　暦年較正年代グラフ……49
第49図　炭化材……53
第50図　SB１礫・敷石分布図 ……54

表目次

第１表　平成21年度発掘調査等一覧…… 2
第２表　塩田若宮遺跡発掘調査記録……15
第３表　放射性炭素年代測定結果……48
第４表　放射性炭素年代測定結果（参考値）…48
第５表　樹種同定結果……50
第６表　安曇野市内の敷石住居……55
付表１　塩田若宮遺跡試掘出土縄文土器
観察表……65
付表２　塩田若宮遺跡(第２次)建物跡観察表…65
付表３　塩田若宮遺跡（第２次）出土縄文土器
観察表……65
付表４　塩田若宮遺跡（第２次）出土土製品
観察表……70
付表５　塩田若宮遺跡（第２次）出土縄文時代
石器観察表……70
付表６　塩田若宮遺跡（第２次）出土平安時代
土器観察表……72

第１章　平成21年度埋蔵文化財保護事業

１　埋蔵文化財保護事業の概要

調査体制

平成21年度の安曇野市における埋蔵文化財保護事業は、教育委員会事務局文化課文化財保護係が担った。体制は次のとおりである。

事務局　安曇野市教育委員会事務局　文化課

北條　英明（文化課長）、那須野　雅好（文化財保護係長）、土屋　和章（文化財保護係）

地理的環境と遺跡の立地

安曇野市は平成17年（2005）10月１日に豊科町（とよしなまち）・穂高町（ほたかまち）・三郷村（みさとむら）・堀金村（ほりがねむら）・明科町（あかしなまち）の５町村が合併して誕生した市で、長野県のほぼ中央部に位置し、北は大町市（おおまちし）、松川村（まつかわむら）、池田町（いけだまち）、生坂村（いくさかむら）、筑北村（ちくほくむら）、南は松本市（まつもとし）に隣接する。地形的には松本盆地の中ほどにあり、西は飛騨（ひだ）山脈、東は筑摩（ちくま）山地と接する。松本盆地は構造性の盆地で、縁辺部から流れるいくつもの河川が運搬した堆積物により形成されている。

安曇野市内に所在する遺跡は現在約400箇所が周知であり、時代としては縄文時代早期から現代に至る。縄文時代の遺跡は、主として北アルプス山麓の扇状地扇頂付近の及び犀川以東の河岸段丘上に多く立地しており、過去の調査からは縄文中期に隆盛を極めたことがわかる。弥生時代になると遺跡数は減少し、集落の立地も扇状地扇端へ移る。生業形態の変化が遺跡立地の変化に影響している可能性が示唆され、この集落立地は基本的に現代まで踏襲されている。安曇野市では前・中期の古墳は現在までに確認されておらず、後期の群集墳が北アルプス山麓や明科地域に分布する。奈良時代以降は、前代までの立地を踏襲するように犀川以西の扇端と犀川以東の河岸段丘上に集落が営まれるなか、明科地域では明科廃寺と呼称される古代寺院の存在が確認されている。また、豊科田沢の山間部一帯から隣接する松本市域にかけて須恵器窯群が築かれている。

平成21年度の概要

平成21年度の安曇野市における埋蔵文化財保護措置の一覧は第１表のとおりである。発掘調査等は合計38件で内訳は発掘調査１件、試掘調査11件、工事立会23件、慎重工事３件であった。それぞれの位置は第１図に示す。試掘調査の概要は次項で取り上げた。なお、平成21年度の工事立会調査及び慎重工事で埋蔵文化財に影響を与えた件はない。

また、安曇野市教育委員会が調査主体となった埋蔵文化財保護事業のほかに、國學院大學文学部考古学研究室によって穂高古墳群Ｆ９・F10号墳の墳丘測量調査及び古墳群の現状確認調査が実施されている（吉田・中村編2010）。

第１表　平成21年度発掘調査等一覧

NO		調査	遺　　跡	所　在　地	調 査 期 間	工事目的等
▲	1	慎重工事	南原遺跡	穂高6621番４	20090417	車庫建設
●	2	工事立会	追堀遺跡	穂高柏原1674番４	20090507	個人住宅
●	3	工事立会	穂高神社境内遺跡	穂高2671番２外	20090518	公共下水道
■	4	試掘	塩田若宮遺跡	明科東川手867番４外	20090520	保育園舎
●	5	工事立会	追堀遺跡	穂高柏原1672番10	20090515～20090602	個人住宅
●	6	工事立会	中条遺跡	明科光832番１外	20090615	工場増築
▲	7	慎重工事	塩川原上ノ平遺跡	明科七貴7679番１外	20090616	駐車場
▲	8	慎重工事	穂高高校北遺跡	穂高5972番２外	20090624	水路改修
■	9	試掘	上郷遺跡	明科中川手3549番１	20090713	個人住宅
●	10	工事立会	南松原遺跡	三郷小倉2109番２	20090715	個人住宅
●	11	工事立会	中木戸遺跡	明科七貴4148番外	20090723	道路改良
□	12	発掘	塩田若宮遺跡	明科東川手867番４外	20090615～20090731	保育園舎
●	13	工事立会	新林遺跡	穂高牧1864番１	20090803	宅地造成
■	14	試掘	橋ノ爪遺跡	明科東川手294番６	20090817	個人住宅
●	15	工事立会	小岩嶽下木戸遺跡	穂高有明3016番１外	20090817	公共下水道
●	16	工事立会	東小倉遺跡	三郷小倉3872番	20090902～20090903	携帯電話基地
●	17	工事立会	宗徳寺遺跡	穂高7137番４	20071226～20090908	本堂・庫裏建設
●	18	工事立会	弥之助畑遺跡	穂高柏原1567番１	20090911	個人住宅
■	19	試掘	穂高古墳群 A-1号墳	穂高有明2111番３	20090915	官舎建設
■	20	試掘	押野山遺跡	明科七貴6792番１	20091001	確認調査
●	21	工事立会	巾上遺跡	堀金烏川115番２外	20091026～20091027	電柱設置
■	22	試掘	矢原五輪畑遺跡	穂高807番１外	20091116	駐車場
●	23	工事立会	三枚橋遺跡	穂高980番１外	20091120～20091207	水路改修
●	24	工事立会	城下遺跡	明科中川手5387番の一部	20091202	個人住宅
■	25	試掘	藤塚遺跡	穂高2482番	20091209～20091214	携帯電話基地
●	26	工事立会	町屋敷遺跡	明科中川手2280番１外	20091215	その他の建物（工房）
■	27	試掘	三枚橋遺跡	穂高1460番４外	20091217	店舗（美容室）
●	28	工事立会	柳原遺跡	豊科2135番１外	20091221	個人住宅
●	29	工事立会	宗徳寺遺跡	穂高7137番４	20091222	その他の建物
●	30	工事立会	堰下遺跡隣接地	穂高牧１番15外	20091222	国営公園トイレ
■	31	試掘	中木戸遺跡	明科七貴4173番１	20091225	個人住宅
●	32	工事立会	堰下遺跡隣接地	穂高牧１番15外	20100118	国営公園休憩所等
●	33	工事立会	鳴沢Ａ遺跡隣接地	三郷小倉300番１外	20100215	歩道設置（橋脚設置）
■	34	試掘	北村遺跡	明科光220番１外	20100223	個人住宅
●	35	工事立会	犀宮社	明科中川手1191番１	20100224	倉庫
●	36	工事立会	三枚橋遺跡	穂高1479番１	20100226	個人住宅
●	37	工事立会	三枚橋遺跡	穂高1753番１	20100301	個人住宅
■	38	試掘	寺島畑遺跡	穂高有明7926番外	20100222～20100312	沈砂池

第１図　平成21年度発掘調査等位置図（１／100,000）

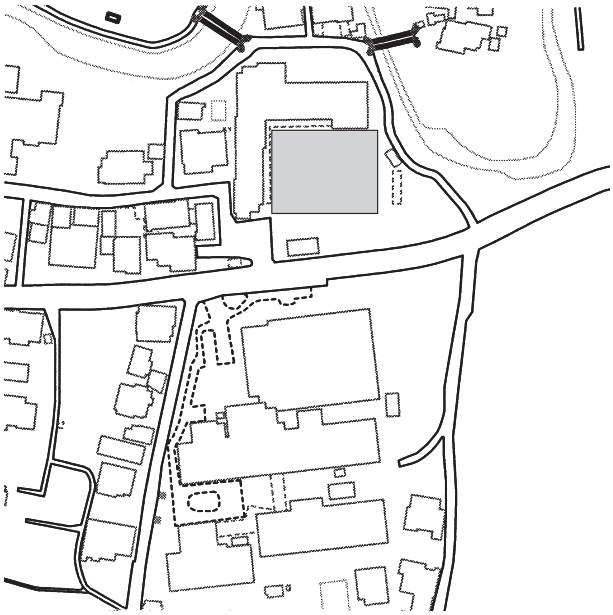
2　試掘調査

塩田若宮遺跡（しおだわかみや）（第１表４）

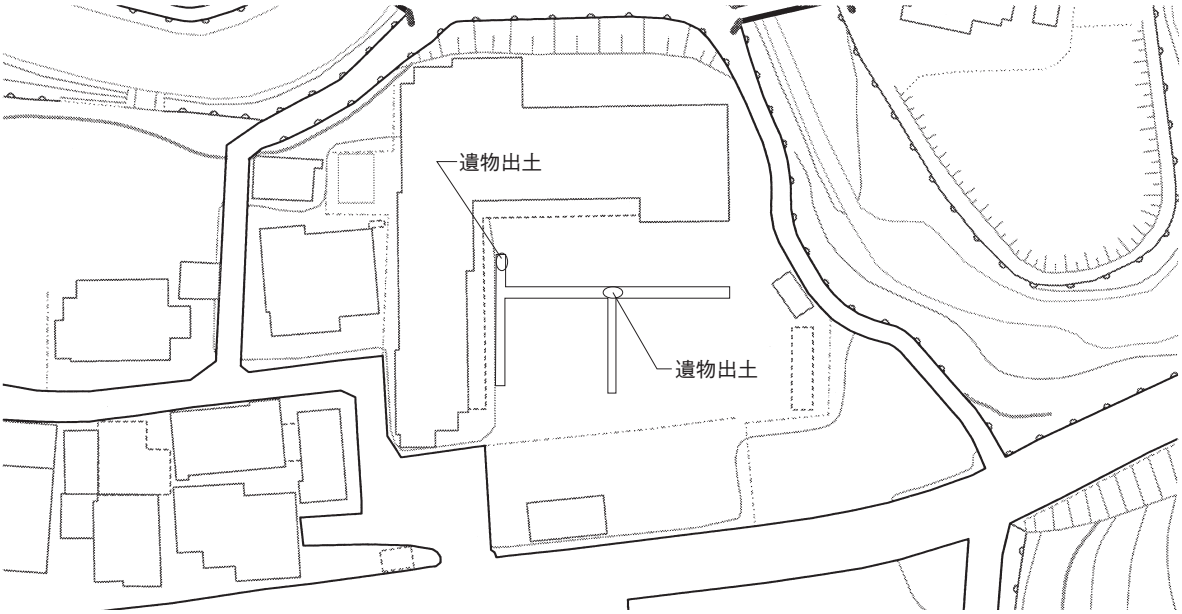
所 在 地	安曇野市明科東川手867番４外
調査期間	平成21年（2009）５月20日
調査面積	79㎡
調査契機	保育園舎建設

概要

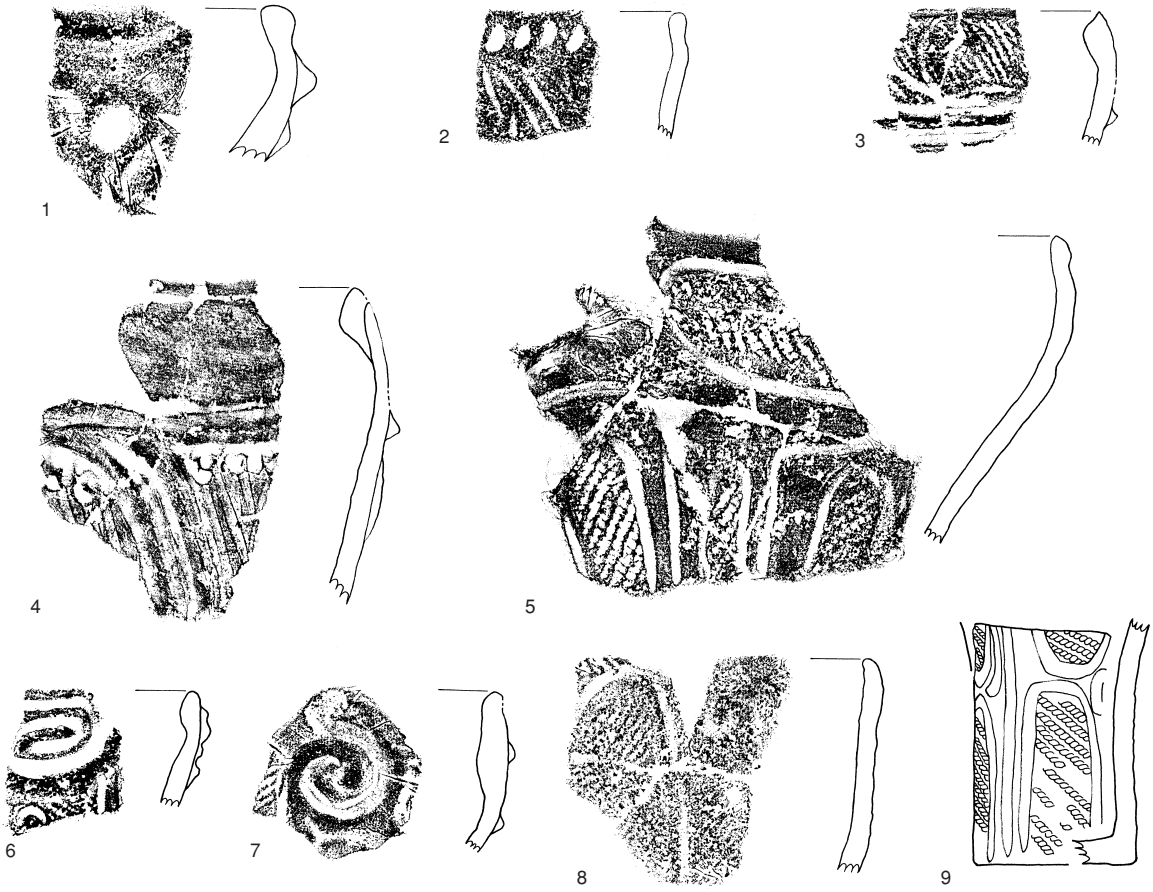
保育園舎建設予定地に３箇所のトレンチを設定し、遺構・遺物の検出を試みた。土層は表土下1.3～1.5mで暗褐色砂質シルト層を検出している。この層から縄文土器の集積と被熱した花崗岩礫が確認されたため、この場所に遺跡が良好に残存していることが確認された。平成20年度に実施した試掘調査では、今回の試掘地点から約100mの場所で、地表下90cm付近で竪穴建物跡と考えられる掘り込みと土師器坏底部が出土している。このことから、周囲一帯に埋蔵文化財が比較的良好に存在していると考えられた。このため、開発に先立って遺跡保護協議を実施し、保育園舎建設に際し発掘調査を実施することになった。この調査の報告は本書に掲載している。



第２図　塩田若宮遺跡試掘位置図（１／2,500）



第３図　試掘トレンチ配置図（１／1,000）



第４図　試掘出土土器

試掘調査出土土器を第４図に図示した。これらは本発掘調査に先立ち保育園庭でトレンチ調査をしたときの出土で、第２次発掘調査の直接の契機となった土器である。この試掘では土器類がプラスチックコンテナ１箱分が出土している。この第４図のうち５や９では胴部に「U」字や逆「U」字の区画が沈線によって描出され、磨消縄文手法により縄文施文がなされている。また６や７に見られるような口縁部付近の渦巻文もある。６は横区画の沈線による渦巻文、７は粘土紐貼付による隆線の渦巻文である。器形が明らかなものは少ないが、５はキャリパー形の影響を受けた系譜上にあって、くびれが弱く緩やかになったものと考えられる。

第５図　遺物出土状況

第６図　出土土器

上郷（わごう）遺跡（第１表９）

所 在 地	安曇野市明科中川手3549番１
調査期間	平成21年（2009）７月13日
調査面積	49㎡
調査契機	個人住宅建設

概要

住宅建設予定地に当初トレンチを設定して遺構・遺物の検出を試みたところ、須恵器甕１片が出土した。このため急遽保護協議を実施し７ｍ×７ｍの調査区を設定し遺構の確認を実施した。この結果、遺構と考えられる掘り込みや包含層は確認されず、ごく少量の土師器片が出土したのみであった。これらの遺物はいずれも磨耗が著しく二次的な堆積によるものと考えられる。したがって、今回の個人住宅建設は埋蔵文化財への影響はないと考えられるが、今後近隣で予定される開発等には留意する必要がある。

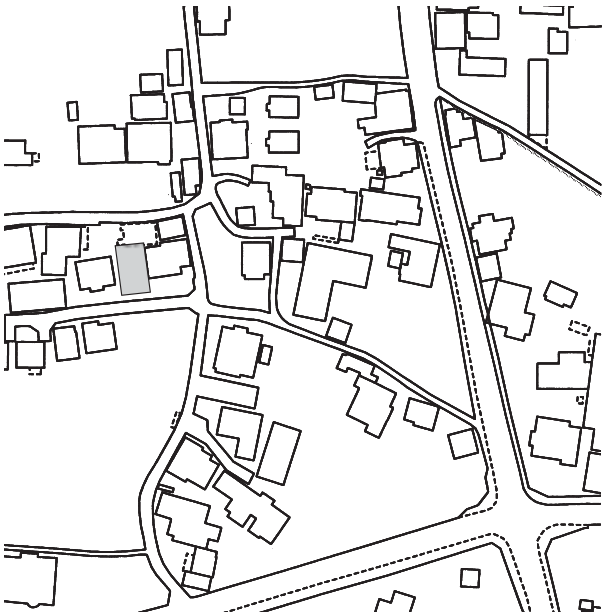
第７図　上郷遺跡試掘位置図（１／2,500）

橋ノ爪（はしのつめ）遺跡（第１表14）

所 在 地	安曇野市明科東川手294番６
調査期間	平成21年（2009）８月17日
調査面積	12㎡
調査契機	個人住宅建設

概要

住宅建設予定地に２ｍ×６ｍのトレンチを設定し、遺構・遺物の検出を試みた。この結果、地表下約50㎝の層からごく少量の土器小片が出土したのみで、遺構等は確認されなかった。出土した土器片も磨耗が著しく、流れ込みなどの二次堆積によるものと考えられる。したがって、この住宅建設で埋蔵文化財が影響をうけることはないと判断した。



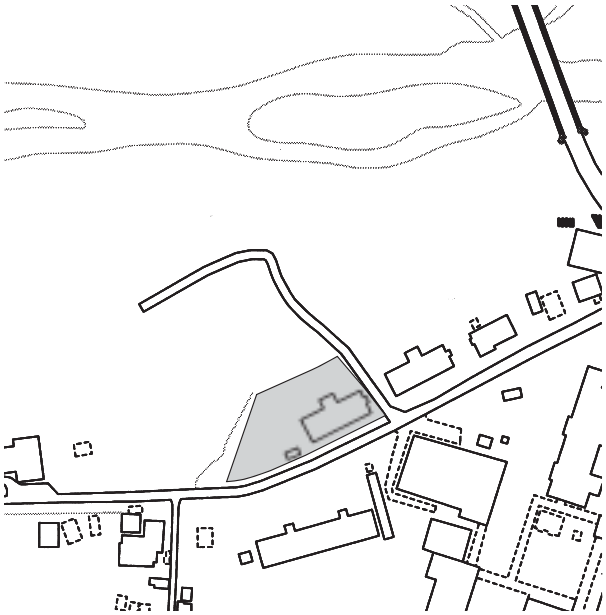
第８図　橋ノ爪遺跡試掘位置図（１／2,500）

穂高古墳群（ほたかこふんぐん）Ａ－１（陵塚（みささぎづか））（第１表19）

所 在 地	安曇野市穂高有明2111番３
調査期間	平成21年（2009）９月15日
調査面積	51㎡
調査契機	官舎建設

概要

官舎建設予定地がＡ－１（陵塚）の墳丘に近接していたためトレンチを設定し、遺構・遺物の検出を試みた。この結果、土層断面から落ち込みを確認した。この箇所について人為的な痕跡の検出に努めたが、遺物・炭化物などは検出されず自然形成されたものと判断した。この他、遺構・遺物と考えられる痕跡は確認されなかったため、この工事で影響する範囲に埋蔵文化財は存在しないと考えられる。



第９図　穂高古墳群Ａ－１試掘位置図（１／2,500）

押野山遺跡（おしのやま）（第１表20）

所 在 地	安曇野市明科七貴6792番１
調査期間	平成21年（2009）10月１日
調査面積	10㎡
調査契機	確認調査

概要

無線基地建設の可能性があるため、予定地で埋蔵文化財の有無を確認するためトレンチを設定して遺構・遺物の検出を試みた。調査地は押野山頂上部の平坦地でやや南傾斜となっている。トレンチ調査の結果、断面すり鉢状の掘り込みが確認された。この掘り込み覆土からは風化が著しい土器片も確認された。このトレンチ調査だけでは、確認された落ち込みの性格等の判断はできていない。この場所で工事等が実施されることになれば、再度確認をする必要があると考えられる。

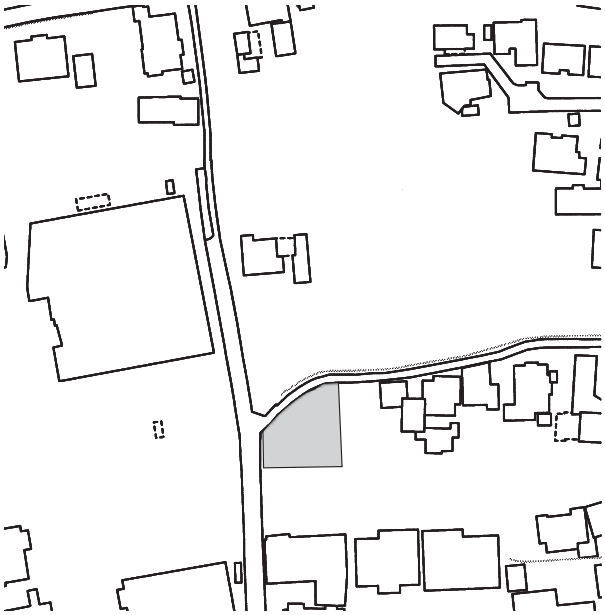
第10図　押野山遺跡試掘位置図（１／5,000）

矢原五輪畑遺跡（第１表22）

所 在 地	安曇野市穂高807番１外
調査期間	平成21年（2009）11月16日
調査面積	24㎡
調査契機	駐車場造成

概要

駐車場造成予定地に１m×12m のトレンチを２箇所設定し、遺構・遺物の検出を試みた。この結果、西側のＢトレンチで地表下約100cmから竪穴建物跡の可能性のある遺構を検出した。またＡ・Ｂ両トレンチから若干量の土器類が出土した。この結果、この場所には良好に埋蔵文化財が良好に残存することが確認された。今回の駐車場造成は20cm程度の砕石転圧のみのため遺構等に影響することはないが、今後の開発に際しては発掘調査等の保護措置を実施する必要がある。



第11図　矢原五輪畑遺跡試掘位置図（１／2,500）

藤塚遺跡（第１表25）

所 在 地	安曇野市穂高2482番
調査期間	平成21年（2009）12月９日～12月14日
調査面積	12㎡
調査契機	携帯電話基地局建設

概要

携帯電話基地局建設予定地に12㎡の調査区設定し、遺構・遺物の検出を試みた。この結果、地表下約70cmで埋蔵文化財が存在する可能性のある砂質シルト層が確認されたが、この場所ではごく少量の炭化物が混入しているだけで遺構・遺物は確認されなかった。したがって、今回の携帯電話基地局建設で埋蔵文化財に影響しないと考えられる。しかし、炭化物が存在することから付近に遺構等が存在する可能性がある。

第12図　藤塚遺跡試掘位置図（１／2,500）

三枚橋遺跡（第１表27）

所 在 地	安曇野市穂高1460番４外
調査期間	平成21年（2009）12月17日
調査面積	23㎡
調査契機	店舗（美容室）建設

概要

店舗建設予定地にトレンチを２箇所設定し、遺構・遺物の検出を試みた。この結果、調査地北側の地表下70㎝付近で微細な土器片が出土したため、注意深く精査したが遺構・遺物は確認されなかった。また、調査地内南半分の地表付近は撹乱を受け現代の屋根瓦やコンクリート片が混入しており、下層は河川流路跡となっていた。したがって、今回の店舗建設は埋蔵文化財に影響を与えないと判断される。

第13図　三枚橋遺跡試掘位置図（１／2,500）

中木戸遺跡（第１表31）

所 在 地	安曇野市明科七貴4173番１
調査期間	平成21年（2009）12月25日
調査面積	10㎡
調査契機	個人住宅建設

概要

住宅建設予定地に１ｍ×10ｍのトレンチを設定し、遺構・遺物の検出を試みた。本遺跡は江戸時代の土砂崩落によって埋没した村落である。トレンチ調査の結果、工事で影響を受ける地表下約70㎝までは河川作用または土砂崩落による砂礫層で遺構・遺物は確認されなかった。このため、今回の住宅建設が埋蔵文化財に影響を与えることはないと判断される。

第14図　中木戸遺跡試掘位置図（１／2,500）

北村遺跡（第１表34）

所 在 地	安曇野市明科光220番１外
調査期間	平成22年（2010）２月23日
調査面積	20㎡
調査契機	個人住宅建設

概要

住宅建設予定地にトレンチを設定し、遺構・遺物の検出を試みた。この結果、地表下約130cm付近で溝及び土坑と考えられる遺構がそれぞれ１箇所確認された。土坑はトレンチ東端、溝はトレンチ西端に位置する。このうち、溝についてはトレンチを拡張して方向と規模を確認した。また、これらの覆土には微細な土器片や炭化物が混入していた。この試掘の結果から、住宅建設による60cm程度の掘削は埋蔵文化財に影響を与えないと判断されるが、今後付近で予定される開発には留意する必要がある。

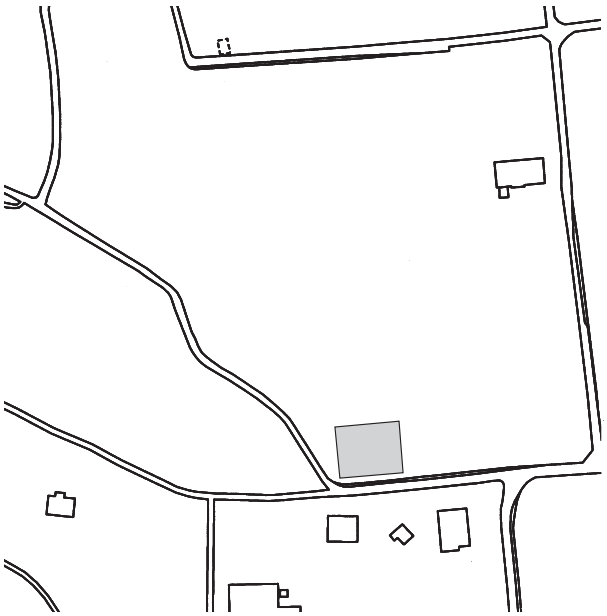
第15図　北村遺跡試掘位置図（１／2,500）

寺島畑遺跡（第１表38）

所 在 地	安曇野市穂高有明7926番外
調査期間	平成22年（2010）２月22日～３月12日
調査面積	20㎡
調査契機	沈砂池建設

概要

沈砂池建設予定地にトレンチを２箇所設定し、遺構・遺物の検出を試みた。この調査では、南側のＡトレンチで地表下100cm付近から縄文前期末～中期初頭の土器破片１片が出土したため遺構検出をおこなった。この結果、遺構及びさらなる遺物は確認されなかった。ただし、遺跡が存在する可能性が残されたため工事に際して随時工事立会いを実施したが、遺構等は確認されていない。このことから、遺跡は今回調査地より斜面上方に存在する可能性がある。



第16図　寺島畑遺跡試掘位置図（１／2,500）

第２章　塩田若宮遺跡（第２次）

１　調査の契機と経過

調査の契機と経過

この調査は安曇野市健康福祉部児童保育課による明科北（あかしなきた）保育園改築事業にかかる緊急発掘調査で、事業主体者は安曇野市長平林伊三郎氏（調査時）である。昭和36年（1961）に潮（うしお）保育所として開設された明科北保育園のこれまでの園舎は昭和49年（1974）に建設されたもので、老朽化が進み早急な対応が求められていた。このため、平成19年（2007）10月の安曇野市明科地域保育園建設検討委員会報告をうけて園舎の現地改築の方向で本事業が計画され、平成21年度中の竣工・使用開始を目指して実施されるに至った。明科北保育園の新園舎は鉄骨造平屋建て、延床面積は986.45㎡となっており、平成22年（2010）２月18日竣工、３月１日使用開始となっている。この園舎建設に関しては平成20年度中から遺跡保護協議を実施しており、平成20年（2008）12月15日には今回の建設地から約100m 西方の地点で建て替え期間中に使用する仮園舎建設に先立ち試掘調査を実施した（安曇野市教育委員会2010）。この試掘では地表下約90㎝から竪穴建物跡と考えられる遺構及び底部に回転糸切り痕のある土師器坏が出土している。

この試掘結果と建設計画をうけ、平成21年（2009）４月から発掘調査を念頭に取り扱い協議を継続する中で、今回の事業計画にある保育園舎の構造上、遺構面に達する可能性のある掘削が不可避であり、記録保存を前提とした埋蔵文化財保護措置をとる方向で事業者と合意した。こうして、平成21年（2009）４月14日付け「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」（文化財保護法第94条第１項）が安曇野市長平林伊三郎氏から提出され、４月22日付け「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で長野県教育委員会教育長から、この計画についての埋蔵文化財保護措置を記録作成のための発掘調査とする旨の通知があった。この通知に基づき安曇野市教育委員会では発掘調査体制を整えるとともに、平成21年（2009）５月20日に遺構の残存状況及び遺構面の深度などを調べる目的で確認調査を実施した。この結果、既往の建造物建設による撹乱は部分的で、地表下100㎝付近に遺構が概ね良好に残存していることが確認できた。この深度は今回の開発事業で影響を受ける範囲であるため、当初の計画通り平成21年（2009）６月15日から７月31日にかけて記録保存のための発掘調査を実施した。これに引き続き、整理作業は平成21年（2009）８月から開始し、平成23年（2011）３月に本書を発行して全事業を終了した。

第17図　開発後の発掘調査地点

調査体制

調査主体　安曇野市教育委員会

調査担当者　那須野　雅好（文化課文化財保護係長）、土屋　和章（文化課文化財保護係）

作業参加者　青柳　久子、植原　武義、小穴　金三郎、勝野　辰雄、原田　徹郎、細尾　みよ子、
松田　洋輔

事務局　安曇野市教育委員会事務局　文化課
北條　英明（文化課長、平成21年度）、竹内　邦彦（文化課長、平成22年度）
那須野　雅好（文化財保護係長）、土屋　和章（文化財保護係）

発掘作業・整理作業の経過

塩田若宮遺跡（第２次）発掘調査における現場作業は、平成21年（2009）６月15日(月)から７月31日(金)にかけて実施し、調査面積は600㎡である。調査経過の詳細は調査日誌抄として記述する。これに続いて、遺物整理を平成21年（2009）８月から開始し、遺物洗浄・注記までを３名体制、接合・実測・報告書作成を２名体制で継続し平成23年（2011）３月の本報告書発行をもって全事業を終了した。

調査日誌抄

平成21年（2009）

６月15日(月)　表土除去開始。現場で既存建物解体作業延期のため作業を一旦中止。再開は６月19日の予定。

６月19日(金)　表土除去。建物解体の際発生した土が敷地内中央に積まれていたため移動してもらう。プレハブ等搬入。

６月22日(月)　遺構検出開始。畝状遺構を検出、雨天のため10：30作業中止。

６月23日(火)　遺構検出。黒みの強い土の堆積から縄文土器片、黒曜石フレーク、須恵器甕破片などが出土。東側拡張部分では土器が多量出土。

６月24日(水)　雨天中止。

６月25日(木)　遺構検出。東側拡張部分の土器出土箇所をSB１とする。

６月26日(金)　遺構検出。調査区中央では土が固くなったため重機で薄く土層を除去した結果、ピットなどを複数検出。

６月29日(月)　SB１精査開始、縄文土器が多量に出土、他に黒曜石フレークなども。埋設土器精査、検出面で焼土を確認、この周辺をSB２とする。調査区内南西の黒色土落ち込みをSB３として精査開始。雨天のため16：00に作業中止。

６月30日(火)　雨天中止。測量業者作業。

７月１日(水)　雨天中止。

７月２日(木)　SB１・SB２精査。SB３精査、湧水のため土層確認が困難。

７月３日(金)　ピット・畝状遺構精査。SB３セクション実測。

７月６日(月)　SB３精査、焼土・炭化物層に現代の瓦片が混入しており現代の撹乱を受けている可能性がある。SB２精査、埋設状況確認のため土層断ち割る。P５精査、土師器出土、土師器下には多量の炭化物を確認。

７月７日(火)　SB１精査、調査区外に大きく広がりそう、また床面も深くなる見通し。P５完掘、土師器・炭化物・礫が重なって出土。

７月８日(水)　雨天中止。

７月９日(木)　SB１精査、掘り下げ深度は40cm程度になる見込み。昨日の雨で足場が悪く作業

難航。

７月10日（金）　SB１遺物取り上げ。ピット群をほぼ完掘。

７月13日（月）　正午頃空撮のため午前中は撮影準備の清掃。午後SB１精査、ベルト除去。

７月14日（火）　P５遺物取り上げ、礫の下には炭化物を確認。SB２とした埋設土器取り上げ。SB１精査、浮いていると判断される礫は座標観測して取り上げ。16：00から重機により深堀調査、下層に遺構等が存在しないことを確認。

７月15日（水）　SB１床面掘り下げ、焼土・骨片を確認。

７月16日（木）　SB１精査、ベルト下にも敷石を確認。

７月17日（金）　明科北保育園起工式のため作業中止。

７月20日（月）　祝日のため作業中止。

７月21日（火）　SB１精査、西壁は不明瞭。

７月22日（水）　SB１精査、敷石測量、ピット検出、遺物が多量に出土。本日は部分日食。

７月23日（木）　SB１敷石除去、ピット完掘、敷石下からも若干の遺物が出土。

７月24日（金）　SB１下層確認、中央付近から土器２個体が出土。測量業者現場観測。午後は現場撤収開始。

７月27日（月）～31日（金）　撤収、現場引渡し。測量業者現場観測。

２　遺跡の位置と環境

地理的環境

塩田若宮遺跡は長野県安曇野市明科東川手の潮地区に所在する。安曇野市明科地域は、犀川・穂高川・高瀬川の三川が合流する地点を有する松本盆地東縁辺の最低地であり、東方には山地が広がる。標高は海抜500m から900m 程で、大部分を占める低地性の山地と、犀川及び支流谷底部の低地からなっている。本遺跡を含む潮地籍は、南を会田川、北を潮沢川に画される犀川沿いに形成された南北約900m・東西約300m の段丘面上に展開している。東方の雷山山塊は急斜面をなして段丘面におちるが、この斜面には渓流の発達がほとんどなく段丘面は水に恵まれない。

今回の発掘調査地はこの段丘面の北端に位置し、潮沢川に落ち込む段丘崖に臨む標高約520m の地点である。この一帯には遺跡名にもある塩田と呼ばれる地籍があり、昔から塩分を含む湧水があって、これを沸かした入浴宿泊施設も過去に存在したという。

第18図　周辺の遺跡分布図（１／17,500）

歴史的環境

塩田若宮遺跡の所在する安曇野市明科地域は松本盆地東縁部の北側を中心とその東方に広がる山地からなっている。犀川によって形成された河岸段丘上では豊科田沢地区から明科南陸郷地区まで遺跡が断続的に確認されており、山間部には古墳や山城などが築かれている。

現在までに安曇野市内で旧石器時代の遺跡が発掘された例はないが、明科中川手の吐中遺跡で昭和31年（1956）にオオツノシカの化石が発見された記録がある。確実に人々の生活を確認できるのは縄文時代以降で、明科地域ではこや城遺跡や上手屋敷遺跡などで縄文早期の押型文土器片、ほうろく屋敷遺跡で絡条体圧痕文土器が出土している。このほうろく屋敷遺跡は明科南陸郷に所在しており、前・中期から後期まで集落が継続し、明科町教育委員会による第１～４次の発掘調査によって石器製作址の可能性があると指摘された（明科町教育委員会2001）。晩期になると明科七貴の荒井遺跡から浮線文が施された氷Ⅰ式段階の鉢形土器が採集されている（明科町史編纂会1984）。

弥生時代になると、ほうろく屋敷遺跡では再葬墓４群16基とそれに伴う土器30個体あまりが出土している（明科町教育委員会1991）。また、犀川左岸段丘上のみどりケ丘遺跡からは宅地造成に伴い発掘調査がなされて弥生中期の土器・石器が多量に出土している（太田・河西1966）。このとき集石遺構とされる礫群の中から多量の土器・石器が確認されており、変形工字文や磨消縄文が施文される土器群に太型蛤刃石斧や石庖丁が伴う。

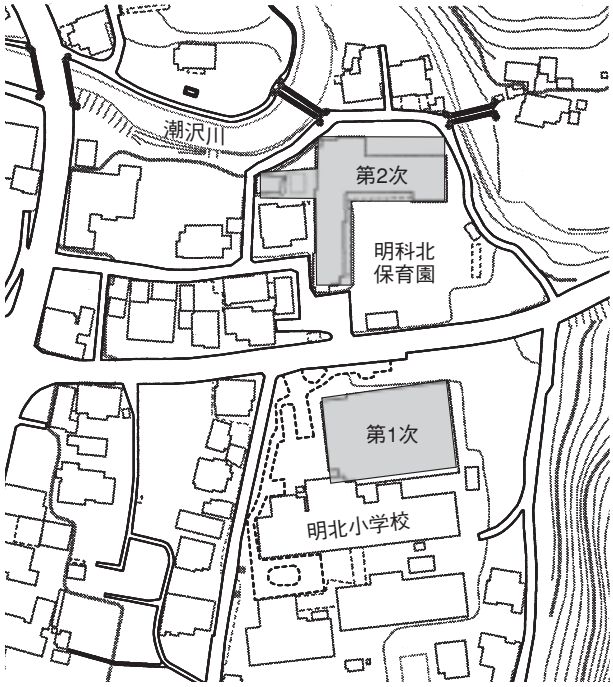
明科地域では古墳時代後期の古墳が確認されている。特に潮地籍に分布する複数の古墳は潮古墳群としてまとまりがあり、発掘調査によって７～８世紀初頭に比定されている（明科町教育委員会2005）。この時代の集落の様相は不明確な部分が大きいが、潮地籍からは古墳時代の土師器が採集されており未発掘部分に該期の集落が存在する可能性がある。会田川より南の明科中川手では、昭和53年（1978）の明科町役場（現在の明科総合支所）議会棟建設時に実施した栄町遺跡の発掘調査で６世紀後半に比定される住居跡が発掘されている（明科町史編纂会1984）。この住居跡は一辺５ｍほどで直径15㎝程度の川原礫を一面に敷き詰めた特異な遺構である。

奈良時代になると明科中川手で７世紀第３四半期創建と考えられる寺院跡が確認されており、所在地から明科廃寺と呼ばれる。明科廃寺では平成11年（1999）に行われた発掘調査によって掘立柱建物跡３棟、布掘り基礎を持つ掘立柱建物跡１棟などに伴って多量の瓦が出土した（明科町教育委員会2000）。昭和28年（1953）の発掘調査と併せて、古代瓦のほか鴟尾や瓦塔が確認され県内で最も古い時期の寺院のひとつとして注目される。明科廃寺の造営期間については未だ詳らかでないが、補修瓦の様相などから平安時代までは同地で存続していたものと考えられている。奈良・平安時代は明科地域全域で集落が確認される時期でもあり、開発が広範囲に及んでいったといえる。塩田若宮遺跡でも平成８年（1996）の発掘調査によって平安時代の竪穴建物跡が見つかっているほか、平成20年度に実施した試掘調査でも土師器坏が出土した。

明科地域には中世の城館跡が多く残されており、こや城遺跡、茶臼山遺跡、上手屋敷遺跡、塔ノ原城址などで遺物の出土がある。このうち塔原氏居館跡とされる上手屋敷遺跡は平成元年（1989）と平成15年（2003）に発掘調査が実施され、内耳土器や青磁碗のほか安山岩製の宝篋印塔相輪などが出土した（明科町史刊行会1984、明科町教育委員会2004）。

塩田若宮遺跡の概要

塩田若宮遺跡は本格的な発掘調査がなされる以前から、昭和25年（1950）明北（めいほく）小学校の校庭拡張工事、昭和44年（1969）給食センター建設工事、昭和46年（1971）明北小学校校舎移転改築工事などの際に縄文土器や須恵器・土師器片などが出土した記録がある（明科町史編纂会1984）。このような経緯のなかで明北小学校体育館建て替え工事が計画され、記録保存の必要性から明科町教育委員会は第１次発掘調査を実施することになった。平成８年（1996）６月から７月にかけて実施されたこの調査では、竪穴住居と推定される住居址５軒、敷石住居と推定される住居址１軒、掘立柱建物と推定される建物３棟、土壙２箇所、溝状遺構１箇所を確認し、このうち６号住居址のみ縄文時代後期前葉と推定している。この調査では住居址が概して調査区南側に集中していたため、遺跡の中心は明北小学校体育館より南の校庭付近と推測された。



第19図　発掘調査位置図（１／2,500）

今回の発掘調査地点は、明治７年（1874）３月の潮村住居・小字分布図によれば若宮（わかみや）地籍とされ、塩田地籍はこれより南側である（東川手の歴史を語る会2005）。この場所は明治35年（1902）11月に東川手村立東川手尋常高等小学校の校舎を建築、大正15年（1926）10月に２階建ての西校舎を新築し、昭和16年（1941）４月には東川手村立東川手国民学校となった。昭和22年（1947）４月学校教育法施行によって義務教育が９年間となり、東川手国民学校は東川手小学校と改められ東川手中学校が併設された。昭和24年（1949）に敷地内に中学校校舎が新築されている。昭和30年（1955）には村合併によって明科町立東川手小学校となり、昭和33年（1958）には東川手中学校が明科町立明科中学校に統合された。昭和36年（1961）に、東川手小学校から現在の校名である明北（めいほく）小学校へと改称し、昭和47年（1972）には現在地に新校舎が完成した。明北小学校移転後、この場所には明科北保育園の園舎が建設され、昭和49年（1974）から保育園用地としての使用が開始された。このとき建設された園舎が老朽化したため今回建て替えを行うことになり、これが塩田若宮遺跡第２次発掘調査の直接の契機となった。

第２表　塩田若宮遺跡発掘調査記録

調査次	調査年	面積	調査原因	遺構・遺物の概要
第１次	平成８年	1,200㎡	明北小学校体育館建て替え	敷石住居１、竪穴住居５ほか 縄文土器、石器、土師器
第２次	平成21年	600㎡	明科北保育園改築	敷石住居１、建物跡２ほか 縄文土器、石器、土師器

３　調査の方法と成果

試掘調査

明科北保育園改築事業にかかる試掘調査は平成21年（2009）５月20日に実施した。この調査では、保育園の園庭に３箇所のトレンチを設定し、遺構・遺物の検出を試みた。土層は表土下1.3～1.5m で暗褐色砂質シルト層を検出している。この層から縄文土器の集積と被熱した花崗岩礫が確認されたため、この場所に遺跡が良好に残存しており遺構面が現在の園庭地表面から約1.3m の深度であること、今回の改築事業によって埋蔵文化財に影響を与えることが確実視されることの２点が確認された。

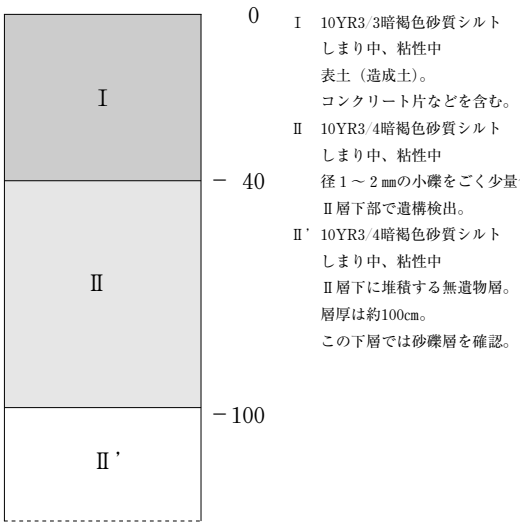
発掘調査

試掘調査の結果、明科北保育園改築事業地内では埋蔵文化財が良好に残存しており、この事業にかかる掘削によって埋蔵文化財への影響が不可避であるため、安曇野市健康福祉部児童保育課と協議を重ね建築面積にかかる範囲について発掘調査を実施して遺跡の記録保存をはかる方向となった。

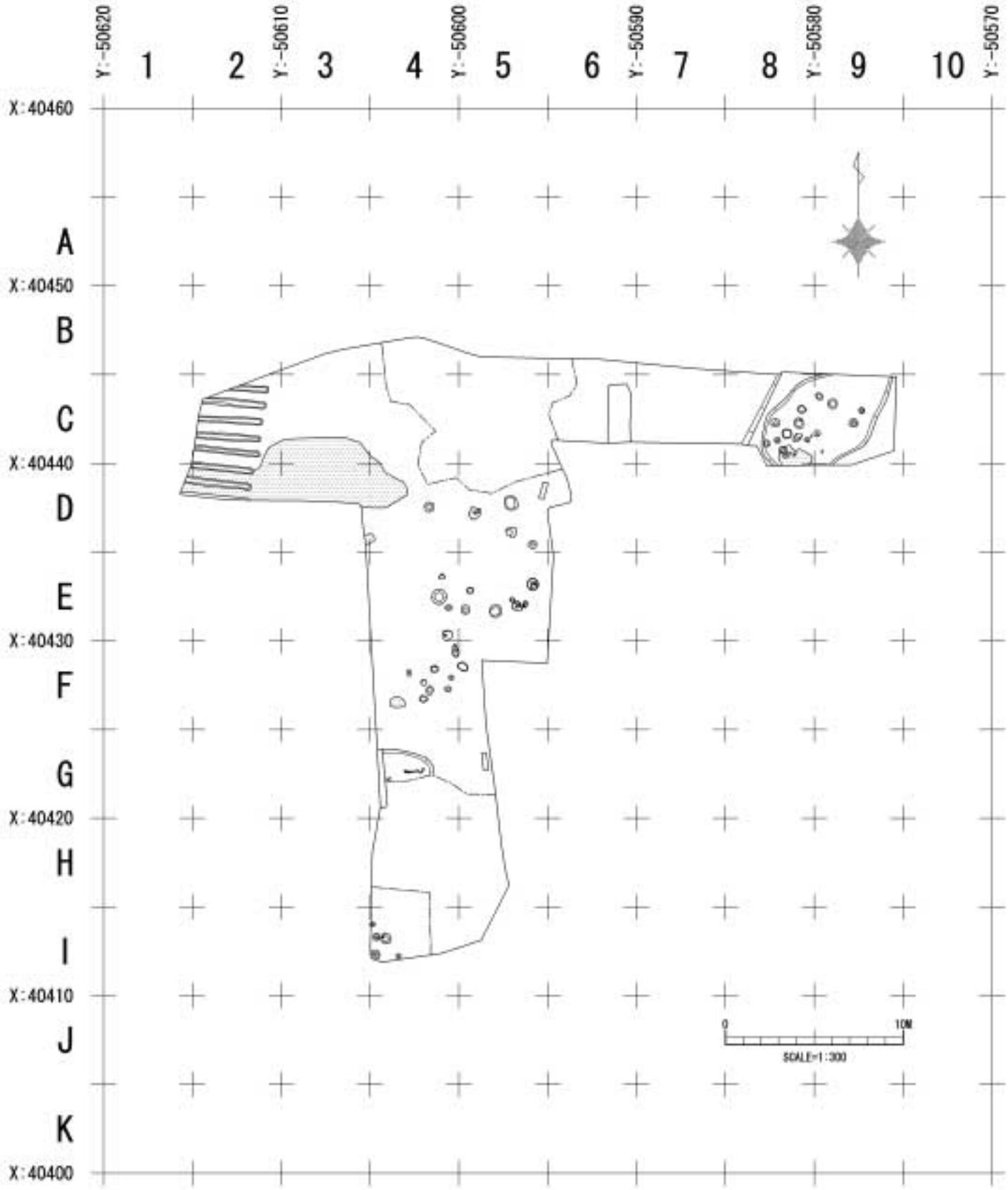
本調査は平成21年（2009）６月15日から７月31日にかけて実施した。調査区には一辺５ｍのグリッドを設定しており、遺構・遺物の所在については基本的にこのグリッド名を使用している。表土除去については、試掘調査によって遺構面の深度及び土層が明らかになったため、重機を用いて遺構面直上までの造成土・堆積土を除去し、遺構検出を人力で行った。遺構精査は、竪穴建物跡については基本的に４分割して掘り下げ、それ以外の遺構については２分割して掘り下げを行った。遺物の取り上げは遺構ごと・グリッドごとに行っているが、必要に応じて出土位置を記録して取り上げたものもある。遺構測量は業者委託としたが、必要に応じ20分の１、10分の１の縮尺で調査員・作業員が現場実測を行っている。記録写真としては主として35㎜フィルムカメラを使用し、補助的にデジタルカメラを併用した。遺物整理時の写真撮影は主としてデジタルカメラを使用している。

層序

塩田若宮遺跡（第２次）の基本土層は第20図に示したとおりである。今回の調査地は学校用地から保育園用地として使用されてきた経緯があり、表土Ⅰ層は層厚約40㎝の造成土で現代のコンクリート片などが混入している。この下にはⅡ層とした暗褐色砂質シルトの厚い堆積が確認され、この層の下面で遺構のプランを確認した。調査区中央付近で土層確認のため実施した深掘りでは、Ⅱ層の下にⅡ’層とした暗褐色砂質シルト層が厚さ約100㎝堆積していることがわかっている。調査前の地表面と河岸段丘下の潮沢川河床とは５ｍ以上の比高があり、調査地北側の河川に面した箇所には土留めの擁壁が設置されていた。調査によって、この土留めでⅠ層（造成土）が支持されていたことが判明し、Ⅱ層は概ね河床方向に向かって緩やかに下る堆積となっていた。このⅡ層の堆積状況から、この場所が造成前は緩斜面であったことがわかる。



第20図　基本土層



第21図　調査区全体図（１／300）

４　遺構

今回の調査で確認された遺構は建物跡３棟（うち敷石住居跡１棟）、土坑・ピット、畝状遺構、焼土がある。確認されたピットは掘立柱建物跡になる可能性を考慮して組み合わせを検討したが、建物跡として認識できるものはなかった。焼土は周囲に遺構の掘り込があるか丹念に検出を行ったが、プランが確認できたものはない。

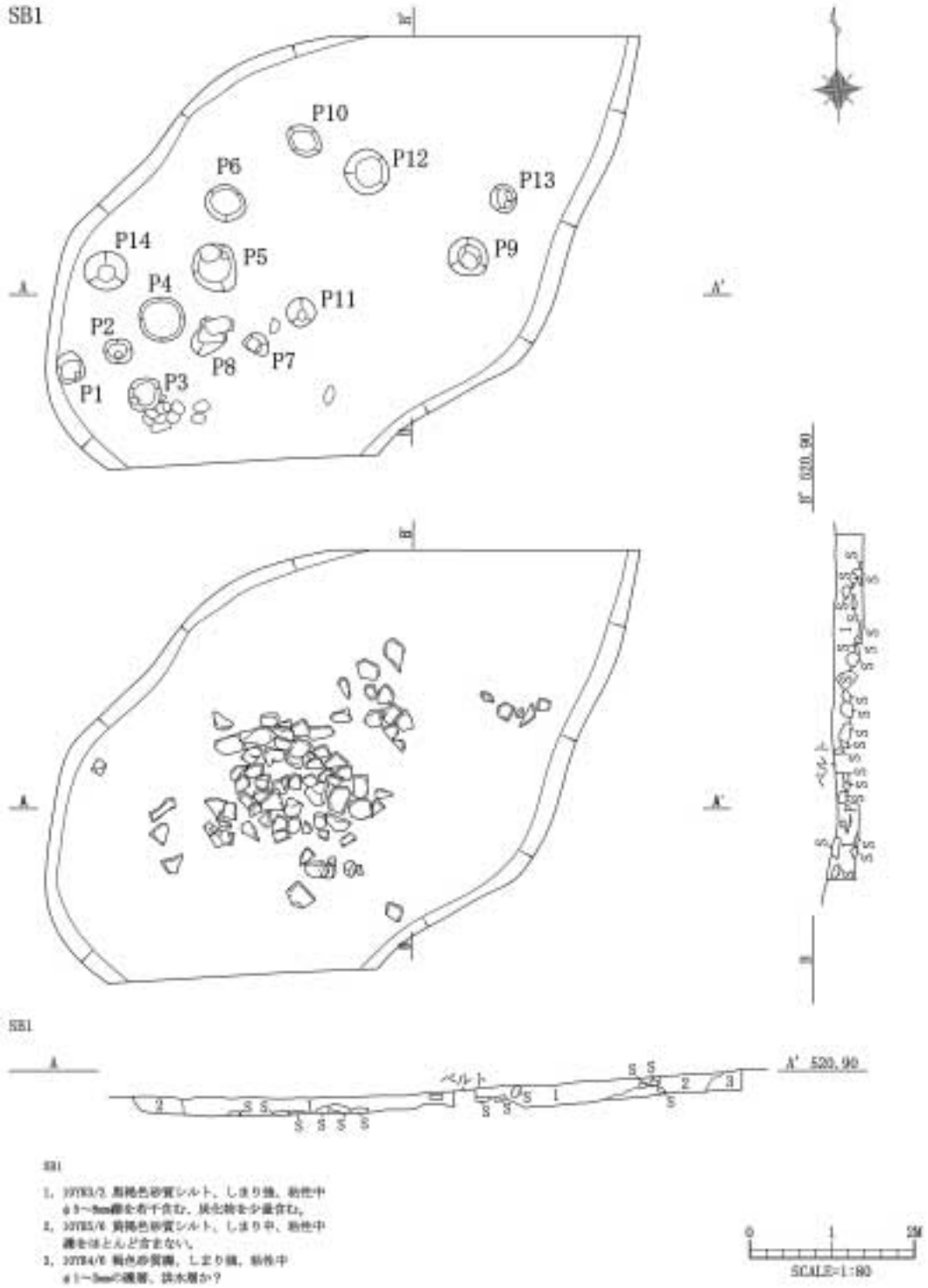
SB１

Ｃ８・Ｃ９グリッドに位置する、敷石住居跡と考えられる遺構である。表土除去時に多量の礫及び縄文土器が出土したため人力による遺構検出に努めたが、明確な平面形を確認することが困難であった。そこで平面的な調査と同時に土層確認用にサブトレンチを設定して、断面観察の情報も参考にしながら遺構の輪郭をつかむこととした。SB１の南側は調査区外になり、北側は地中から既設の擁壁と裏込めの砂層が見つかっている。この擁壁と砂層は構造的に脆弱であり崩落の危険があるため、北側への調査区拡張はできなかった。したがってSB１の南北の広がりは確認していない。また、西壁は一応の立ち上がりを確認できたが、東壁はほぼ撹乱の位置と一致しており、僅かに埋土３層が確認できたのみである。したがって平面形は縄文中期後葉から後期前半の敷石住居に多く見られる円形・楕円形あるいは柄鏡形を呈すると考えられるが不明確である。

埋土は１～３層を確認した。１層は黒褐色砂質シルトでしまりが強く、径５～８㎜の小礫を若干含んでいる。この層は遺構中央から壁際近くまでの大部分に堆積しており、本遺構に特徴的な多量の礫及び焼土ブロック、獣骨と考えられる骨片、少量の炭化物を含んでいる。このうち包含される多量の礫は丸みをおびた河床礫が主体で、大きさは約20～30㎝のものが多かった。２層は西側の壁際に堆積しており、黄褐色シルトで礫をほとんど含まない。精査当初は遺構外の堆積土の可能性を考えたが、土器・石器を包含する点、床面にピットが確認できる点から遺構内の堆積層として確認できた。３層は遺構内東側に堆積する褐色砂礫層で、径１～２㎜の小礫で構成される。洪水などの作用による堆積の可能性が高い。遺物をほとんど包含しない層である。SB１の掘り込みは明確に確認できていないが、土層観察用ベルトで観察できた掘り込み面から敷石下端までの高さを計測したところ約20㎝であった。

床面の敷石は上面が平坦になるよう設置されていた。敷石住居は明科地域の発掘調査のうち、ほうろく屋敷遺跡、こや城遺跡、北村遺跡及び塩田若宮遺跡（第１次）で確認されているが、敷石の残存状態の良好なものは少なく、多くは敷石が数個残っている程度である。その点、SB１の敷石は平面形こそ不明確なものの比較的残存状態がよいといえる。敷石に使用されている礫は、埋土１層に包含されていた礫と同様の河床礫で直近の犀川や潮沢川で採取できると考えられるものである。なお、本遺跡の東方は筑摩山地で、調査区付近にも第三紀層の露頭が見られるが、SB１で観察できる石質とは明確に異なる。床面の施設としては14箇所のピットを検出した。調査範囲が限られていたため、建物跡全体の中でピットがどのように配列されるかは明らかではないが、敷石箇所を避けるように壁際付近に掘り込まれているピットの存在も確認できた。炉跡などの火処は確認できなかった。ただし、埋土１中からは数箇所の焼土ブロックを検出している。

遺物は縄文時代中期後葉から後期初頭の土器（口縁部1,230個体、底部263個体）と打製石斧を主とした石器・石片が多量に出土した。また、敷石除去後に床面を精査したところ、床下から土器２個体が横位で出土している。

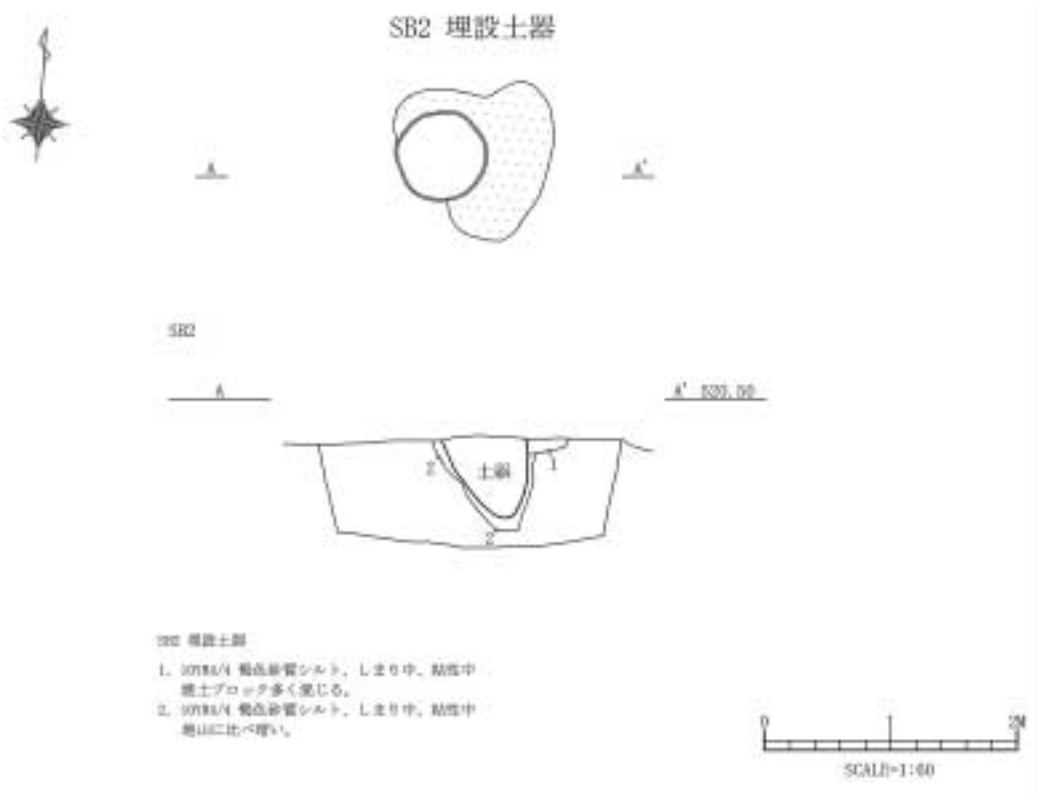

SB1
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
A
A'
B
B'
ベルト
A' 520.90
SB1
1. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト、しまり強、粘性中
2. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR4/6 褐色砂質土、しまり強、粘性中
0
1
2M
SCALE=1:80

第22図　SB１実測図

SB２

Ｄ５グリッドに位置する。埋甕地床炉が検出されたため、これを中心に遺構検出を行ったが明確な掘り込みなどは確認できなかった。したがって、積極的に建物跡と認定できるものではないが、周囲からピット群が検出されており、建物跡であった可能性が考えられる。

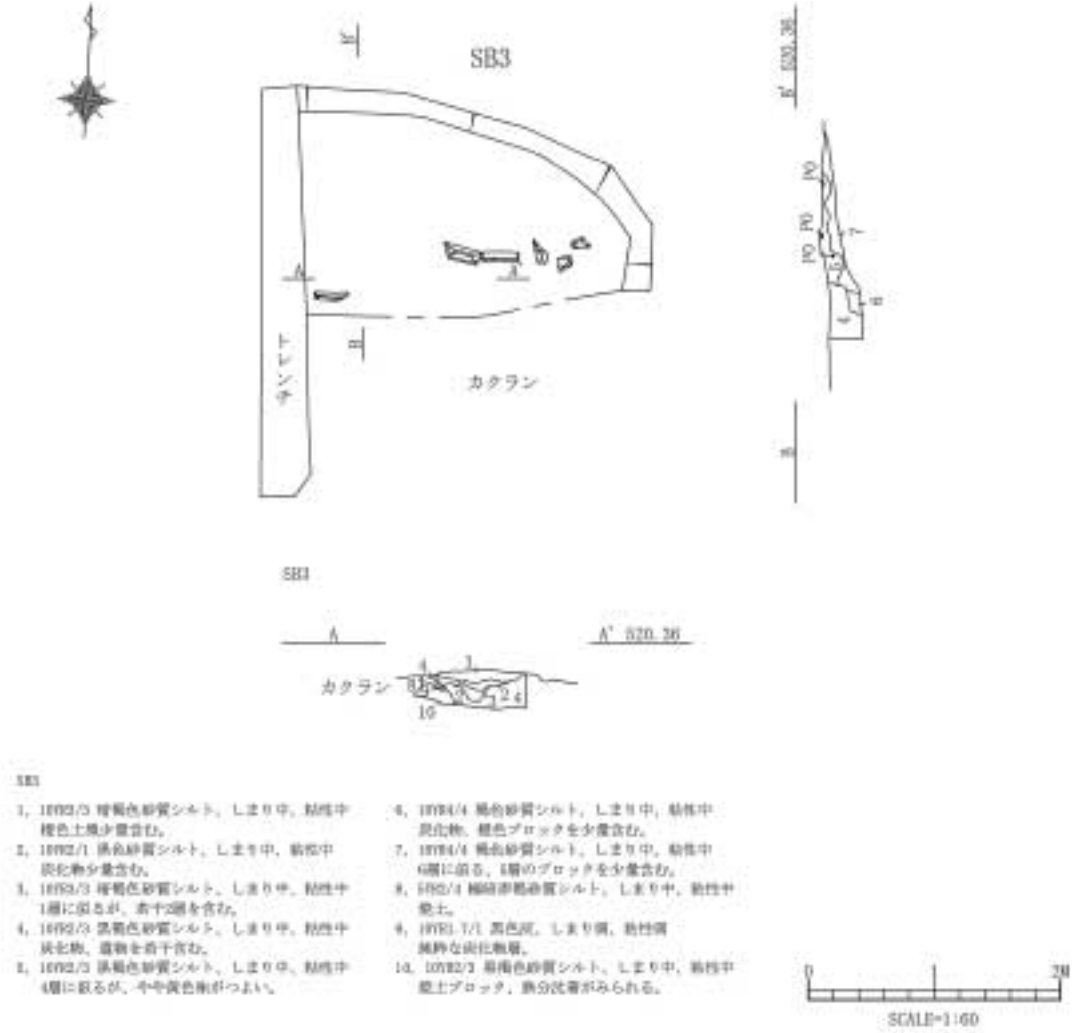
検出面では土器縁辺部の東半分に焼土の分布が認められた。この焼土は断面観察でも確認され、厚さは約10cmに及ぶ。埋設時の掘り方は、断面の観察から土器がほぼ納まる程度の掘削を行っていることがわかる。なお、土器内の土壌は回収して室内で篩にかけたが微細遺物などは検出していない。



第23図　SB２実測図

SB３

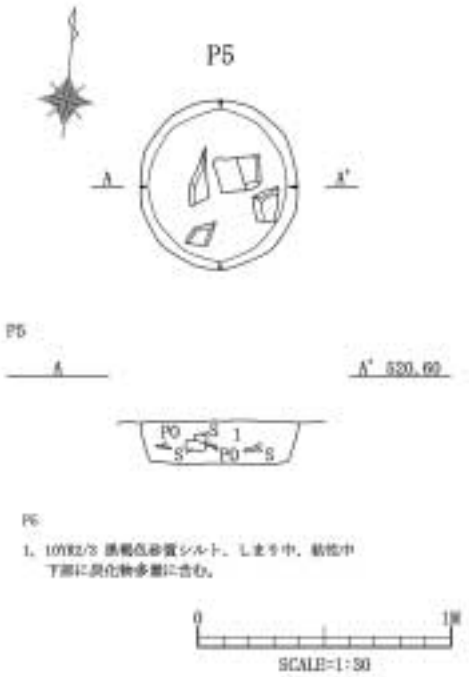
Ｉ４グリッドに位置する。ほぼ円形を呈する竪穴建物跡と考えられるが、西半が調査区外にかかり、さらに撹乱が激しかったため、遺構北東部分を全体の４分の１程度しか調査できていない。壁の立ち上がりは緩やかで約30cmを測り、全体としてすり鉢状の窪みとなって残存していた。調査時には床面検出のため南北にサブトレンチを設定して土層断面観察を試みたが、湧水によって断面観察は困難であった。プラン中央付近で焼土・炭化物層の堆積を確認したため炉跡の可能性を念頭に精査を行ったが、炉跡は確認できていない。埋土からは少量であるが骨片も検出している。



第24図　SB３実測図

Ｐ５

Ｅ５グリッドに位置する土坑で、今回の調査で唯一の平安時代に属する遺構である。平面形は直径約60cmの円形を呈し、深さは20cmほどであった。土坑底部には炭化物・礫・土師器が埋設されており、埋土は黒褐色砂質シルトである。炭化物は木炭で、底部に厚い。ここからは放射性炭素年代測定用のサンプルを採取して絶対年代の測定を実施した（後述）。土師器は破損した状態で出土し、完形に復元できなかった。このことから、埋設時には既に破損していたものといえる。



第25図　Ｐ５実測図

５　遺物

縄文時代の土器

塩田若宮遺跡（第２次）出土縄文土器について、器形・器種・文様の各分類基準は北村遺跡発掘調査報告書のⅠ期（加曽利ＥⅢ式並行期）～Ⅲ期（称名寺式並行期）分類に準じた（長野県埋蔵文化財センター1993）。

器形は深鉢形・鉢形・注口深鉢形・両耳壺に分類される。これら４種の器形はさらに口縁部の形態や文様帯の位置から以下の12器種に細別した。

Ａ１	口縁が平らで、胴上部がキャリパー形ないし直線的に開く。口辺部に文様帯をもつ。
Ａ２	口縁が平らで、胴上部がキャリパー形ないし直線的に開く。口辺部に文様帯をもたない。
Ｂ１	口縁が波状で、胴上部がキャリパー形ないし直線的に開く。口辺部に文様帯をもつ。
Ｂ２	口縁が波状で、胴上部がキャリパー形ないし直線的に開く。口辺部に文様帯をもたない。
Ｃ１	口縁に突起が付き、胴上部がキャリパー形ないし直線的に開く。口辺部に文様帯をもつ。
Ｃ２	口縁に突起が付き、胴上部がキャリパー形ないし直線的に開く。口辺部に文様帯をもたない。
Ｄ１	口縁が大波状で、胴上部から口辺部にかけてキャリパー形。有孔橋状突帯をもつ。
Ｄ２	口縁が大波状で、胴上部から口辺部にかけてキャリパー形。有孔橋状突帯をもたない。
Ｅ１	口縁は平らで、胴下部から胴中部に向けて直線的に開く。胴上部に至って内曲する。
Ｅ２	口縁は平らで、胴下部から胴中部に向けて直線的に開く。口縁に向けて直線的に開く。
Ｆ	口縁は平らで口辺部がやや内湾するが胴下部から上部にむけて直線的に開く。
Ｇ	口縁は平らで、胴が張り口辺部が外折する。
Ｈ	胴が張り、口縁に向けて内湾する。口径に比して器高が同じか小さい。
Ｉ	胴部が張り、口辺部には一対の橋状把手をもつ。注口は把手の下に付く。
Ｊ	縁は平らで胴部が張る。一対の環状把手が付く。

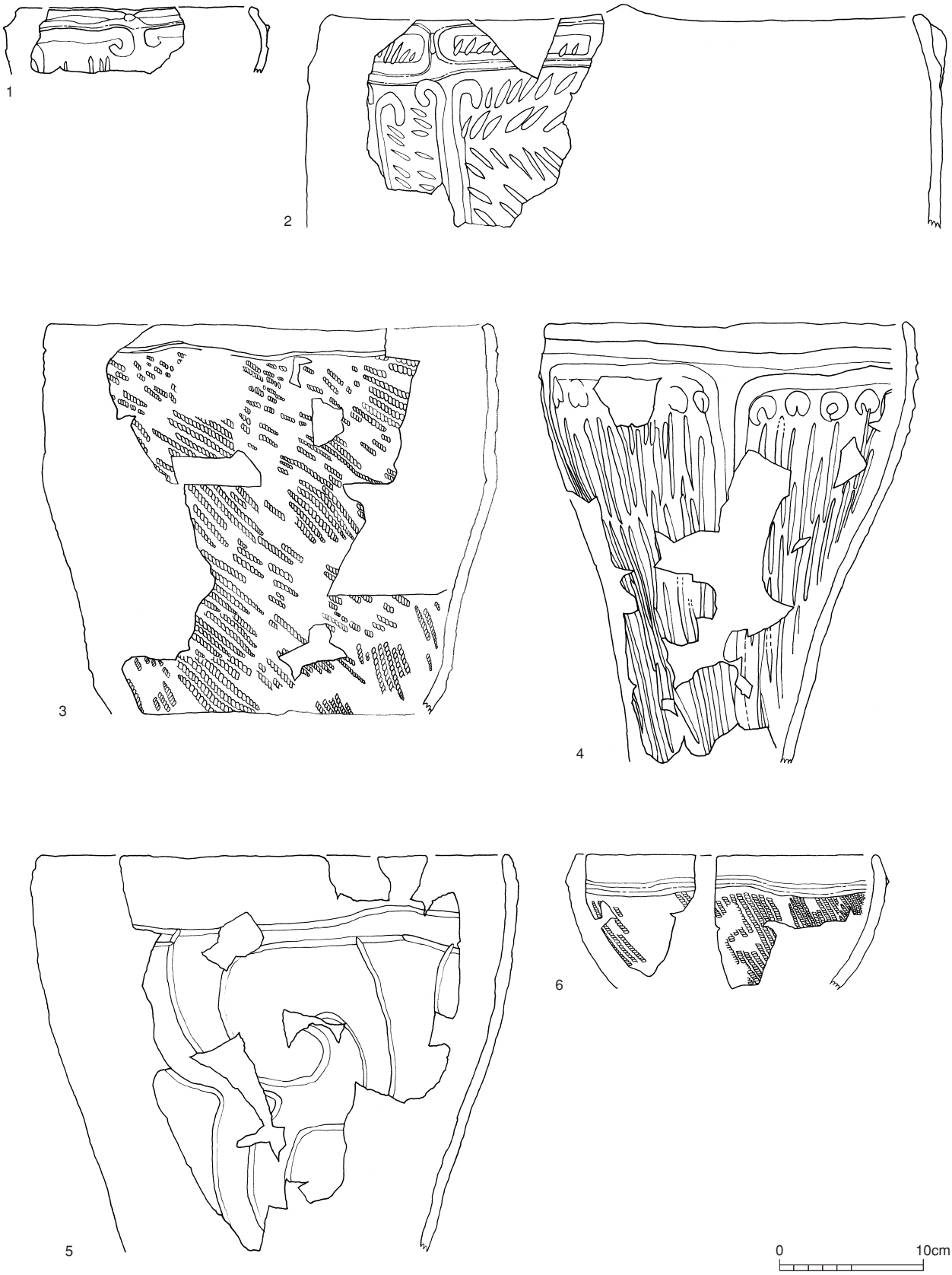
文様は、施文手法と文様意匠の組み合わせにより以下の22類型に細別される。

１ａ	口辺部に横位連結渦巻文を配し、渦巻間に楕円区画文をもつ。胴部は沈線により縦に分割される。口辺部の区画内や胴部に縄文が充填される。
１ｂ	口辺部に横位連結渦巻文を配し、渦巻間に楕円区画文をもつ。胴部は沈線により縦に分割される。口辺部の区画内や胴部に綾杉文が施文される。
２	口辺部に渦巻文と楕円区画文を交互に配する。胴部は沈線により縦に分割される。
３ａ	口辺部に渦巻文が配され、これを繋ぐ隆線が口辺部と胴部の文様帯を分割している。胴部に縄文が施される。
３ｂ	口辺部に渦巻文が配され、これを繋ぐ隆線が口辺部と胴部の文様帯を分割している。胴部に綾杉文が施される。
４	口辺部に楕円区画文を並べる。胴部は沈線により縦に分割される。
５	口辺部と胴部の文様帯を分割する隆線が角状突起に連結している。口辺部には渦巻文などを配し、胴部は逆「U」字の沈線で区画した上、区画内に縄文を充填している。
６	口辺部と胴部の文様帯を２条の隆線で分割し、隆線間に刺突を並べる。胴部は多条の沈線で縦に分割した上、縄文を充填している。

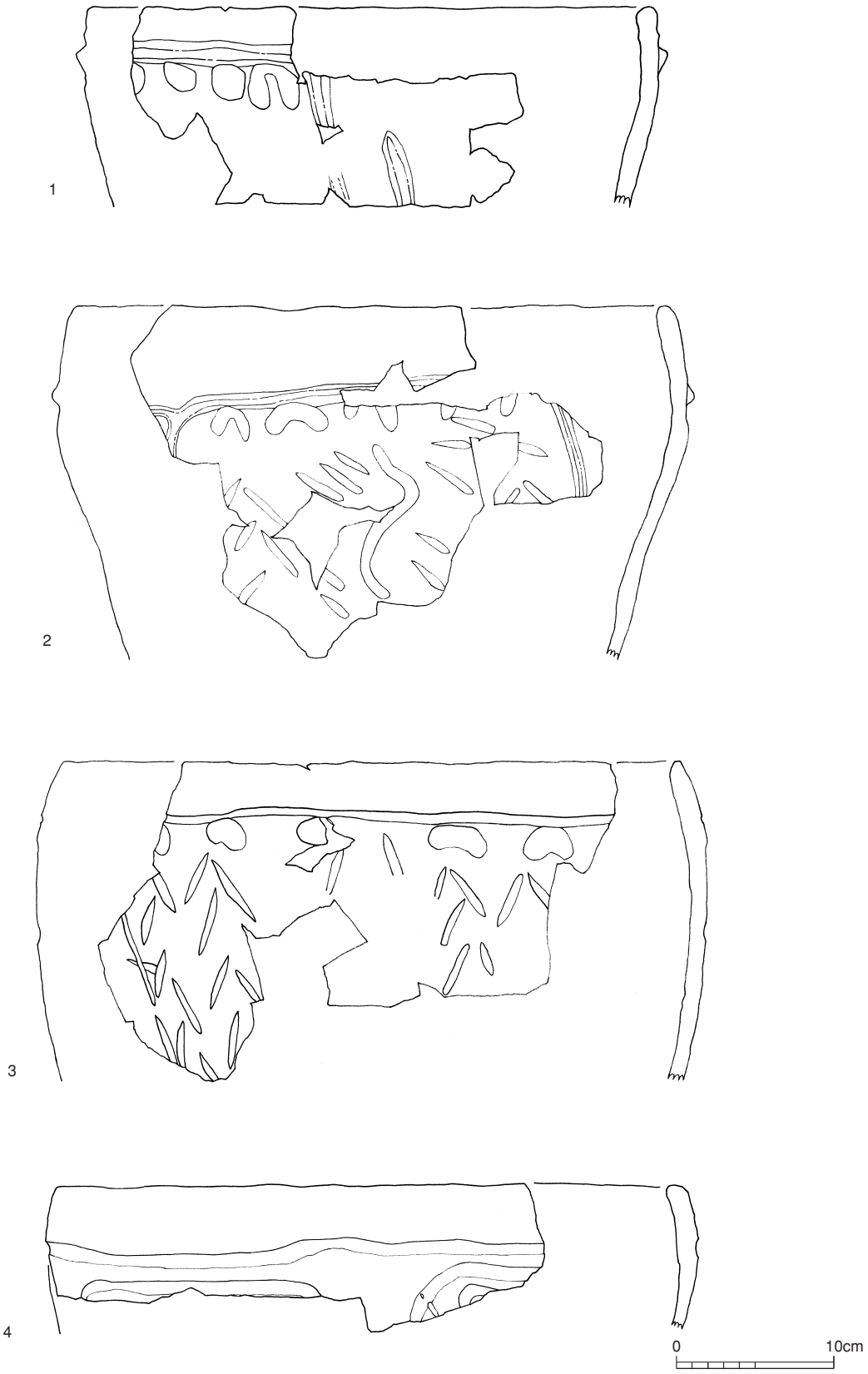
7ａ　口辺部に文様はなく、胴部を逆「U」字の沈線で縦に区画し、縄文を充填する。
7ｂ　口辺部に文様はなく、胴部を逆「U」字の沈線で縦に区画し、綾杉文を施文する。
8ａ　胴部の逆「U」字が縦区画の意味を喪失しているもの。逆「U」字が二重の沈線で描かれ、沈線間または外に縄文が充填される。
8ｂ　胴部の逆「U」字が縦区画の意味を喪失しているもの。逆「U」字が繊細な沈線になり、地文がほとんどみられない。
9ａ　胴部のくびれ付近で文様意匠が変化している。上部と下部の組み合わせが、「U」字と逆「U」字からなる。
9ｂ　胴部のくびれ付近で文様意匠が変化している。下部の逆「U」字が上部の「U」字間に貫入している。
9ｃ　胴部のくびれ付近で文様意匠が変化している。上部と下部の組み合わせが、楕円と逆「U」字からなる。
9ｄ　胴部のくびれ付近で文様意匠が変化している。上部と下部の組み合わせが、横「S」字あるいは大柄な「J」字と逆「U」字からなる。
10　口辺部を巡る一条の線から胴部に直線を垂下させ縦に分割している。隆線を用いる場合と、沈線を用いるものがある。いずれも胴部には縄文を充填している。
11　口辺部に有孔橋状突帯文をもつ。胴部は楕円・三角・四角文で区画され、縄文が施される場合が多い。
12　胴部に大柄な渦巻文を描き、綾杉文を充填している。
13　口辺部から胴部に沈線で並走する直・曲線を描いているもの。沈線間に縄文・刺突文をもつものの他、無文の場合がある。
14　胴部の縦長に向き合う弧線間に振幅の細かい蛇行懸垂を施している。沈線は太くて深い。
15　口辺部に平行する沈線を横走させて、その間に斜線や波線などを配する。胴部は条が縦方向に走るよう縄文を施したものが多い。
16　胴部に文様意匠がない。無文のものの他、縄文・撚糸文・綾杉文または雨垂状の短沈線文・刺突文などがみられる。

今回の調査で量・質共に特筆すべきはSB１出土土器である。SB１からは口縁部破片で1,230個体、底部破片で263個体を数える量の土器が出土している。第28図５及び第31図２が敷石撤去後に床下から出土した土器で、これらから本遺構の時期は『長野県史』の時代区分に準じ縄文中期後葉Ⅳ期と考えられる（長野県編1988）。北村遺跡SB572から第28図５に比較しうる埋甕が得られており、北村遺跡第Ⅰ期（加曽利ＥⅢ式並行期）に比定されている（長野県埋蔵文化財センター1993）。

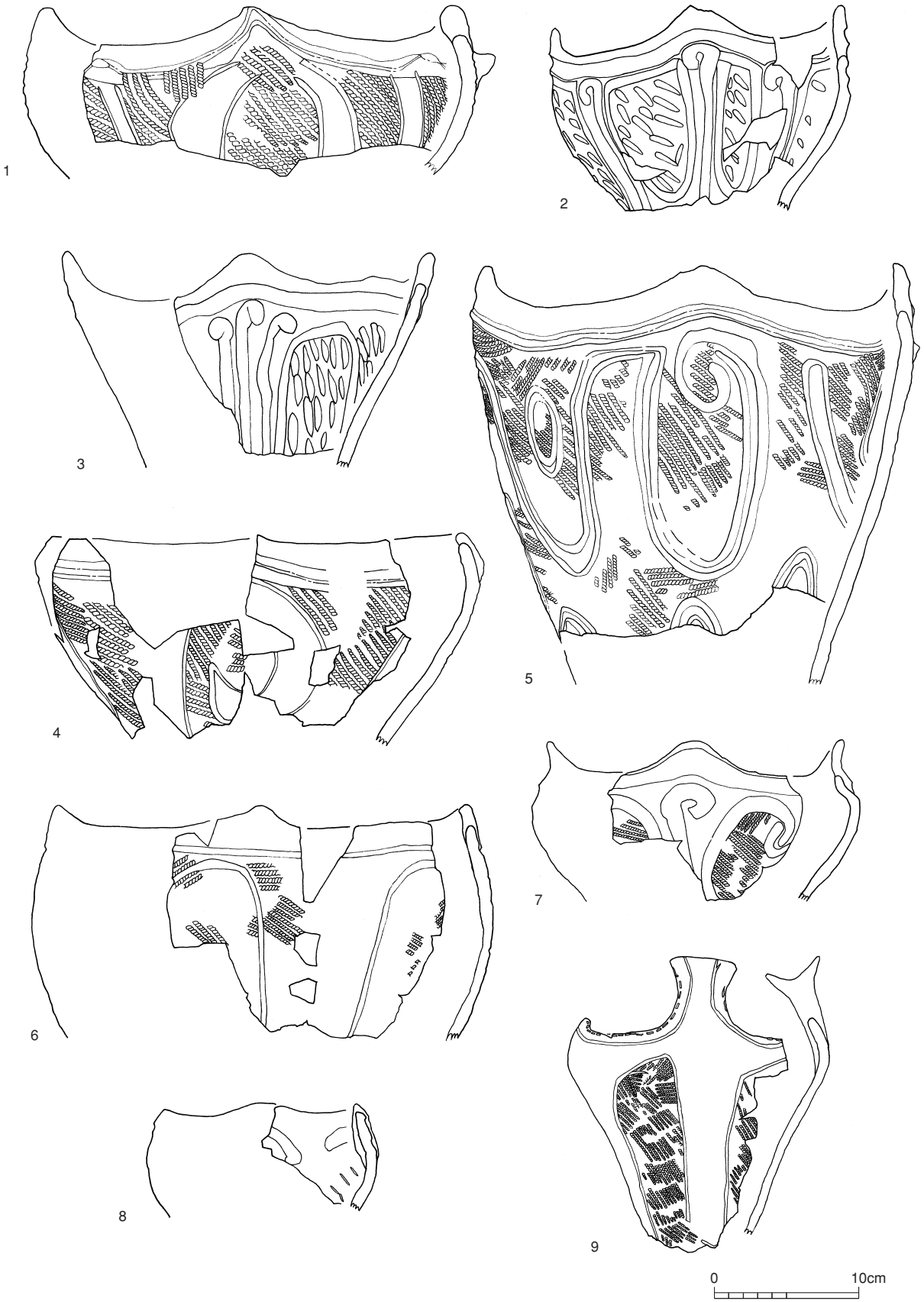
SB１出土土器全体を総見すると、この段階に後続する資料もある程度含まれており、比較資料として山形村三夜塚遺跡SK099（山形村教育委員会2002）や松本市一ツ家遺跡土坑1425（松本市教育委員会1997）、安曇野市こや城遺跡第１～３号住居（明科町教育委員会1979）、北村遺跡SB560、SB580（長野県埋蔵文化財センター1993）などが挙げられる。また、縄文中期後半から後期初頭にかけて特徴的な釣手付深鉢の釣手部分も複数出土したため、抽出して資料化した（第33図１）。釣手付深鉢は大町市一津遺跡Ａ地区で完形品の出土がある（大町市教育委員会1990）。後期前半とされたこの資料には炭化物の付着が認められたため煮沸具と考えられている。



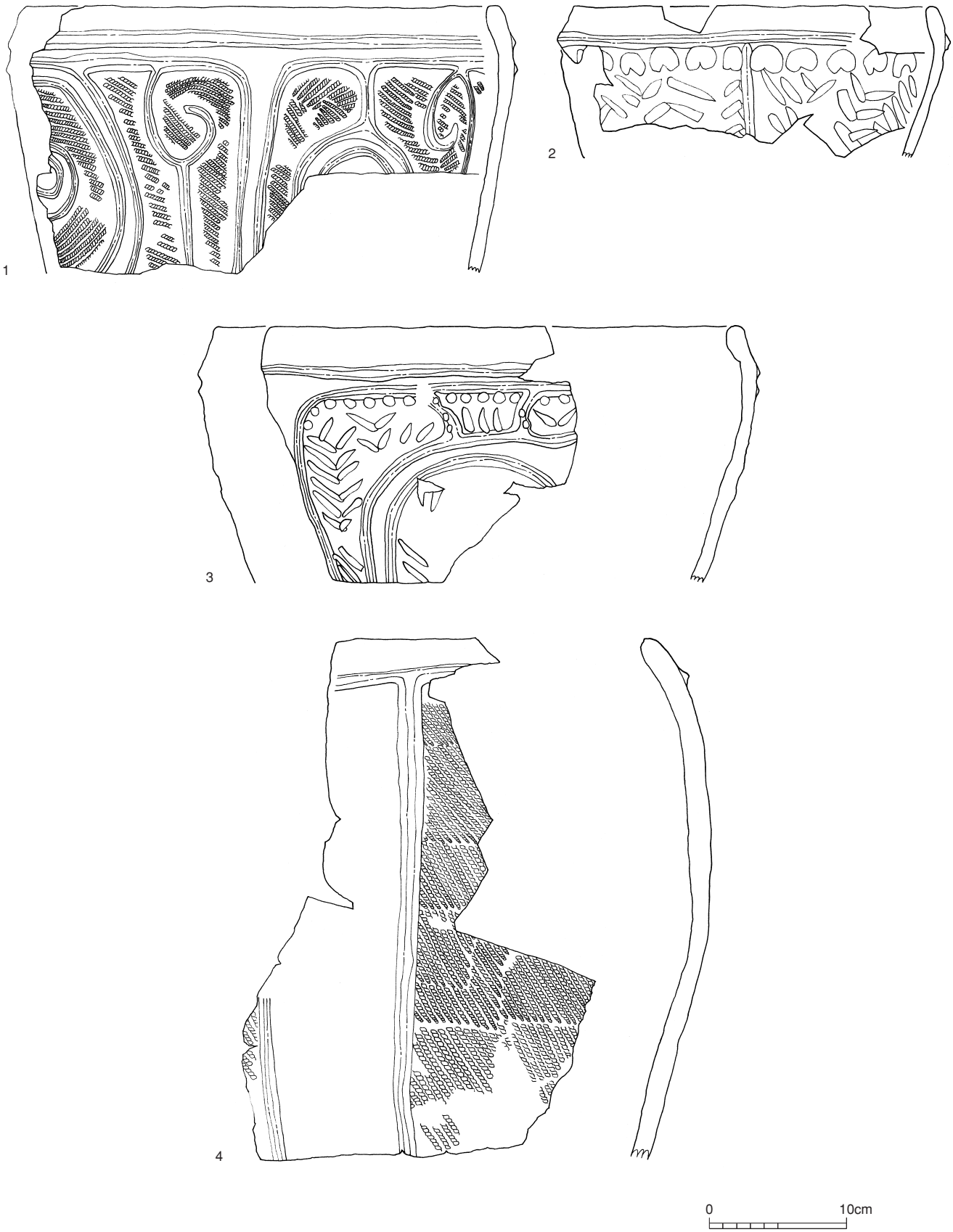
第26図　縄文時代の土器１



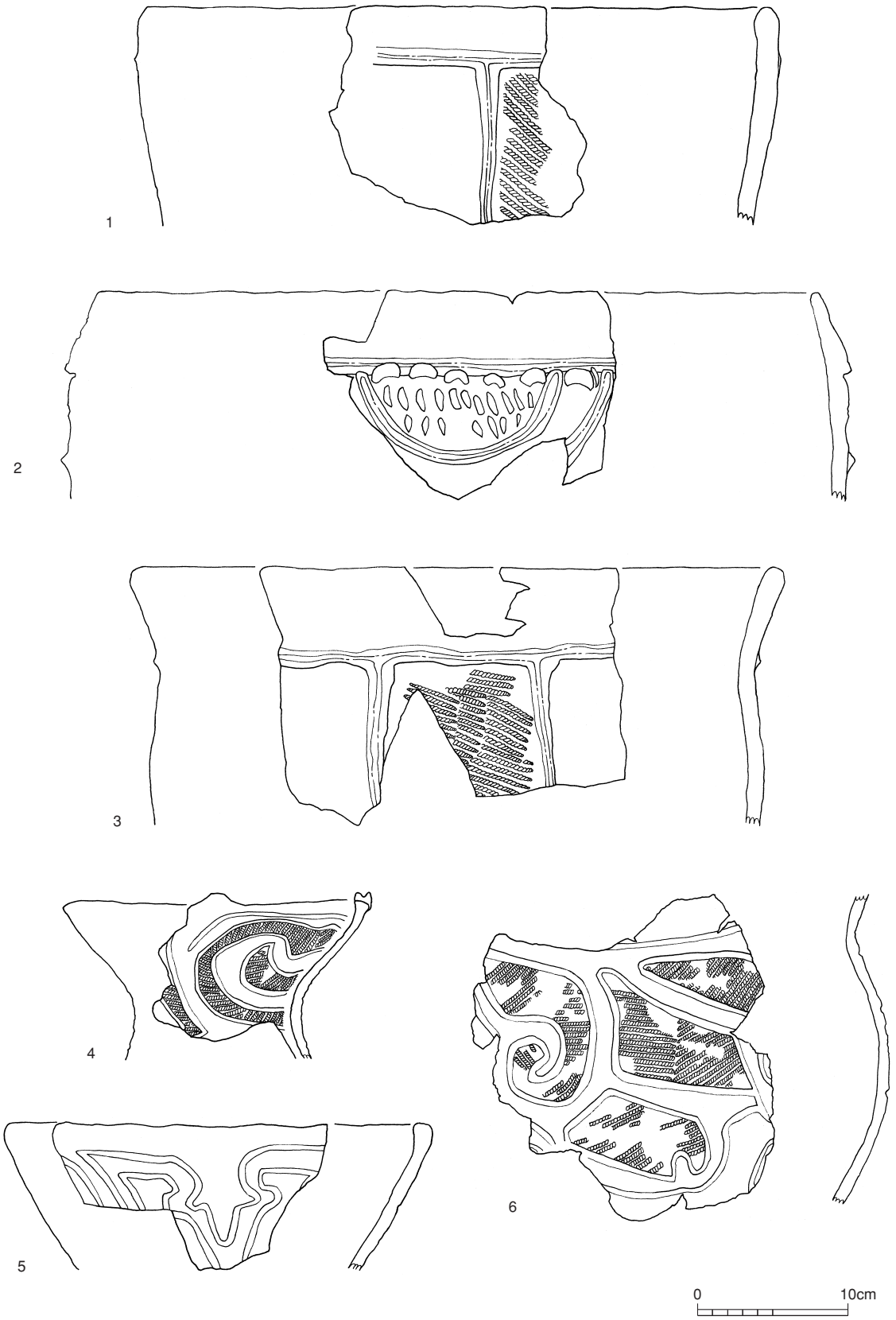
第27図　縄文時代の土器２



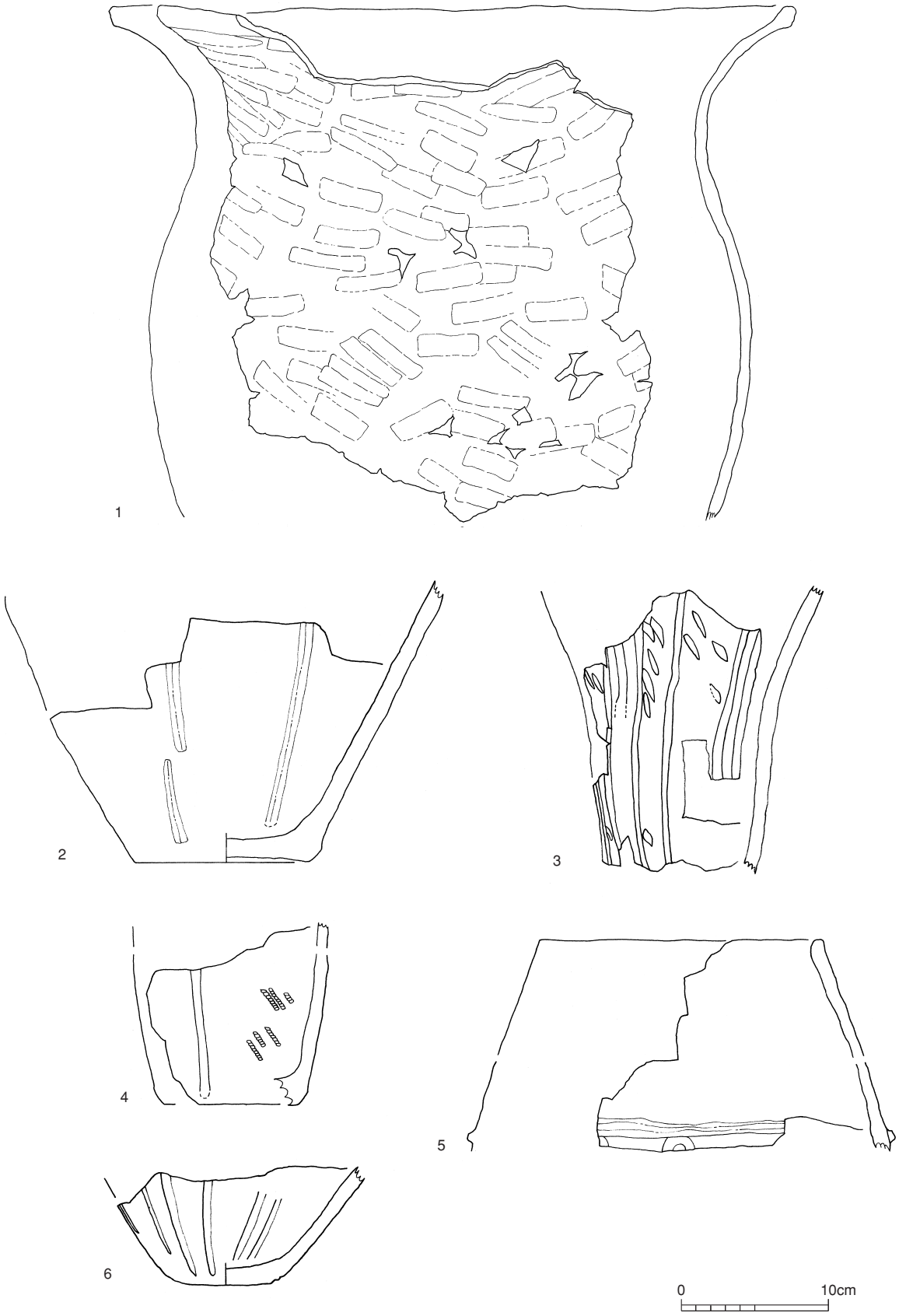
第28図　縄文時代の土器３



第29図　縄文時代の土器４

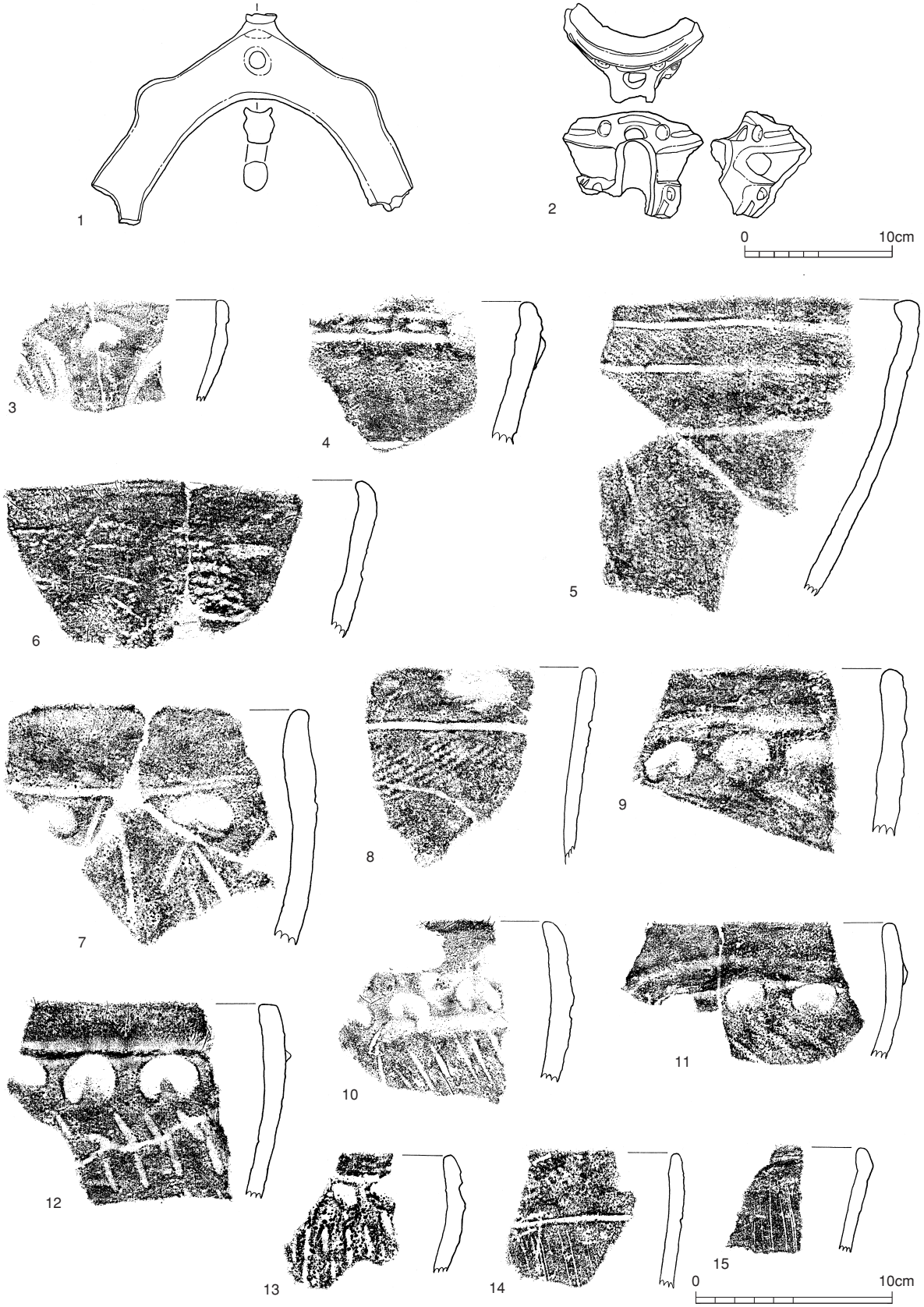


第30図　縄文時代の土器５

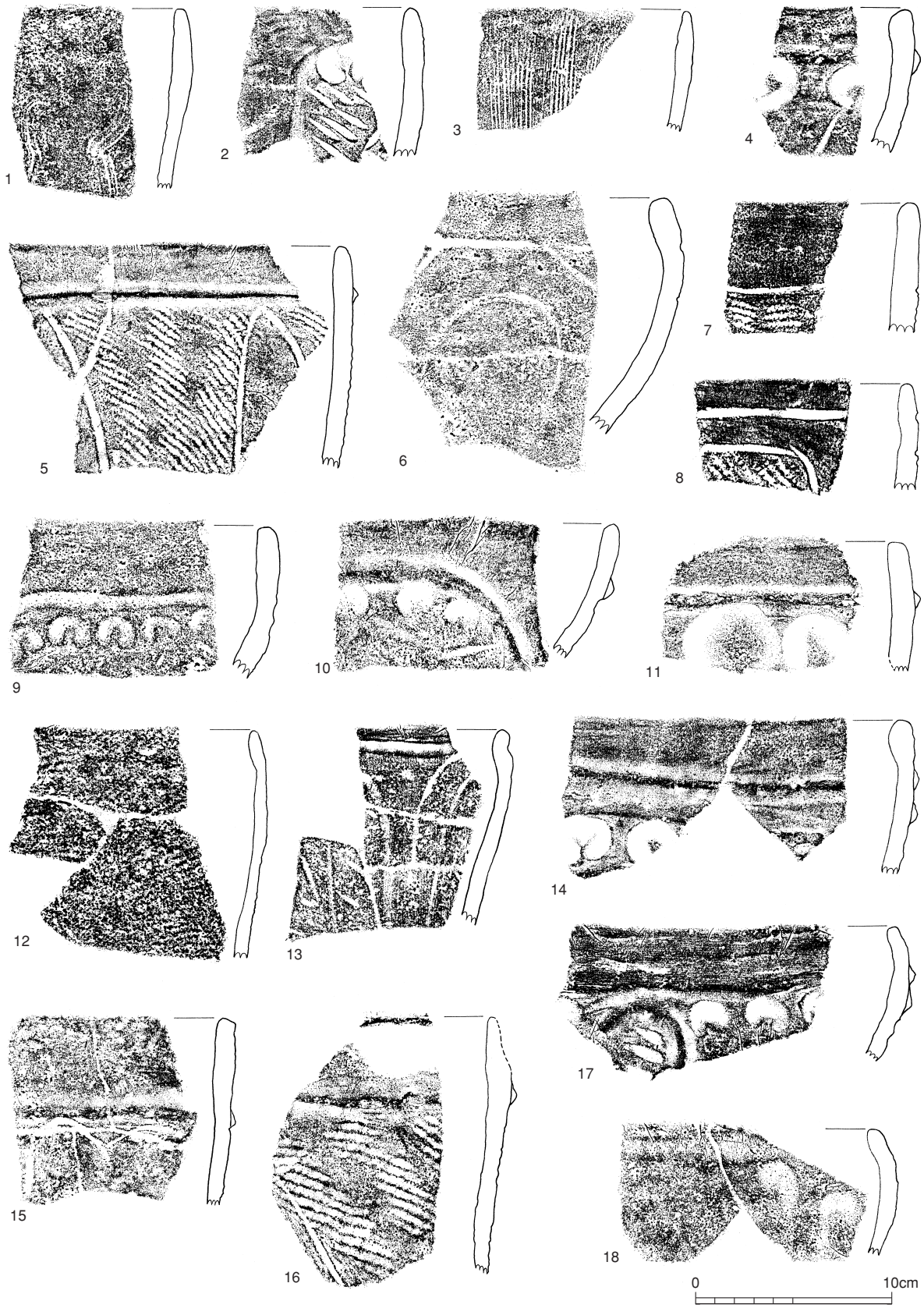


第31図　縄文時代の土器６

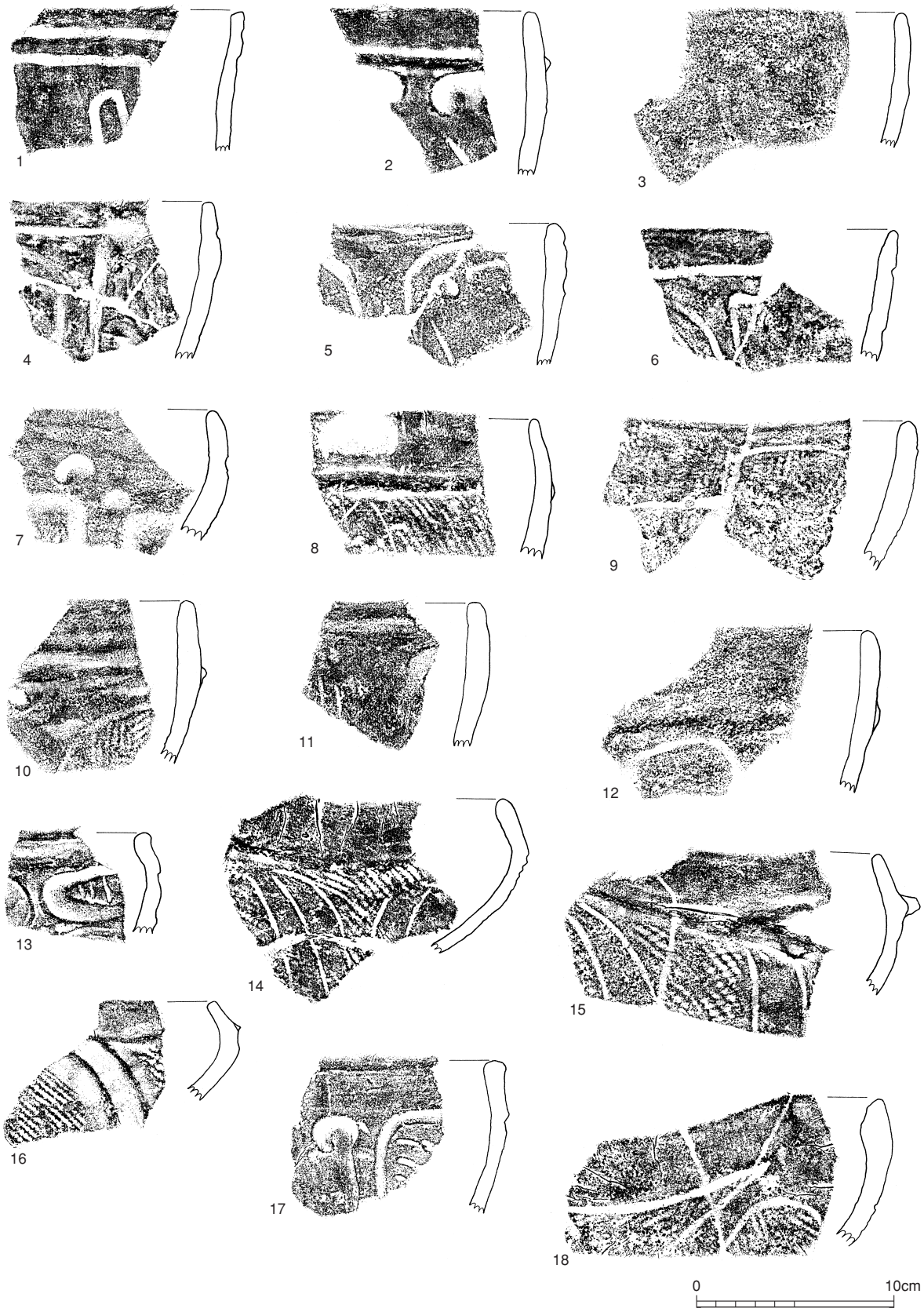
第32図　縄文時代の土器７



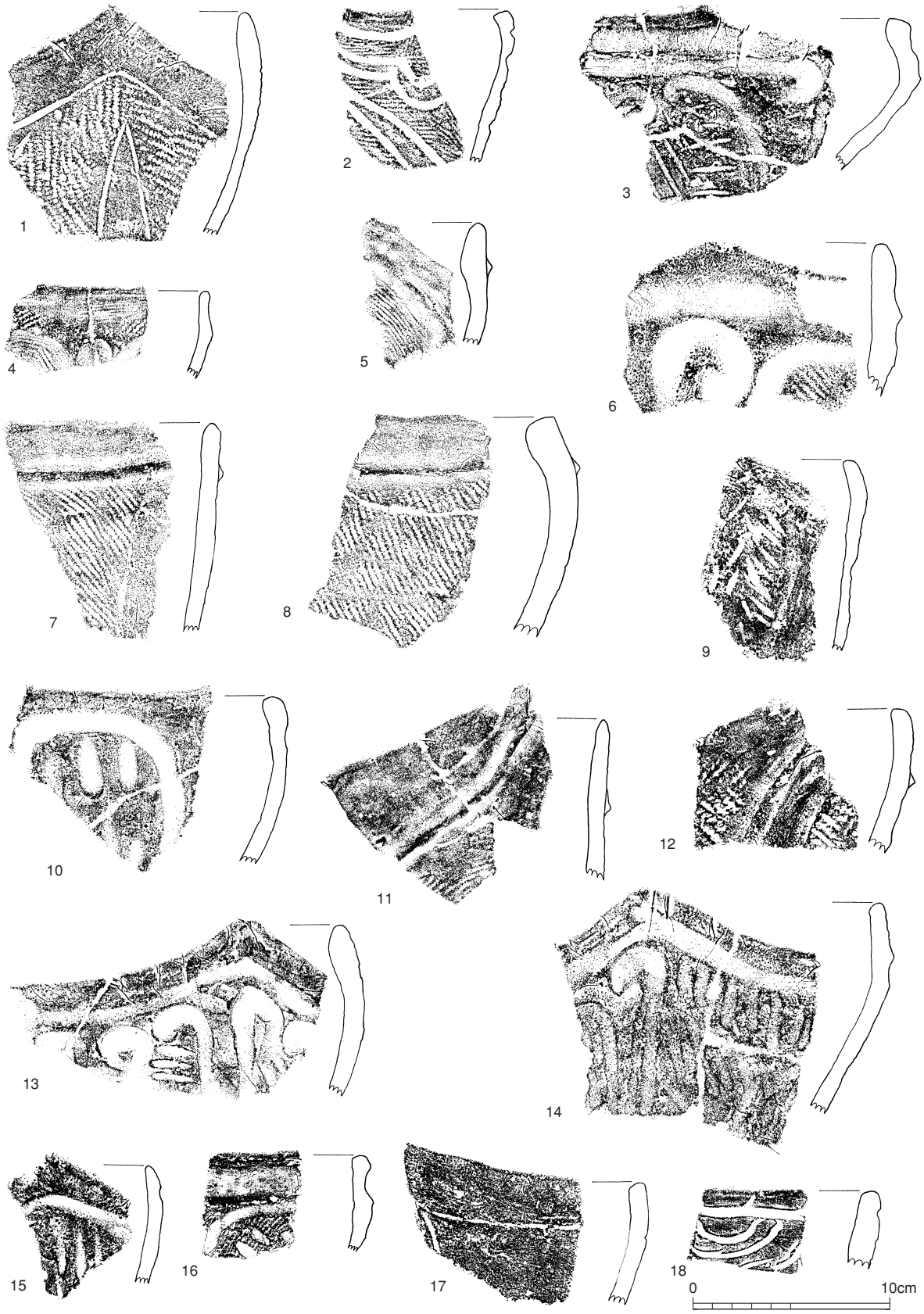
第33図　縄文時代の土器８



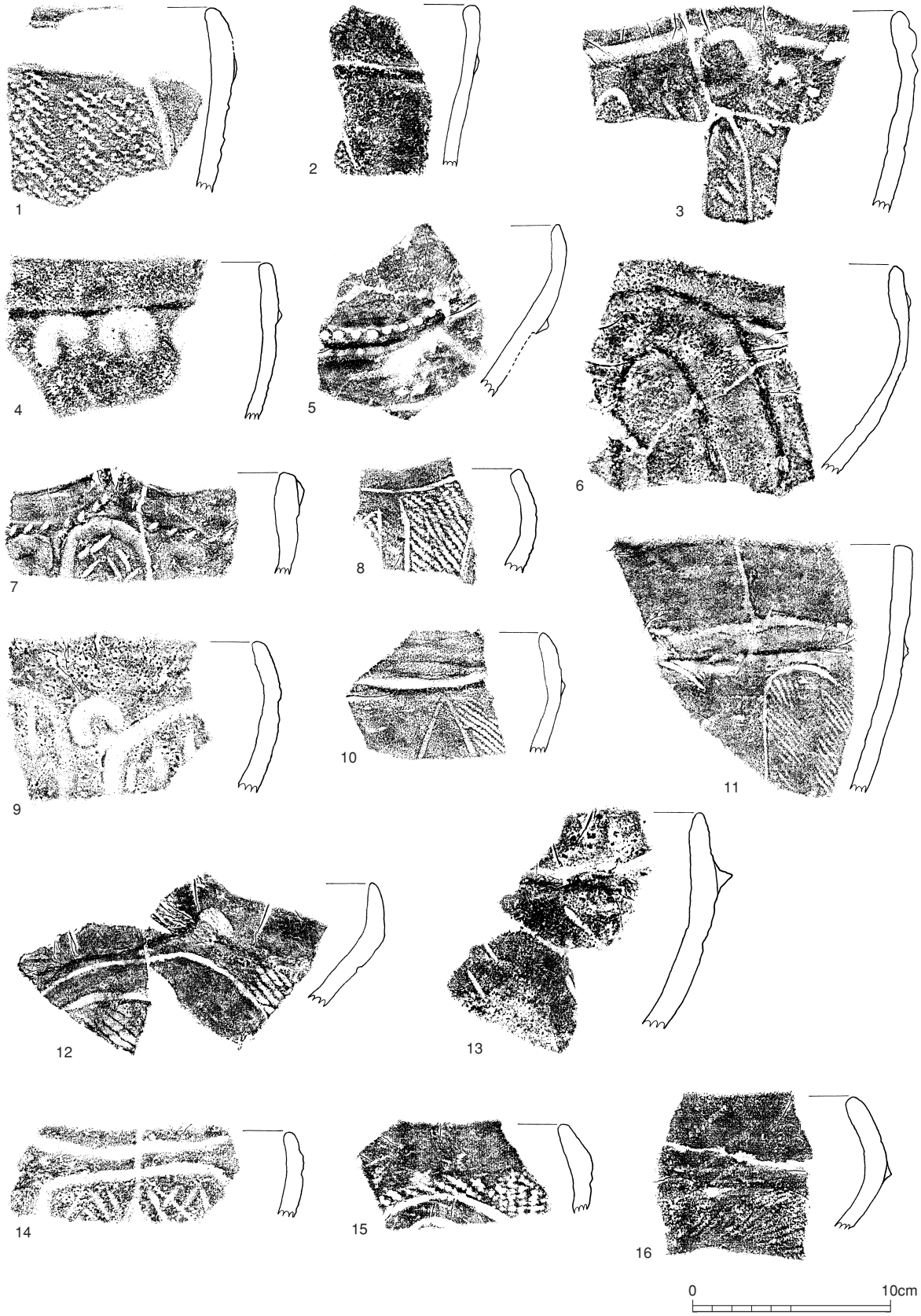
第34図　縄文時代の土器９



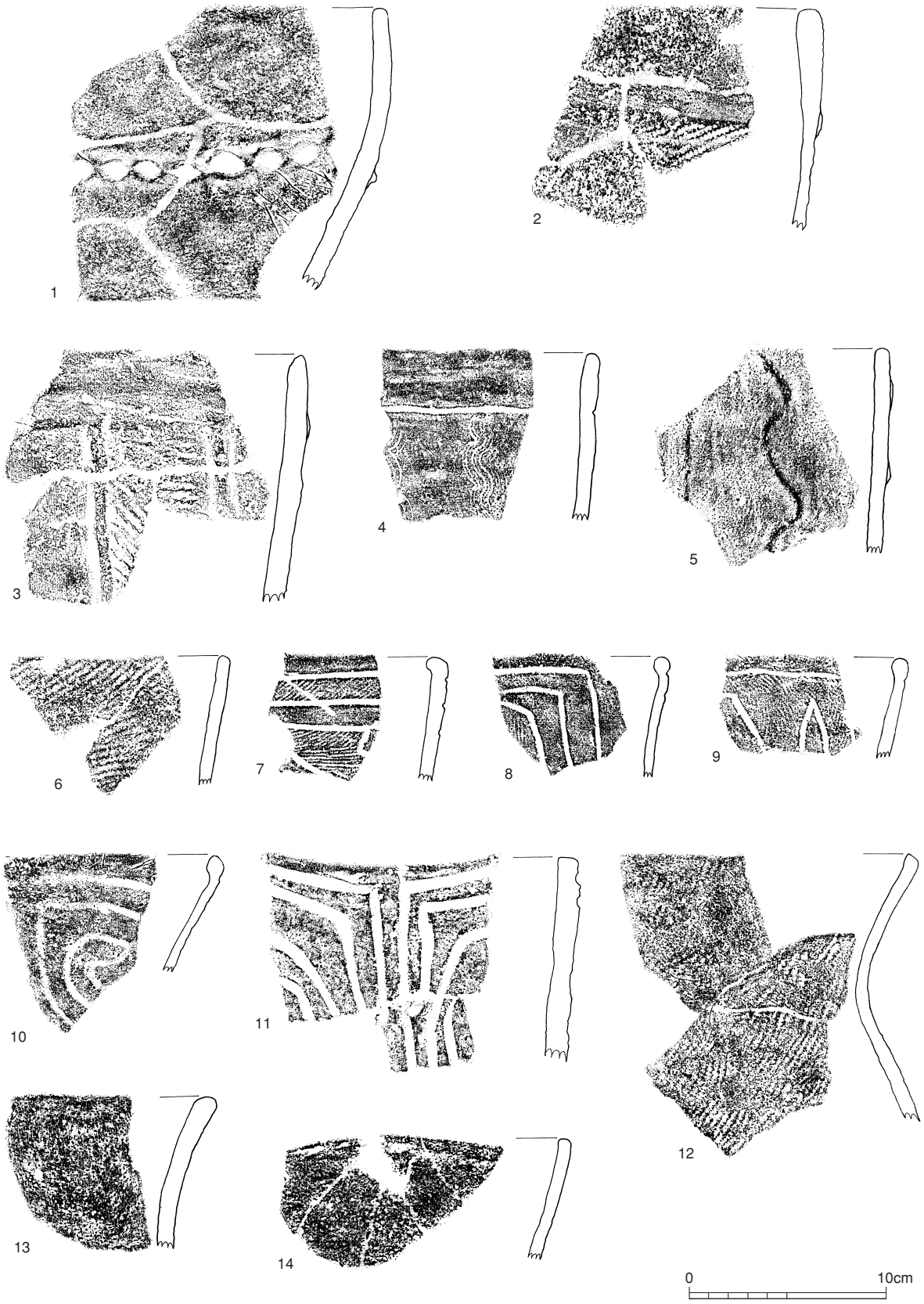
第35図　縄文時代の土器10



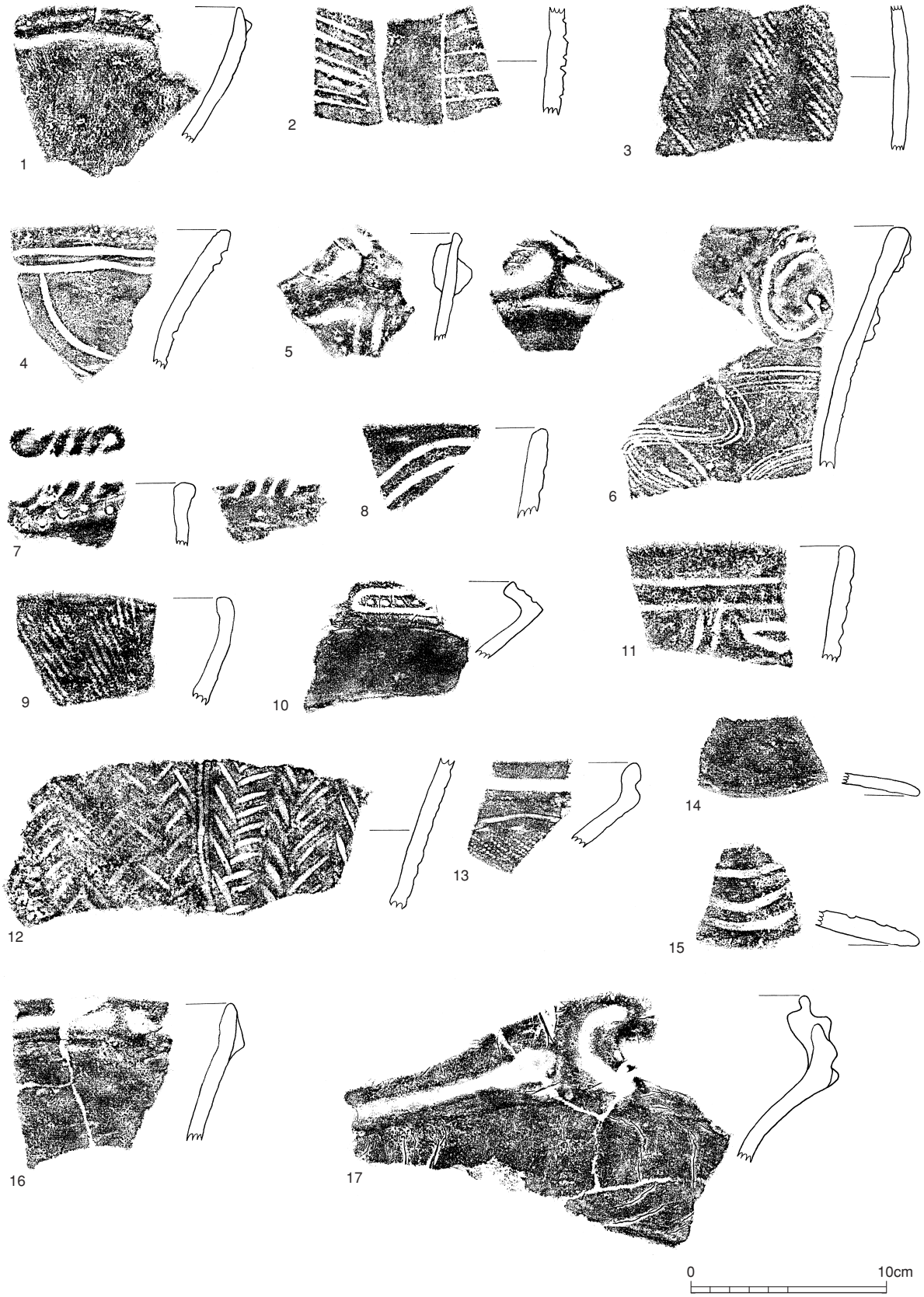
第36図　縄文時代の土器11



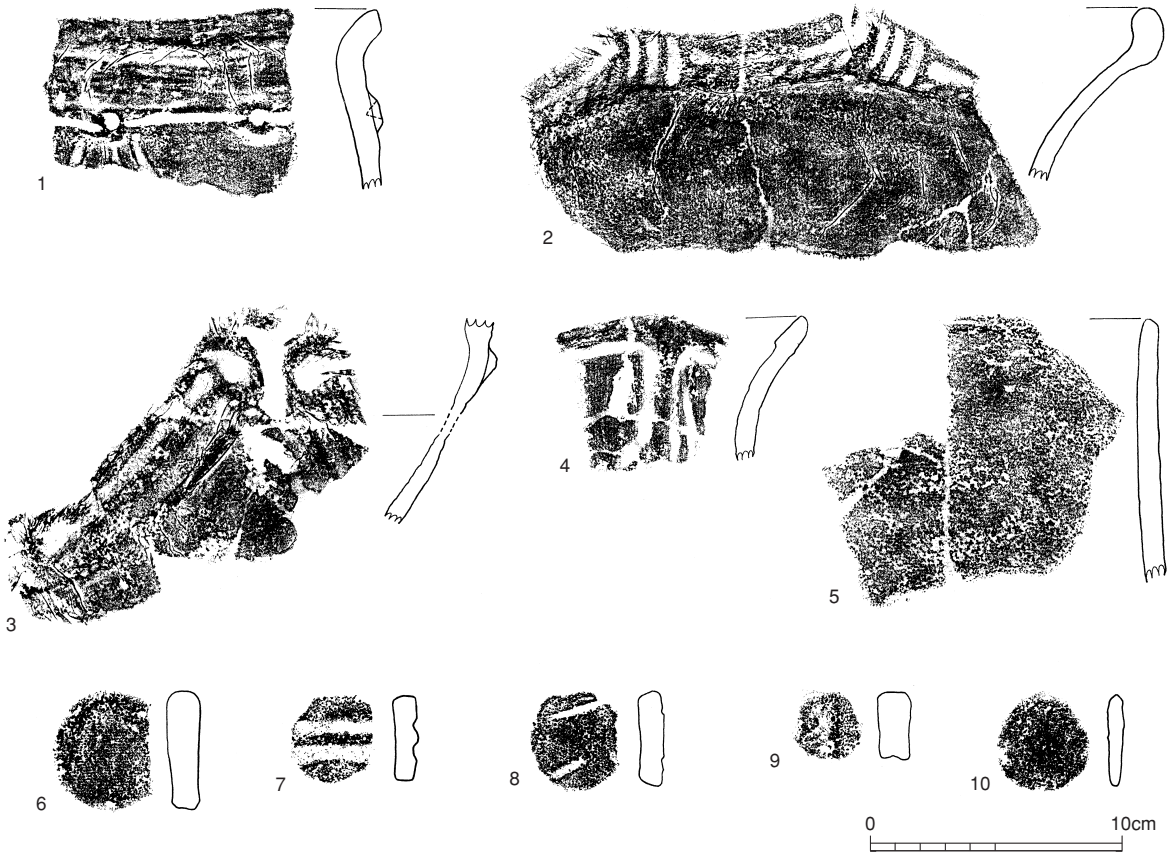
第37図　縄文時代の土器12



第38図　縄文時代の土器13



第39図　縄文時代の土器14



第40図　縄文時代の土器15、土製品

土製品

塩田若宮遺跡（第２次）発掘調査で出土した土製品として、土製円板５点を資料化した（第40図６～10）。このうち２点は沈線表現のある土器胴部の転用と考えられる。今回の発掘調査では、この他に明らかに土製品と認められた遺物は出土していない。

明科光の北村遺跡では土製品のうち土偶・小型土器が主体を占めておりこのほかに錘・蓋・匙・玉・耳飾・土製円板（土器片円板）がある（長野県埋蔵文化財センター1993）。このうち土偶は100点、小型土器は80点、土製円板（土器片円板）は293点出土している。これに対し、塩田若宮遺跡では、第１次発掘調査において縄文時代後期前葉に比定される６号住から土偶頭部及び土偶脚部が出土したのみで、これ以外に目立った土製品は現在までに確認されていない。土偶や小型土器などの保有について、北村遺跡と塩田若宮遺跡との差は明瞭といえる。土偶や小型土器の保有に関して集落単位の差異の有無が検討される材料となろう。

塩田若宮遺跡（２次）出土石器の総数は980点を数える。このうち縄文時代に典型的と考えられる器種及び二次加工・肉眼での使用痕跡が認められる資料は124点であり、ここから44点を抽出して資料化した。器種別内訳は、石鏃15点、石錐３点、削器５点、石匙１点、楔形石器２点、Ｕ・Ｆ（使用痕剥片）１点、Ｒ・Ｆ（加工痕剥片）２点、打製石斧83点、磨製石斧５点、磨石２点、凹石１点、蜂の巣石１点、台石２点、不明石製品１点である。当該期の石器のほとんどを網羅しているが、打製石斧が多量に出土しているのに比べ、磨石や凹石はそれぞれ２点、１点と少なく、定型的な石皿に至っては１点も出土していないことが注意される。

全体を通した使用石材の構成は、頁岩22点、玄武岩６点、ホルンフェルス22点、安山岩18点、輝石安山岩３点、チャート20点、黒曜石２点、輝緑岩２点、凝灰岩10点、砂岩８点、玢岩１点、流紋岩２点、半花崗岩（アプライト）１点の13種類にのぼり、その中でも頁岩、ホルンフェルス、安山岩、チャートの使用頻度が高い。残る１点は不明である。

石鏃　15点中、チャート製が12点、黒曜石製が２点、不明１点を数える。形態的には凸基無茎鏃と凹基無茎鏃の二つがみられるが、前者は後者に比べて大形の作りである。

石錐　３点と少ない。いずれもチャート製である。

削器　５点出土した。頁岩製１点、チャート製３点、凝灰岩製１点である。頁岩製の１点は薄く短い小突起を作出しており、石錐の可能性も残される。

石匙　わずか１点の出土である。頁岩製であり、一見石斧状を呈する。

楔形石器　チャート製１点、不明１点である。

使用痕剥片（U・F）　凝灰岩製１点である。横打ち剥片素材を使用している。

加工痕剥片（R・F）　頁岩製１点、チャート製１点が出土している。

打製石斧　83点中、頁岩製18点、玄武岩製６点、ホルンフェルス製22点、安山岩製15点、輝石安山岩製２点、輝緑岩性１点、凝灰岩製８点、砂岩製４点、玢岩製１点、流紋岩製２点、不明４点を数える。頁岩、ホルンフェルス、安山岩の使用頻度が高い。形態的な構成の明らかなものは短冊形56点、撥形12点、分銅形１点であり、短冊形石斧の多さと分銅形石斧の少なさが際立つ。

磨製石斧　頁岩製１点、安山岩製１点、輝緑安山岩製１点、輝緑岩製１点、不明１点であり、使用石材が特定のものに集中する傾向は認められない。両刃のものと小型片刃のものがみられる。

磨石　砂岩製１点、半花崗岩製１点を数える。83点という打製石斧の出土数に比べると、その少なさが目立つ。

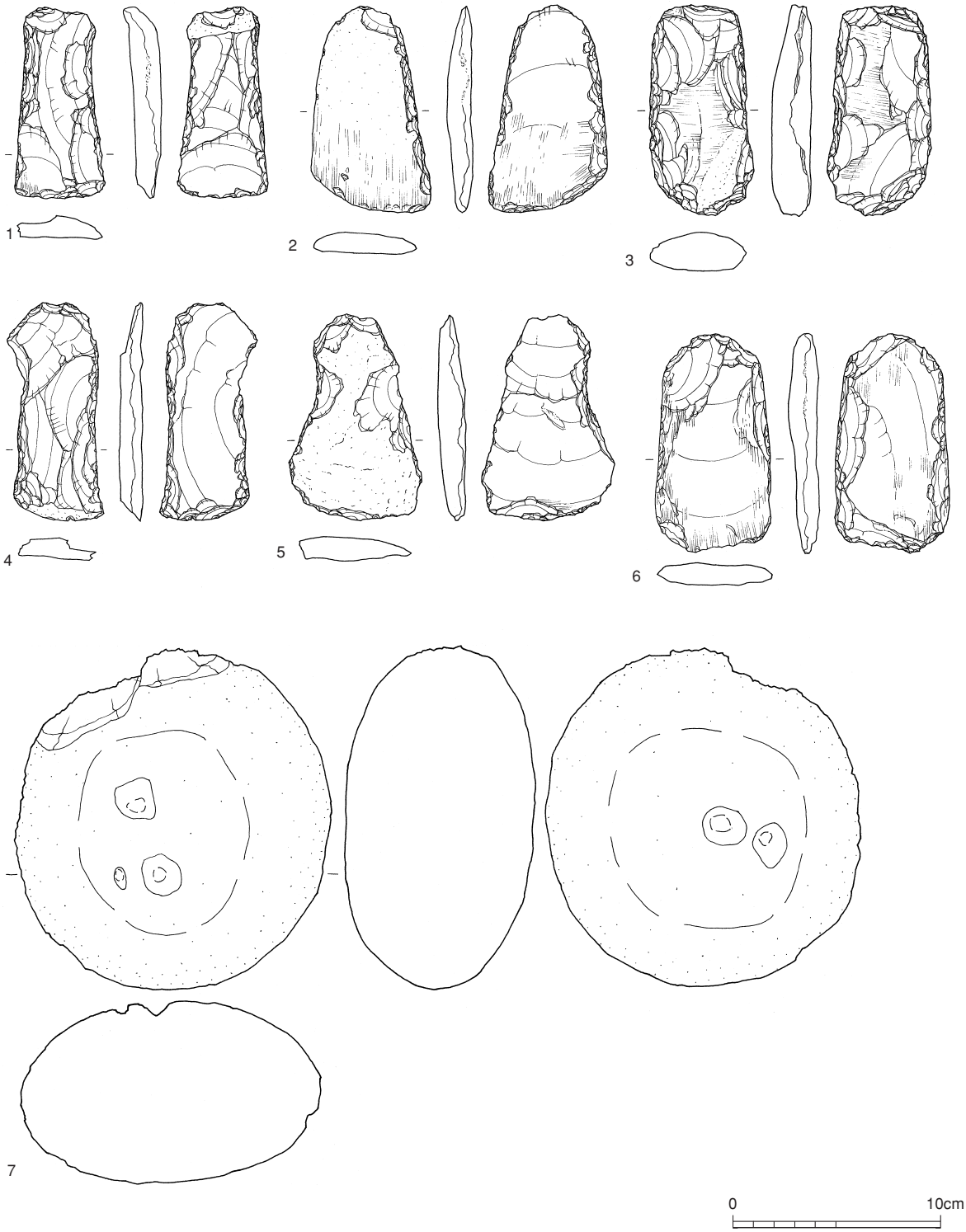
凹石　砂岩製１点のみの出土である。磨石同様、その少なさが目立つ。

蜂の巣石　安山岩製１点のみの出土である。両面に複数の凹みと研磨痕を有しており、多様な用途が考えられる。

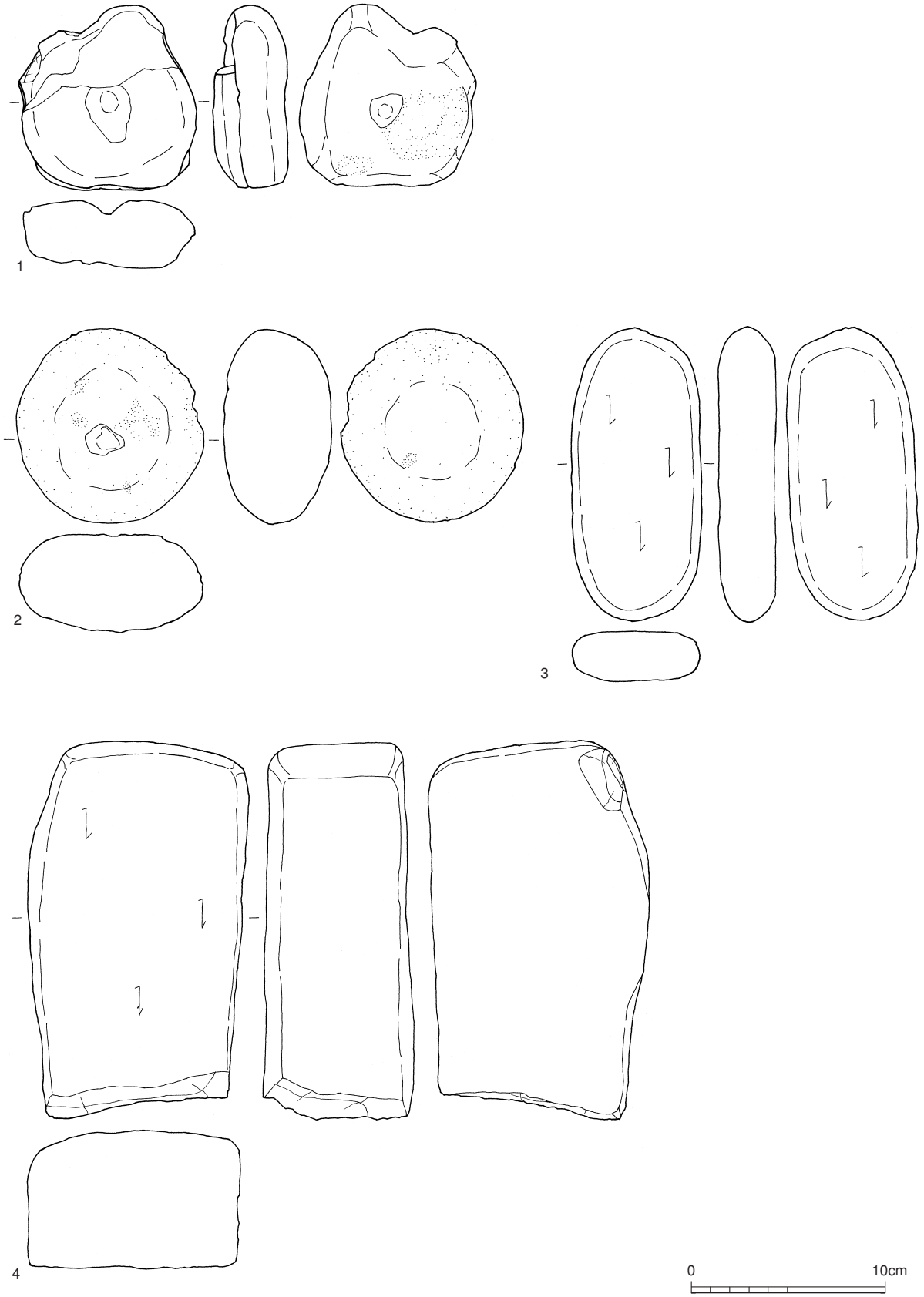
台石　安山岩製１点、砂岩製１点が出土している。表面を中心に良好な研磨痕を残しており、砂岩製台石の両面には一ヶ所ずつ凹みもみられる。

第41図　出土石器１

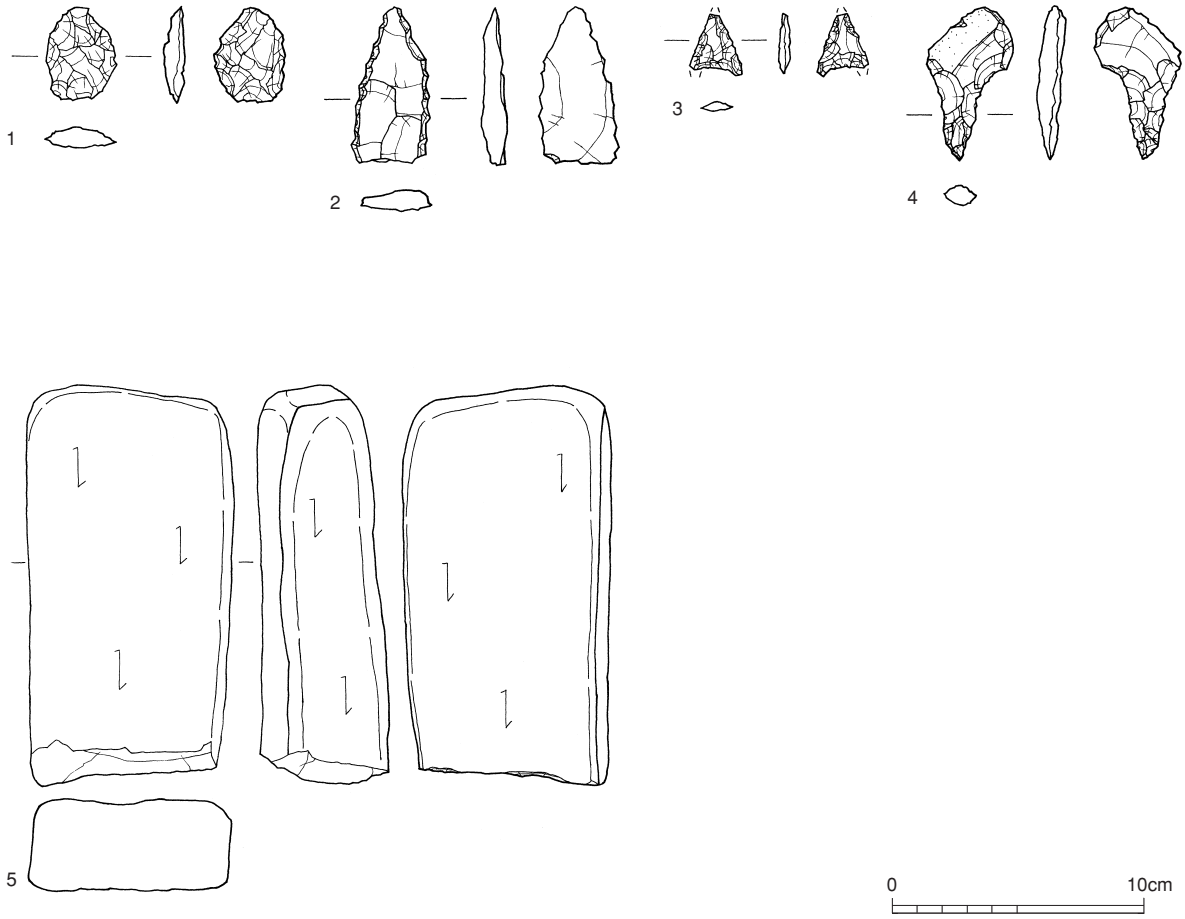
第42図　出土石器２



第43図　出土石器３



第44図　出土石器４



第45図　出土石器５

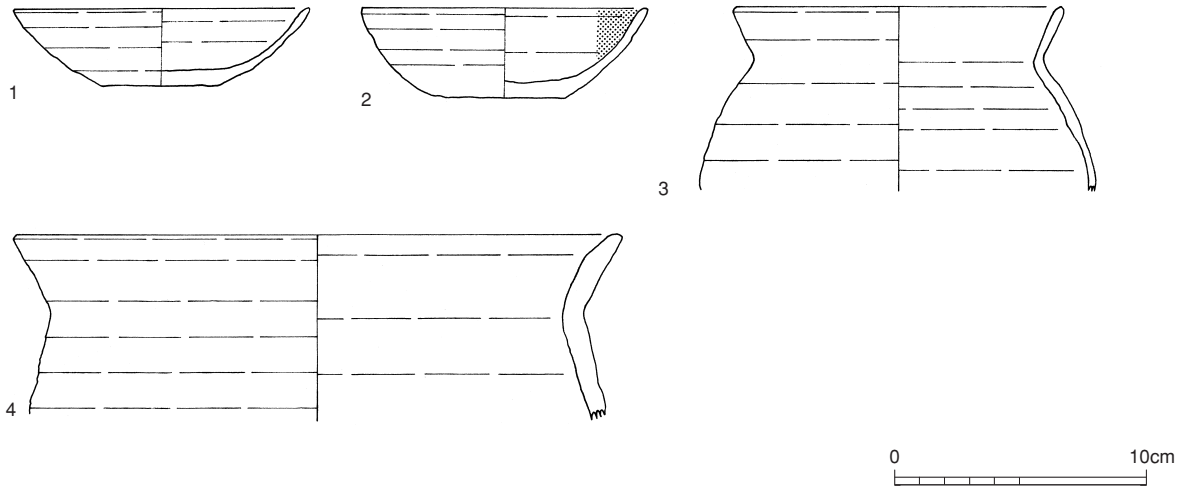
縄文時代に典型的とされる器種等124点のうち、遺構内から出土した石器はSB１から112点、SB２から１点、SB３から２点を数える。SB２、SB３出土の石器は、すべて打製石斧である。多数の石器が確認されたSB１出土の石器の内訳は、石鏃11点、石錐２点、削器５点、石匙１点、楔形石器２点、U・F（使用痕剥片）１点、R・F（加工痕剥片）２点、打製石斧79点、磨製石斧４点、磨石２点、凹石１点、蜂の巣石１点、不明石製品１点である。石皿や台石などが含まれていないことを除けば、縄文時代の石器のほとんどすべてがSB１から出土しているといえるが、注目すべきはその点数であり、抽出した石器のうち112点という数は通常の住居内出土例のそれを遥かに凌駕していることが注意される。とりわけ注目されるのが79点という打製石斧の存在であり、これほど多量の石斧が１軒の住居にもともと付属するものであったと考えることは難しい。近年、上松町漆脇遺跡では縄文早～晩期にかけてであるが105点（石器全117点中90％）という集中的な出土例が報告されている（上松町教育委員会2008）。

SB１を敷石住居と捉えた場合、以上の多量の石器群は本遺構を舞台にした何らかの祭儀に伴うものであったと考えることもできる。同時期の敷石住居の例では、その廃棄にあたって多量の石器を住居内に意図的に配置したものが認められており、その可能性は高いということができる。逆に本遺構から確認される多量の礫の多くが浮いた状態にあった場合には、いわゆる捨て場との関係も想定される。

平安時代の土器

塩田若宮遺跡（第２次）ではＰ５から平安時代の土器が礫・炭化物とともに出土している。これらはいずれも平安時代に比定され、一括資料として取り扱った。Ｐ５出土土器はいずれも破片資料で完形に復元されたものはなかった。１は土師器坏Ａで口径11.5cm、底径4.6cm、器高3.0cmを測る。底部には回転糸切り痕が観察された。２は黒色土器Ａで法量は１の土器とほぼ同じである。１に比べ器壁がやや湾曲してふくらみを持つ点が特徴で、内面黒色処理は脱色していた。３・４は小甕・甕としたもので、いずれも胴上部しか残存していない。

図示できなかったＰ５出土遺物には、外面ハケメ調整痕がある土師器甕胴部、底部に回転糸切り痕を有する土師器坏などの小破片が多く確認され、Ｐ５出土土器全体の重量は1.27kgであった。



第46図　平安時代の土器

今回の調査で確認された平安時代の遺構はここに示したＰ５のみであるが、遺構外からは須恵器、土師器、灰釉陶器の小破片が多数出土している。また、平成20年（2008）に実施した保育園仮園舎建設に伴う試掘調査でも地表下約90cmの深度で砂質シルト層に掘り込みを確認している（安曇野市教育委員会2010）。ここからは底部に回転糸切り痕をもつ土師器坏が出土した。明北小学校体育館建設の際に実施された塩田若宮遺跡（第１次）発掘調査でも、方形のプランで隅にカマドを持つ竪穴建物跡（１号住）が見つかっており、ここからは遺物出土がないものの当該期の可能性は高い。これらの周辺状況から、今回調査区の周囲に平安時代の集落跡が存在する可能性が高いと考えられる。

6　自然科学分析

塩田若宮遺跡（第２次）では、SB１及びＰ５から木炭及び土器付着炭化物を採集し、自然科学的手法によって放射性炭素年代測定（AMS 測定）、樹種の同定を実施した。業務は(株)加速器分析研究所に委託し、放射性炭素年代測定（AMS 測定）を(株)加速器分析研究所、樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社が実施した。以下は提出された分析報告である。

塩田若宮遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

(株)加速器分析研究所

１　測定対象試料

塩田若宮遺跡は、長野県安曇野市明科東川手867番１（北緯36°21′58″、東経137°55′59″）に所在する。測定対象試料は、SB１出土木炭（NO.１：IAAA-91901、NO.２：IAAA-91902)、Ｐ５出土木炭（NO.３：IAAA－91903、NO.４：IAAA-91904)、SB１出土土器付着炭化物（NO.５：IAAA-91905)、合計５点である。

第47図　年代測定資料（NO.５）

２　測定の意義

SB１出土試料の測定では、住居の年代と住居内礫群の廃棄年代、出土した土器の使用年代を確かめる。Ｐ５出土試料の測定では、遺構の年代を明らかにする。これらの測定により、遺跡の存続年代を確認する。

３　化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

⑵　酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA : Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA 処理において、アルカリ濃度が１Ｎ未満の場合、表中に AaA と記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

⑶　試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で２時間加熱する。

⑷　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

⑸　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

⑹　グラファイトを内径１㎜のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

４　測定方法

測定機器は、３MV タンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS 専用装置（NEC　Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

⑴　年代値の算出には、Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。

⑵　^{14}C 年代（Libby　Age : yrBP）は、過去の大気中^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（０yrBP）として遡る年代である。この値は、δ^{13}C によって補正された値である。^{14}C 年代と誤差は、１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

⑶　δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}C を測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

⑷　pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C 濃度の割合である。

⑸　暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

６　測定結果

SB１出土試料の^{14}C 年代は、木炭 NO.１が4080±40yrBP、木炭 NO.２が3990±30yrBP、土器付着炭化物 NO.５が4070±30yrBP である。いずれも縄文時代中期末から後期初頭頃に相当する年代値で、特に NO.１と NO.５は誤差（±１σ）の範囲で重なり合い、近い年代であることを示している。

P５出土木炭の^{14}C 年代は、NO.３が1230±30yrBP、NO.４が1200±30yrBP である。NO.３と NO.４も誤差（±１σ）の範囲で重なり合い、近い年代と考えられる。暦年較正年代で見ると、１σ、２σともおおよそ８世紀から９世紀頃の範囲で示される。ただし、較正曲線の波形が単純な右下がりにならないために、NO.３と NO.４の間で暦年代範囲の上限や下限、確率分布のあり方に違いが見られる。

炭素含有率はすべて50%を超えており、化学処理、測定上の問題は認められない。

第３表　放射性炭素年代測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$(‰)(AMS)	$\delta^{13}C$ 補正あり Libby Age (yrBP)	$\delta^{13}C$ 補正あり pMC(%)
IAAA-91901	NO. 1	遺構：SB１	木炭	AAA	−24.86±0.58	4,080±40	60.16±0.26
IAAA-91902	NO. 2	遺構：SB１　層位：覆土１	木炭	AAA	−25.46±0.55	3,990±30	60.84±0.25
IAAA-91903	NO. 3	遺構：P５　層位：覆土１	木炭	AAA	−26.40±0.45	1,230±30	85.79±0.33
IAAA-91904	NO. 4	遺構：P５　層位：覆土１	木炭	AAA	−26.29±0.31	1,200±30	86.10±0.33
IAAA-91905	NO. 5	遺構：SB１	炭化物	AaA	−25.62±0.43	4,070±30	60.26±0.25

［＃3282］

第４表　放射性炭素年代測定結果（参考値）

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正なし Age(yrBP)	$\delta^{13}C$ 補正なし pMC(%)	暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
IAAA-91901	4,080±30	60.17±0.25	4,082±34	2836BC～2816BC（10.7%） 2671BC～2572BC（54.7%） 2512BC～2504BC（ 2.9%）	2861BC～2808BC（17.1%） 2756BC～2719BC（ 6.2%） 2705BC～2562BC（63.2%） 2536BC～2492BC（ 8.8%）
IAAA-91902	4,000±30	60.78±0.24	3,992±32	2566BC～2524BC（43.6%） 2497BC～2474BC（24.6%）	2580BC～2462BC（95.4%）
IAAA-91903	1,250±30	85.54±0.32	1,231±30	712AD～746AD（21.0%） 767AD～827AD（34.8%） 840AD～864AD（12.4%）	689AD～753AD（32.4%） 761AD～881AD（63.0%）
IAAA-91904	1,220±30	85.87±0.32	1,202±30	780AD～870AD（68.2%）	709AD～747AD（ 7.4%） 766AD～895AD（87.1%） 927AD～935AD（ 0.8%）
IAAA-91905	4,080±30	60.18±0.25	4,069±34	2834BC～2818BC（ 7.9%） 2664BC～2647BC（ 6.3%） 2637BC～2567BC（43.5%） 2521BC～2498BC（10.6%）	2855BC～2812BC（12.7%） 2747BC～2725BC（ 2.8%） 2698BC～2548BC（63.1%） 2540BC～2489BC（16.8%）

［参考値］

参考文献

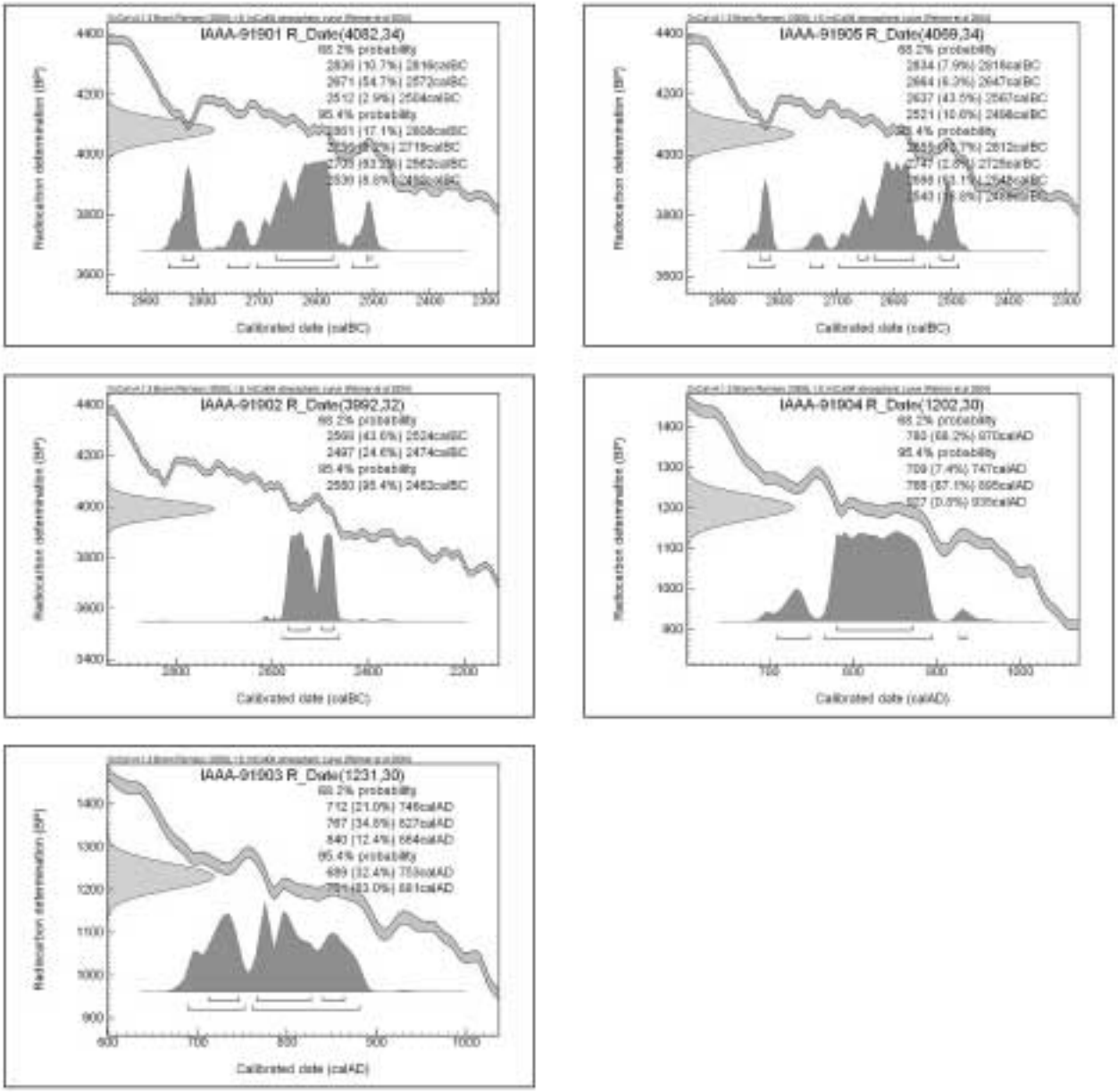
Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the radiocarbon calibration program, *Radiocarbon* 43 (2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2A), 381-389

Reimer, P. J. et al. 2004 IntCal 04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



第48図　暦年較正年代グラフ

安曇野市塩田若宮遺跡出土炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

安曇野市塩田若宮遺跡は犀川右岸に位置し、縄文時代の竪穴住居跡、平安時代のピット等の遺構が検出されている。今回の分析調査では、各遺構から出土した炭化材の樹種を明らかにするために、樹種同定を実施する。

１　試料

試料は、SB１から出土した炭化材２点（試料番号１、２）とP–5から出土した炭化材２点（試料番号３、４）の合計４点である。

２　分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）及びWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995、1996、1997、1998、1999）を参考にする。

３　結果

樹種同定結果を第５表に示す。炭化材は、落葉広葉樹２分類群（クリ・カツラ）に同定された。なお、試料番号４は、道管が認められることから広葉樹であるが、微細片で保存状態が悪いため、種類は不明である。また、小片で保存状態が悪いために同定はできなかったが、試料番号３には明らかにクリとは組織が異なる広葉樹材も認められた。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

第５表　樹種同定結果

番号	遺構	層位	時期	樹種
1	SB１			カツラ
2	SB１	覆土１	縄文中期末葉～後期初頭	クリ近似種
3	P５	覆土１	平安時代	クリ 広葉樹
4	P５	覆土１	平安時代	広葉樹

・クリ（Castanea *crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３－４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１－２列、１－15細胞高。

試料番号２は、細片で早材部を欠いており、組織がよく似たコナラ節の可能性もあるため、クリ近似種としている。

・カツラ（*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.）　カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、１－２細胞幅、１－30細胞高。

４　考察

SB１から出土した炭化材のうち、試料番号１は遺構確認面から約20㎝下の礫群の礫間から採取されており、礫群に伴う炭化材と考えられている。礫群から出土し、火を受けていることから、燃料材などとして利用された可能性がある。この炭化材は、落葉広葉樹のカツラに同定された。カツラは、谷沿い等に生育し、木材は木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。カツラは、現在の本地域でも山中で普通にみられる樹木であり、遺跡周辺で入手できる木材を利用したことが推定される。

試料番号２は、遺構確認面より約20㎝下の縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる土器の下から出土している。炭化していることから、何らかの人間活動に伴い、火を受けていることが推定される。炭化材は、落葉広葉樹のクリ近似種に同定された。クリは、重硬で強度・耐朽性が高い材質を有している。クリに似た組織を有するコナラ節は、重硬で強度が高い材質を有している。この結果から、強度の高い木材を利用した可能性がある。

安曇野市内では、北村遺跡（旧明科町）の縄文時代後期とされる住居跡から出土した炭化材にクリが多い結果が得られている（鈴木・能城1993）。また周辺地域では、荒海渡遺跡（旧梓川村）の縄文時代中期とされる住居内から出土した炭化材にクリが多い結果が得られている（森1978）。さらに、熊久保遺跡（朝日村）の縄文時代中期とされる住居跡出土炭化材20点、塩倉池遺跡（松本市）の縄文時代中期とされる住居跡出土炭化材２点、下原遺跡の縄文時代中期後葉とされる住居跡出土炭化材２点も全てクリに同定されており、縄文時代中期～後期の本地域では住居においてクリが多用されていたことが推定される（パリノ・サーヴェイ株式会社2003、2005、2009）。今回の結果は、これまでの調査事例とも調和的である。

P-5から出土した炭化材２点（試料番号３、４）は、いずれも平安時代と考えられる土器の間から採取されている。試料番号３はクリと広葉樹、試料番号４は広葉樹であった。試料番号３の広葉樹は、保存状態が悪いが、観察できた組織の特徴からクリとは異なる種類であり、少なくともクリを含む２種類の木材が利用されていたことが推定される。

なお、周辺地域では、舅屋敷遺跡（塩尻市）、北方遺跡・南中遺跡・竹渕南原遺跡（松本市）、来見原遺跡（大町市）等で平安時代の遺構出土材について樹種同定が行われている（小林1982；森1988；神沢1985；パリノ・サーヴェイ株式会社2000）。クリは、住居跡出土炭化材を利用が確認でき、コナラ節、キハダ、オニグルミ等と共に利用されていたことが推定される。

引用文献

林　昭三　1991　日本産木材　顕微鏡写真集　京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1995　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ　木材研究・資料　31　京都大学木質科学研究所　81－181

伊東隆夫　1996　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ　木材研究・資料　32　京都大学木質科学研究所　66－176

伊東隆夫　1997　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ　木材研究・資料　33　京都大学木質科学研究所　83－201

伊東隆夫　1998　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ　木材研究・資料　34　京都大学木質科学研究所　30－166

伊東隆夫　1999　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ　木材研究・資料　35　京都大学木質科学研究所　47－216

神沢昌二郎　1985　出土炭化物および木片について「松本市島内遺跡群　北方遺跡・南中遺跡―緊急発掘調査報告書―」松本市文化財調査報告書 No.36　長野県中信土地改良事務所・松本市教育委員会　39

小林康男　1982　火災住居検出の炭化材「舅屋敷　長野県塩尻市舅屋敷遺跡発掘調査報告書」舅屋敷遺跡発掘調査団・塩尻市教育委員会　157

森　義直　1978　残存動植物について「長野県南安曇郡梓川村　荒海渡遺跡調査報告書」長野県南安曇郡梓川村教育委員会　199－202

森　義直　1988　炭化物（炭化材）について「長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書　来見原遺跡Ⅱ」大町市埋蔵文化財調査報告書第14集　大町市教育委員会　118

パリノ・サーヴェイ株式会社　2000　竹渕南原遺跡の自然科学分析「竹渕南原遺跡Ⅱ」松本市文化財調査報告 No.144　松本市教育委員会　42－43

パリノ・サーヴェイ株式会社　2003　熊久保遺跡出土炭化材の年代と樹種「熊久保遺跡第10次発掘調査報告書―松本平西山山麓における縄文時代中期の集落址―」朝日村文化財調査報告書第１集　長野県東筑摩郡朝日村教育委員会　259－262

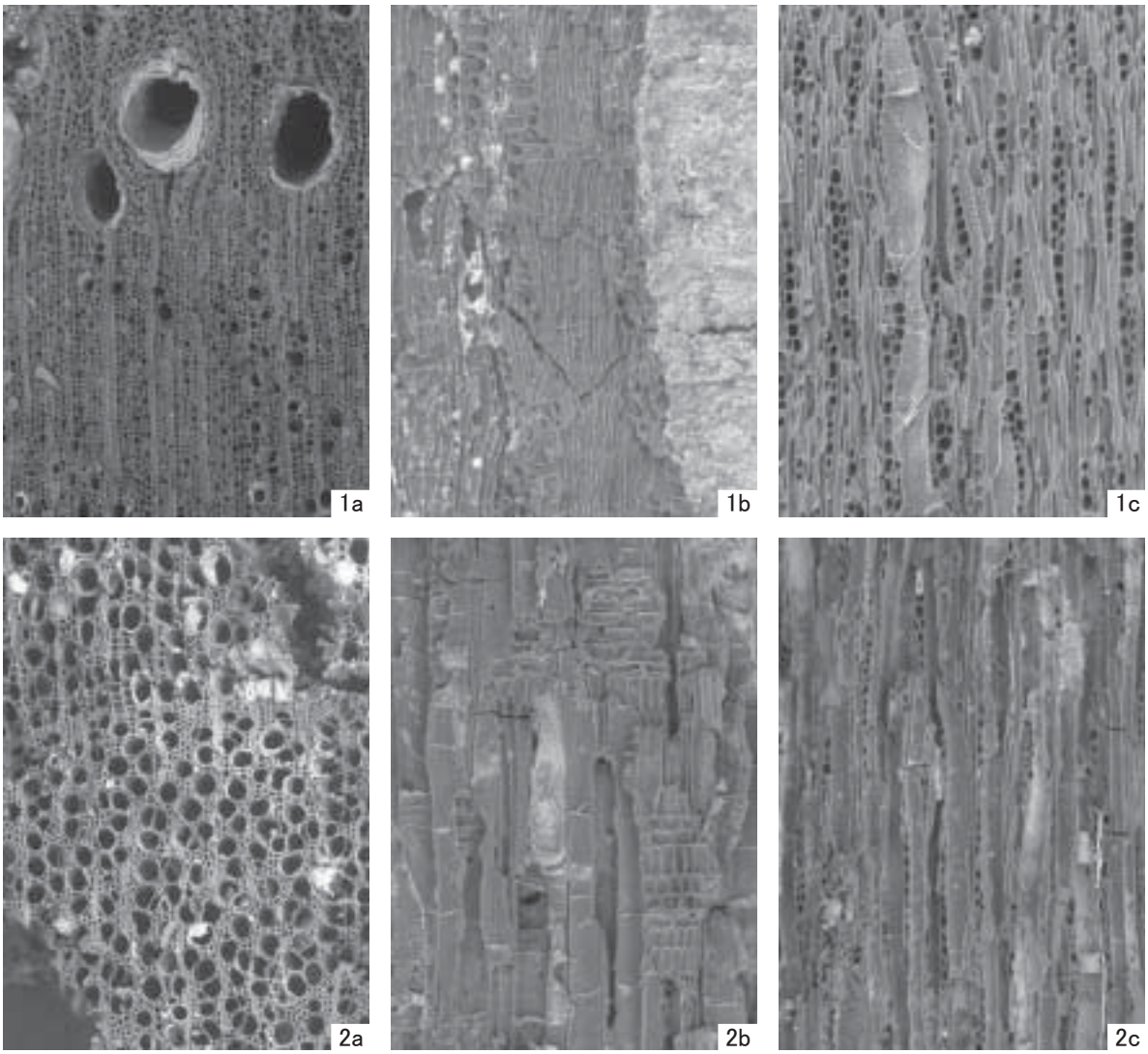
パリノ・サーヴェイ株式会社　2005　塩倉池遺跡の自然科学分析「塩倉池遺跡Ⅳ・塚山古墳群」松本市文化財調査報告 No.178　松本市教育委員会　22－23

パリノ・サーヴェイ株式会社　2009　三夜塚遺跡・下原遺跡出土炭化物の自然科学分析調査「下原遺跡・三夜塚遺跡Ⅳ―県営畑地帯総合整備事業竹田原地区に伴う緊急発掘調査報告書―」山形村遺跡発掘調査報告書第15集　山形村教育委員会　100－105

島地　謙・伊東　隆夫　1982　図説木材組織　地球社　176p

鈴木三男・能城　修一　1993　長野県北村遺跡出土炭化材の樹種「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11―明科町内―北村遺跡　本文編」(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14　日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・財団法人長野県埋蔵文化財センター　167－168

Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E.（編）　1998　広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト　伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）　海青社　122p［Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］



1.クリ（試料番号3）
2.カツラ（試料番号1）
　a:木口,b:柾目,c:板目

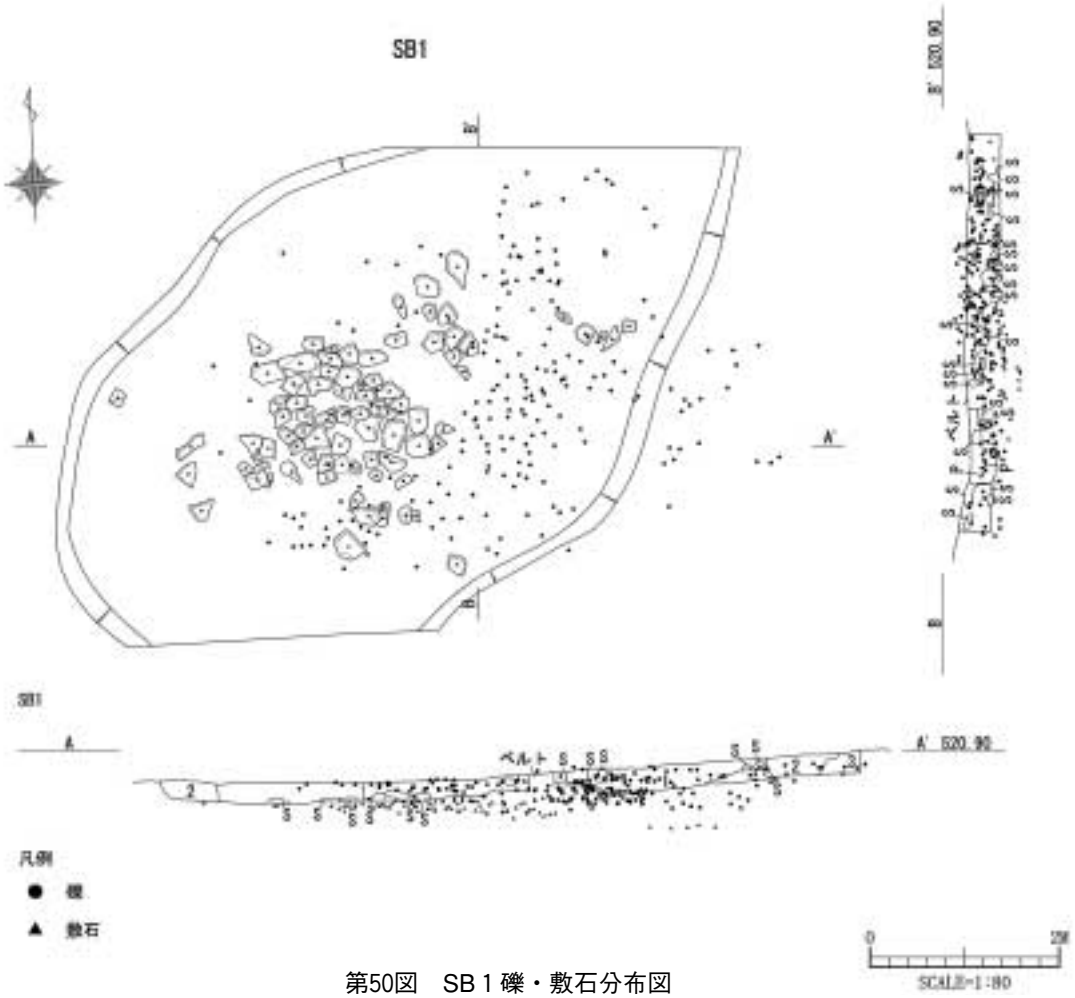
200μm:a
200μm:b,c

第49図　炭化材

7　調査の総括

SB１における礫・敷石の分布

今回の発掘調査でもっとも注目されるのはSB１で確認された敷石住居である。SB１精査当初は、この遺構の性格を敷石住居と配石遺構の両面から探ったため、床面上に敷石が敷設されているかを記録として残す目的で、礫の座標を測定した。埋土中で不安定であったり、土器などの遺物の上に乗っていたりする礫は原位置を保っていないと考え「礫（●)」として記録した。これに対し、水平面を上面にして安定して設置されておりかつ上面が周囲とそろっている礫を「敷石（▲)」として記録した。位置は、礫上面中央で測定している。これらの平面・垂直分布を第50図に示した。平面分布からは一見して遺構内南側に礫の密度が濃厚であることが見て取れる。B-B'断面で見られる垂直分布では南側から敷石の上方に覆いかぶさるような礫の分布が見える。SB１の地形は潮沢川に臨む北向きの緩斜面であり、ここに示した礫・敷石の分布からは斜面上方である南側から敷石上に礫が廃棄される形で土器や石器とともに堆積することでSB１上層が形成されたと考えられる。このとき同時に焼土・骨片なども混入している。堆積にかかる絶対的な時間は不明確であるものの、出土遺物は資料としての一括性を有すると考えられる。



第50図　SB１礫・敷石分布図

安曇野市内の敷石住居

塩田若宮遺跡が所在する安曇野市明科地域は、下流で信濃川となって日本海に注ぐ犀川とその支流が形成した渓谷から構成されるという地形的特徴を有し、犀川河岸段丘上にあって小河川に近い場所に縄文時代の遺跡が複数確認されている。また、安曇野市全体では西側に北アルプスの山々がそびえ、その山麓には縄文時代の遺跡が多数確認されている。このような立地にあって、発掘調査が実施され縄文中期後葉から後期前葉にかけての敷石住居や配石遺構が見つかっている主な遺跡には、離山遺跡（穂高牧）、他谷遺跡（穂高牧）、五反田遺跡（三郷小倉）、ほうろく屋敷遺跡（明科南陸郷）、北村遺跡（明科光）、こや城遺跡（明科中川手）、井刈遺跡（松本市四賀）がある。このうち井刈遺跡の例は配石遺構であるが、報告によると会田川の河床礫と考えられる礫を多量に使用している点、石組みの中に木炭と焼骨が認められるなど塩田若宮遺跡（第２次）SB１（以下「SB１」とする）と類似の性格を持つ（大場他1963）。

発掘調査によって確認され報告されている安曇野市内の敷石住居を第６表に示した。この表で縄文中期後葉から後期前葉にかけて多くの敷石住居が確認されていることがわかる。遺跡自体の立地や規模に大きく影響されると考えられるが、それぞれの遺跡で複数の敷石住居が確認されている。

北村遺跡では発掘調査によって多くの縄文人骨が確認されており、このとき29軒の敷石住居も見つかっている（長野県埋蔵文化財センター1993）。平面形の内訳は、柄鏡形26、円形２、その他１で柄鏡形が卓越している。北村遺跡のもつ時間幅は調査報告によると加曽利ＥⅢ式並行期から加曽利Ｂ１式並行期となっているが、柄鏡形敷石住居は加曽利ＥⅣ式並行期から堀之内２式並行期で各７軒と多く確認されている。今回調査したSB１は出土土器から後期後葉Ⅳ期（長野県編1988）と考えられるので、時間的には北村遺跡の敷石住居盛行期に収まる形といえよう。

遺跡立地の点で類似するのは、こや城遺跡である。こや城遺跡は塩田若宮遺跡の南約１㎞に位置し、筑摩山地を開析して犀川に注ぐ会田川左岸に所在する。この遺跡からは縄文中期後半から末と考えられる敷石住居４軒が発掘調査で確認された（明科町教育委員会1979）。このうち１号住と３号住は埋甕をもちSB１と類似する。また、４号住敷石上層は竪穴掘り込みとほぼ同じ範囲に人頭大から拳大の石が投げ込まれたような状態で30～40㎝ほどの厚さに堆積しており、この堆積中からは多量の土器、石器、シカの骨片が検出されている。特に打製石斧が28点と多出した点は特徴的である。この４号住敷石上層の集積はSB１の埋土と類似しており、遺跡形成過程における共通性が想定される。

第６表　安曇野市内の敷石住居

遺　跡　名	遺跡NO	所在	遺構名	時期※	掘り込み	平面形	直径(m)	炉 形 態	備　考
離山遺跡	2-19	穂高牧	第３号住居	後期前半	?	円形	6.4	円形、楕円形の２か所	
離山遺跡	2-19	穂高牧	敷石遺構	堀之内	?	(円形)	7.0～8.0	未確認	
他谷遺跡	2-27	穂高牧	SB26	中期後葉Ⅳ	?	(円形)	(2.8)	正方形石囲い炉	
他谷遺跡	2-27	穂高牧	SB37	中期後葉Ⅳ	?	不明	－	方形石囲い炉	
他谷遺跡	2-27	穂高牧	SB38	中期後葉Ⅳ	?	(円形)	(3.3)	方形石囲い炉	
他谷遺跡	2-27	穂高牧	SB42	中期後葉Ⅳ	?	不明	－	未確認	
他谷遺跡	2-27	穂高牧	SB43	中期後葉Ⅳ	?	不明	－	未確認	
他谷遺跡	2-27	穂高牧	SB46	中期後葉Ⅳ	?	不明	－	未確認	

遺　跡　名	遺跡NO	所在	遺構名	時期※	掘り込み	平面形	直径(m)	炉 形 態	備　考
五反田遺跡	3-53	三郷小倉	第１号住居址	中期後葉Ⅳ	?	(柄鏡形)	3.0	未確認	
ほうろく屋敷遺跡(第１次)	5-101	明科南陸郷	敷石１号住	曽利Ⅴ	?	不明	(4.0)	方形石囲い炉、土器有り	
ほうろく屋敷遺跡(第１次)	5-101	明科南陸郷	敷石２号住	曽利Ⅴ	?	不明	(4.0)	方形石囲い炉	
ほうろく屋敷遺跡(第１次)	5-101	明科南陸郷	敷石３号住	曽利Ⅴ	?	(円形)	(5.0)	方形石囲い炉	
ほうろく屋敷遺跡(第１次)	5-101	明科南陸郷	敷石４号住	曽利Ⅴ	?	不明	(5.0)	方形石囲い炉	
ほうろく屋敷遺跡(第１次)	5-101	明科南陸郷	敷石５号住	堀之内	?	柄鏡形	5.8	方形石囲い炉	
ほうろく屋敷遺跡(第１次)	5-101	明科南陸郷	敷石６号住	堀之内	?	不明	－	未確認	
ほうろく屋敷遺跡(第１次)	5-101	明科南陸郷	敷石７号住	堀之内	?	柄鏡形	4.0	方形石囲い炉	
ほうろく屋敷遺跡(第１次)	5-101	明科南陸郷	敷石９号住	曽利Ⅲ	?	不明	－	方形石囲い炉	
ほうろく屋敷遺跡(第１次)	5-101	明科南陸郷	敷石10号住	後期前半？	?	不明	(4.0)	未確認	
宮ノ前遺跡	5-205	明科七貴	－	中期後葉	?	方形？	(2.5)	方形石囲い炉	
北村遺跡	5-301	明科光	SB101	Ⅴ	有り	柄鏡形	4.6	長方形石囲い炉、土器有り	
北村遺跡	5-301	明科光	SB102	Ⅳ	?	柄鏡形	(7.0)	円形、土器有り	
北村遺跡	5-301	明科光	SB103	Ⅲ	有り	(柄鏡形)	5.5	円形	
北村遺跡	5-301	明科光	SB108	Ⅳ	?	(柄鏡形)	(7.6)	卵形石囲い炉	
北村遺跡	5-301	明科光	SB110	Ⅲ	有り	(柄鏡形)	4.7	未確認	
北村遺跡	5-301	明科光	SB111	?	?	柄鏡形	－	未確認	
北村遺跡	5-301	明科光	SB551A	Ⅱ	?	柄鏡形	(4.9)	不整形石囲い炉	
北村遺跡	5-301	明科光	SB552	Ⅴ	?	柄鏡形	(3.8)	破壊	
北村遺跡	5-301	明科光	SB553A	Ⅵ	有り	柄鏡形	6.1	円形石囲い炉	
北村遺跡	5-301	明科光	SB554	Ⅳ	?	柄鏡形	－	未確認	
北村遺跡	5-301	明科光	SB555A	Ⅵ	有り	柄鏡形	6.0	方形石囲い炉	
北村遺跡	5-301	明科光	SB557	Ⅳ	?	柄鏡形	(5.2)	方形	
北村遺跡	5-301	明科光	SB558	Ⅴ	?	柄鏡形	(5.5)	方形	
北村遺跡	5-301	明科光	SB559	Ⅴ	?	柄鏡形	(5.6)	不整形	
北村遺跡	5-301	明科光	SB560	Ⅱ	?	柄鏡形	(4.0)	長方形石囲い炉	
北村遺跡	5-301	明科光	SB561	Ⅴ	?	柄鏡形	(5.0)	長方形石囲い炉、土器有り	
北村遺跡	5-301	明科光	SB562	Ⅲ	有り	(柄鏡形)	6.7	方形石囲い炉	
北村遺跡	5-301	明科光	SB564	?	?	柄鏡形	(4.7)	方形	
北村遺跡	5-301	明科光	SB566	Ⅴ	有り	柄鏡形	6.4	方形	
北村遺跡	5-301	明科光	SB567	Ⅲ	?	柄鏡形	(4.6)	方形石囲い炉	
北村遺跡	5-301	明科光	SB568	Ⅲ	?	(円形)	(4.0)	方形石囲い炉、墓に転用	
北村遺跡	5-301	明科光	SB570A	Ⅴ	有り	柄鏡形	4.0	長方形石囲い炉、土器有り	
北村遺跡	5-301	明科光	SB577	Ⅵ	有り	柄鏡形	－	未確認	
北村遺跡	5-301	明科光	SB578	Ⅳ	?	(柄鏡形)	(5.3)	破壊	
北村遺跡	5-301	明科光	SB581	Ⅲ	?	柄鏡形	(3.3)	方形石囲い炉	
北村遺跡	5-301	明科光	SB582	Ⅳ	有り	(円形)	6.6	破壊	
北村遺跡	5-301	明科光	SB594	Ⅵ	有り	(柄鏡形)	5.2	方形石囲い炉、土器有り	
北村遺跡	5-301	明科光	SB595	Ⅲ	有り	(柄鏡形)	2.8	方形石囲い炉	
北村遺跡	5-301	明科光	SB598	Ⅳ	有り	不明	3.6	未確認	
こや城遺跡	5-415	明科中川手	１号住	中期後半～末	?	不明	3.0～3.5	方形石囲い炉	
こや城遺跡	5-415	明科中川手	２号住	中期後半～末	?	不明	2.0～2.5	方形石囲い炉	
こや城遺跡	5-415	明科中川手	３号住	中期後半～末	?	不明	2.0～2.5	方形石囲い炉	
こや城遺跡	5-415	明科中川手	４号住	中期後半～末	有り	円形	3.1	方形石囲い炉	
塩田若宮（第１次）	5-512	明科東川手	２号住居址	?	?	不明	－	未確認	
塩田若宮（第２次）	5-512	明科東川手	SB１	中期後葉Ⅳ	有り	不明	(6.0)	未確認	

※時期については、各報告書の表記に準じた。内容は次のとおり。
北村遺跡　Ⅰ期：加曽利ＥⅢ式並行期　Ⅱ期：加曽利ＥⅣ式並行期　Ⅲ期：称名寺式並行期
Ⅳ期：堀之内１式並行期　Ⅴ期：堀之内２式並行期　Ⅵ期：加曽利Ｂ１式並行期
他谷遺跡、塩田若宮遺跡（第２次）　中期後葉Ⅰ期：曽利Ⅰ式、唐草文系土器Ⅰ段階　中期後葉Ⅱ期：曽利Ⅱ式、唐草文系土器Ⅱ段階
中期後葉Ⅲ期：曽利Ⅲ～Ⅳ式、唐草文系土器Ⅲ段階　中期後葉Ⅳ期：曽利Ⅳ～Ⅴ式、唐草文系土器Ⅳ段階

今後の課題

塩田若宮遺跡（第２次）発掘調査から見えてきた今後の課題は次のとおりである。

①遺跡範囲と集落の様相

塩田若宮遺跡は２次にわたる発掘調査と開発に先立つ試掘・工事立会などで遺跡の内容が明らかになってきている。今回の調査区付近では縄文中期後葉から後期前半及び平安時代の集落跡の一端であることが確認された。ただし、遺構の分布は疎であるため集落の中心が未調査部分に存在する可能性が大きいと考えられる。今後の調査によって新たに竪穴建物跡等が確認されれば、該期の集落の様相が明らかになり、ひいては遺跡立地の検討等も加味して、河川との関係や生業の解明にもつながると考えられる。

②遺物・焼土・動物遺存体の出土状況

SB１の埋土中からは多量の土器・石器に混じって焼土・骨片が検出されている。こういった状況は敷石住居や配石遺構上層の特徴として以前から指摘されているが、どのような遺跡形成過程の結果であるのかの解明は、今後の調査研究に委ねる部分が大きい。今後の発掘調査では、微細な遺存体の検出に努めるなど遺構の性格を探る必要がある。

③打製石斧の出土と生業との関係

今回の発掘調査では83点もの打製石斧が出土した。この様な打製石斧の大量出土については生業との関係性等の要因を検討する必要がある。

④安曇野地域の中での塩田若宮遺跡の位置

安曇野市内でも第６表に示すとおり多くの敷石住居が確認されている。縄文中期後葉から後期中葉の期間に営まれる遺跡にはほぼ例外なく見つかっている。この意味では、敷石住居の特異性よりは普遍性が強調されているといえる。しかし、それぞれの遺跡立地には差異が認められ、また確認された遺構や遺跡の存続期間も多様である。特に北村遺跡で土壙から多数の縄文人骨が検出された事例は他の遺跡と比較して特筆される。同時代の遺跡がそれぞれ数kmの範囲の中に点在する中で、これらのネットワークや地域の中での役割を検討することは今後の課題である。

引用・参考文献（五十音順）

明科町史編纂会　1984 『明科町史』 明科町史刊行会

明科町教育委員会　1979 『長野県東筑摩郡明科町こや城遺跡発掘調査報告書』 明科町教育委員会

明科町教育委員会　1991 『ほうろく屋敷遺跡―川西地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書―』 明科町の埋蔵文化財第３集　明科町教育委員会

明科町教育委員会　1997 『塩田若宮遺跡―明科町立明北小学校体育館建て替え工事に伴う緊急発掘調査報告―』 明科町の埋蔵文化財第10集　明科町教育委員会

明科町教育委員会　2000 『明科廃寺址―個人住宅建替えに伴う緊急発掘調査報告書―』 明科町の埋蔵文化財第７集　明科町教育委員会

明科町教育委員会　2001 『ほうろく屋敷遺跡Ⅳ―個人住宅建築工事に伴う第４次緊急発掘調査報告―』 明科

町の埋蔵文化財第11集　明科町教育委員会
明科町教育委員会　2004 『上手屋敷遺跡第２次調査―町営住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書―』 明科町の埋蔵文化財第12集　明科町教育委員会
明科町教育委員会　2005 『潮神明宮前遺跡Ⅱ―町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書―』 明科町の埋蔵文化財第13集　明科町教育委員会
上松町教育委員会　2008 『漆脇遺跡―国道19号線桟改良工事に伴う発掘調査報告書―』 上松町教育委員会
朝日村教育委員会　2003 『熊久保遺跡第10次発掘調査報告書―松本平西山山麓における縄文時代中期の集落址―』 朝日村文化財調査報告書第１集　朝日村教育委員会
安曇野市教育委員会　2010 『平成20年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書―八ツ口遺跡・三枚橋遺跡―』 安曇野市の埋蔵文化財第３集　安曇野市教育委員会
太田喜幸、河西清光　1966 「長野県東筑摩郡明科町七貴緑ケ丘遺跡調査」『松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告』 長野県考古学会　pp.139－156
大場磐雄、永峯光一、原　嘉藤　1963 「長野県東筑摩郡四賀村井刈遺跡調査概報」『信濃』 15－12　信濃史学会　pp.1－20
大町市教育委員会　1990 『一津―内陸における縄文時代玉作り遺跡―』 大町市埋蔵文化財報告書第16集　大町市教育委員会
桐原健　2010 「鮭三題」『長野県考古学会誌』 133　長野県考古学会　pp.13－19
長野県埋蔵文化財センター　1993 『北村遺跡―中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11（明科町内）―』 長野県教育委員会
坂北村教育委員会　2005 『県営中山間総合整備事業筑北地区埋蔵文化財調査報告書―坂北村　東畑遺跡―』 坂北村教育委員会
四賀村誌編纂会　1978 『四賀村誌』 四賀村誌編纂会
新谷和孝　1993 「縄文時代中期後半から後期にみられる釣手付深鉢について」『長野県考古学会誌』 68　長野県考古学会　pp.1－25
長野県編　1988 『長野県史　考古資料編　全１巻（４）　遺構・遺物』 長野県史刊行会
東川手の歴史を語る会　2005 『うるわしきふるさと東川手―昔日の原風景を懐古―』 東川手の歴史を語る会
穂高町教育委員会　1972 『離山遺跡』 穂高町教育委員会
穂高町教育委員会　2001 『穂高町他谷遺跡』 穂高町教育委員会
松本市教育委員会　1997 『小池遺跡Ⅱ・一ツ家遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市文化財調査報告 No.126　松本市教育委員会
三上徹也　1995 「土器利用炉の分類とその意義」『長野県立歴史館研究紀要』 1　長野県立歴史館　pp.93－102
三郷村教育委員会　2005 『三郷村埋蔵文化財Ⅱ―発掘調査・試掘調査報告―』 三郷村の埋蔵文化財第７集　三郷村教育委員会
山形村教育委員会　2002 『三夜塚遺跡Ⅲ―農道環境整備事業（三夜塚地区）に伴う緊急発掘調査報告書―』 山形村遺跡発掘調査報告書第12集　山形村教育委員会
吉田恵二、中村耕作編　2010 『長野県安曇野市穂高古墳群2009年度測量調査・現状確認調査報告書』 國學院大學文学部考古学実習報告第44集　國學院大學文学部考古学研究室

塩田若宮遺跡（南西から）

塩田若宮遺跡（南から）

調査区全景（南から）

調査区全景（北から）

調査地遠景（西から）

潮沢川（西から）

畝状遺構検出状況（北から）

畝状遺構（東から）

SB１礫調査状況（南西から）

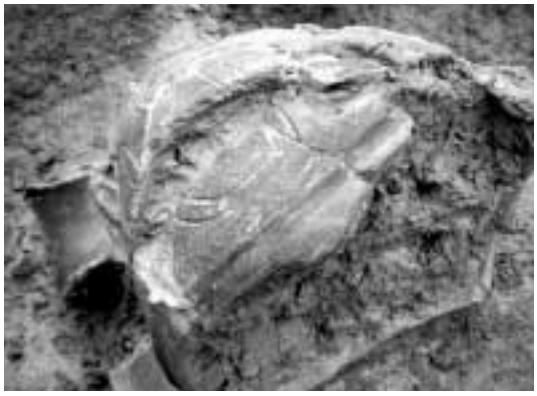
SB１敷石（北東から）

SB１敷石（北東から）

SB１敷石除去（北東から）

SB１床面下土器出土状況（南から）

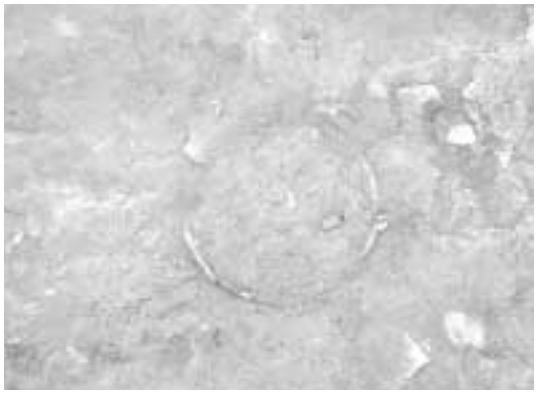
SB１床面下土器出土状況



SB１床面下土器出土状況

SB１床面下土器出土状況

SB１ピット完掘（北から）



SB２埋設土器検出状況（南から）

SB２土器埋設状況（南から）

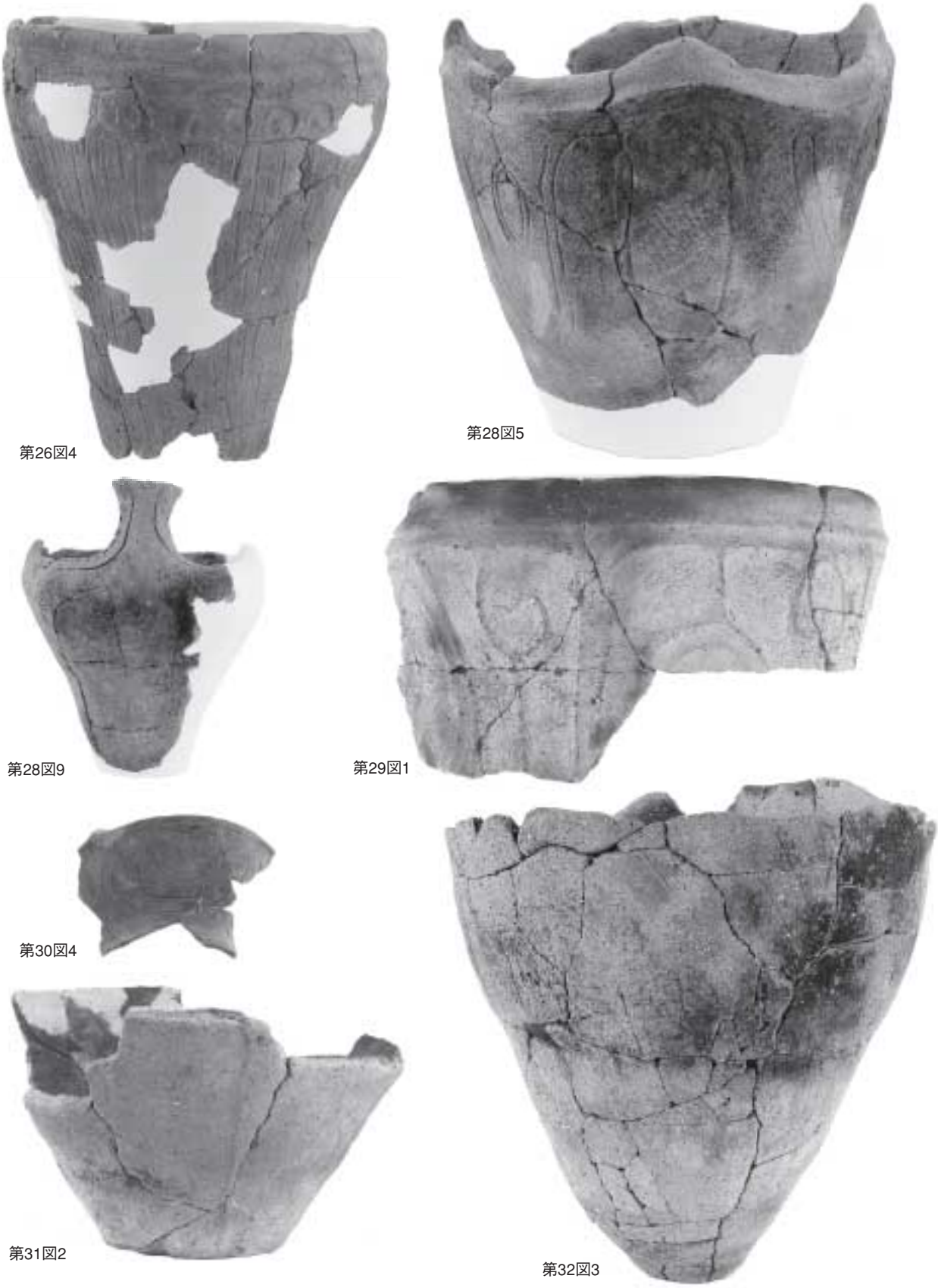
SB２土器埋設状況

SB２土器埋設状況

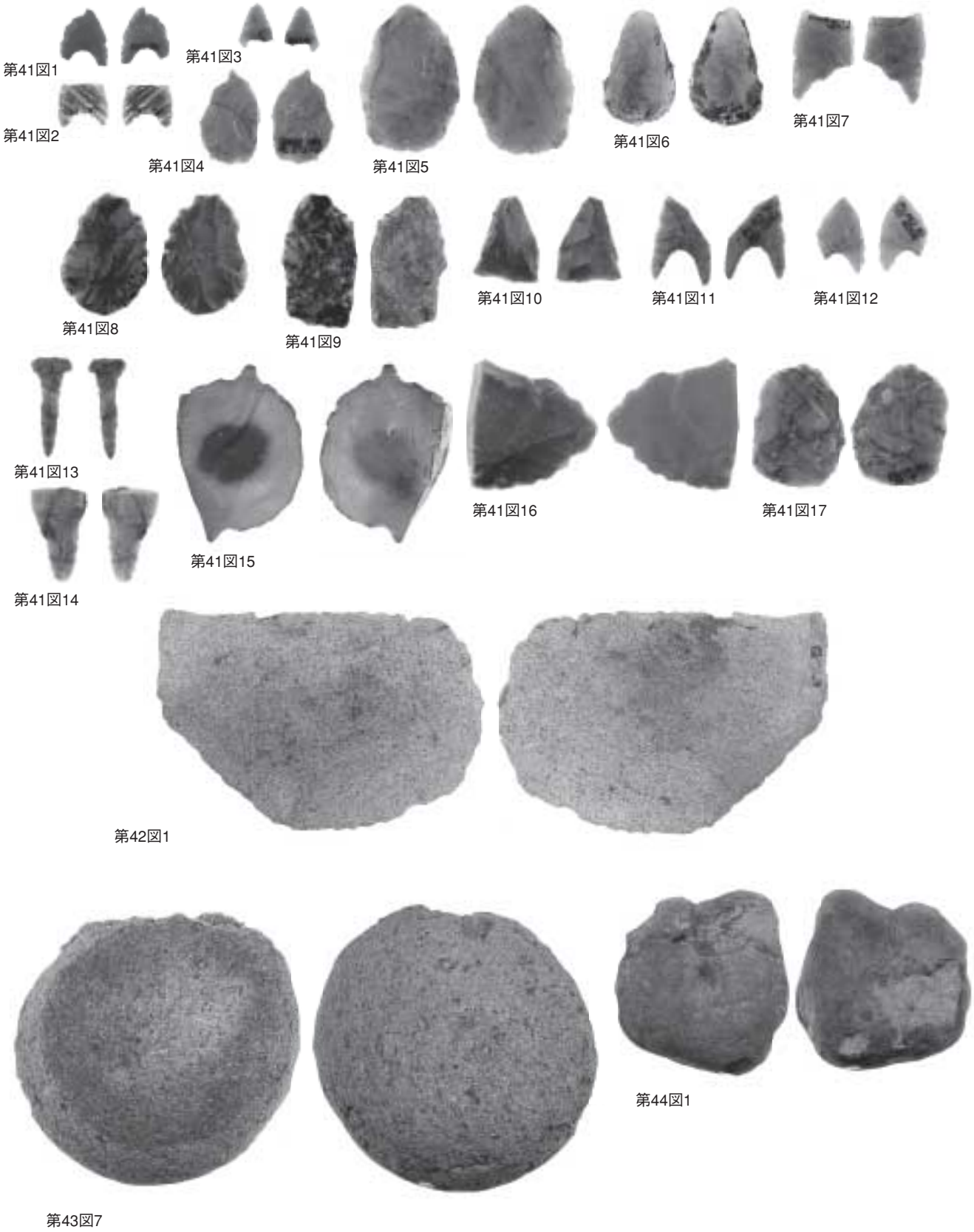
SB３完掘（北東から）

Ｐ５半割（南から）

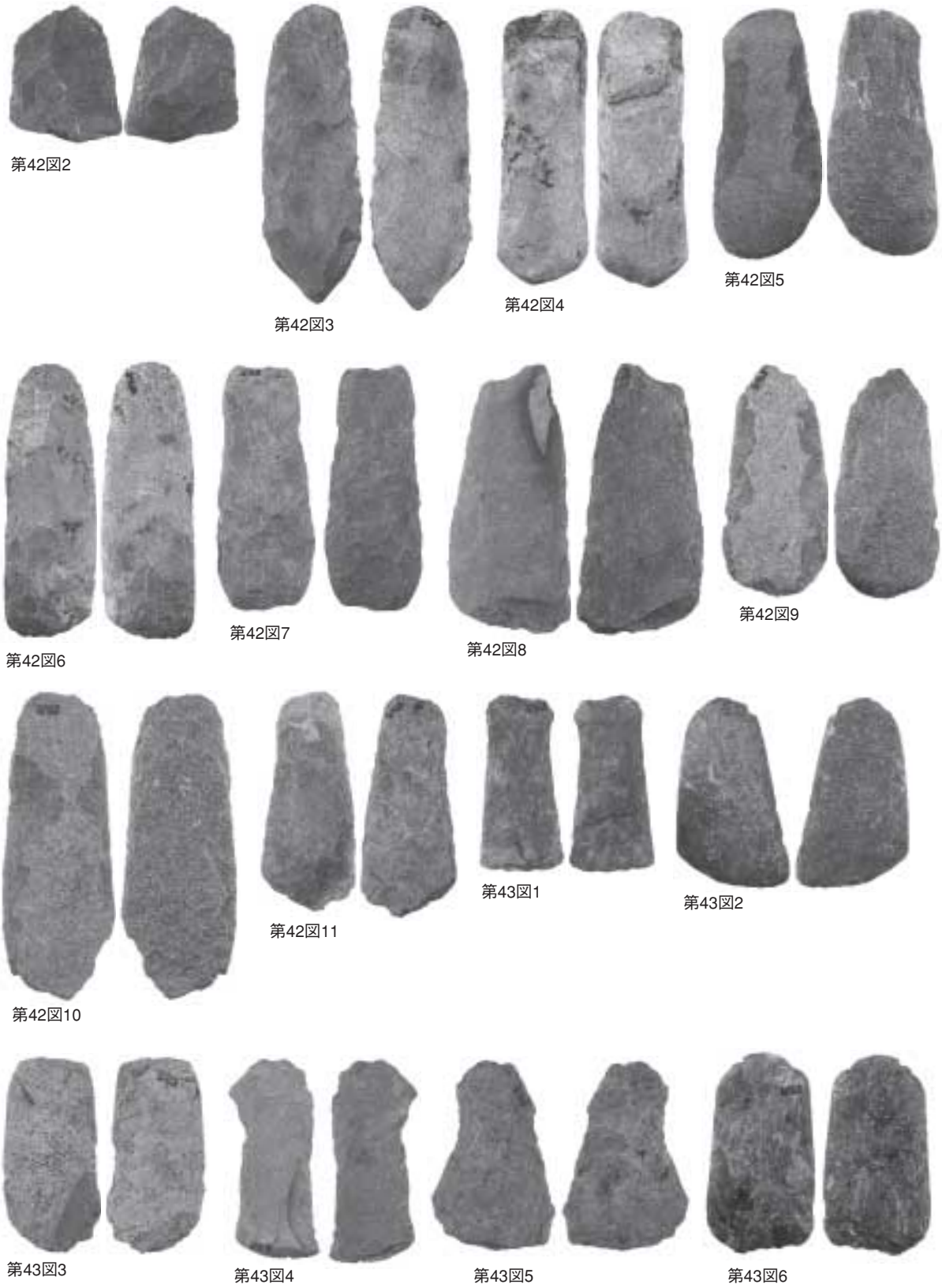
Ｐ５完掘（南から）



出土土器（縮尺１／４）



出土石器１（縮尺２／３：第41図１～第42図１、
縮尺１／３：第43図７～第44図１）


第42図2
第42図3
第42図4
第42図5
第42図6
第42図7
第42図8
第42図9
第42図10
第42図11
第43図1
第43図2
第43図3
第43図4
第43図5
第43図6

出土石器２（縮尺１／３）

付表１　塩田若宮遺跡試掘出土縄文土器観察表

図版NO	遺物NO	遺構名	種別	器種	文様	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技法の特徴			残存部位
									外面調整	内面調整	底部	
4	1	試掘	深鉢	A１	3	不明	不明	不明	ナデ＋隆線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
4	2	試掘	深鉢	A１	不明	不明	不明	不明	ナデ＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
4	3	試掘	深鉢	A１	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
4	4	試掘	深鉢	A２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋沈線＋刺突	ナデ	不明	口縁部～胴上部
4	5	試掘	深鉢	B１	4	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
4	6	試掘	深鉢	B１	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
4	7	試掘	深鉢	B１	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線	ナデ	不明	口縁部
4	8	試掘	深鉢	B２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
4	9	試掘	深鉢	不明	不明	不明	6	〈9.7〉	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	ナデ	胴下部～底部

※〈　〉内は残存している部位の法量。

付表２　塩田若宮遺跡（第２次）建物跡観察表

名称	位置(グリッド)	規模（m）			平面形	主軸方向(長軸方向)	炉・カマド	備　　考
		主軸(長軸)	直行軸(短軸)	壁高				
SB１	C８・C９	〈6.0〉	〈5.0〉	0.2	不明	不明	未確認	焼土、骨片を確認
SB２	D５	不明	不明	不明	不明	不明	埋甕地床炉	平面形確認できず
SB３	G４	不明	不明	0.3	円形？	不明	未確認	焼土を確認

※〈　〉内は残存している部位の法量。

付表３　塩田若宮遺跡（第２次）出土縄文土器観察表

図版NO	遺物NO	遺構名	種別	器種	文様	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技法の特徴			残存部位
									外面調整	内面調整	底部	
26	1	SB１	深鉢	A１	1	16.0	不明	〈4.6〉	ナデ＋隆線＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
26	2	SB１	深鉢	A１	16	41.0	不明	〈14.7〉	ナデ＋隆線＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
26	3	SB１	深鉢	A２	16	30.2	不明	〈27.3〉	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴下部
26	4	SB１	深鉢	A２	16	25.1	不明	〈30.5〉	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴下部
26	5	SB１	深鉢	A２	16	32.4	不明	〈27.7〉	ナデ＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴下部
26	6	SB１	深鉢	A２	16	21.0	不明	〈9.3〉	ナデ＋縄文＋隆線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
27	1	SB１	深鉢	A２	16	35.4	不明	〈12.8〉	ナデ＋隆線＋勾玉文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
27	2	SB１	深鉢	A２	16	36.8	不明	〈22.6〉	ナデ＋隆線＋勾玉文＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴下部
27	3	SB１	深鉢	A２	16	39.0	不明	〈20.25〉	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
27	4	SB１	深鉢	A２	不明	39.3	不明	〈9.4〉	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
28	1	SB１	深鉢	B２	8a	29.2	不明	〈11.75〉	ナデ＋隆線＋縄文＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
28	2	SB１	深鉢	B２	9	20.0	不明	〈14.15〉	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部

図版NO	遺物NO	遺構名	種別	器種	文様	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技法の特徴			残存部位
									外面調整	内面調整	底部	
28	3	SB１	深鉢	Ｂ２	9	23.8	不明	〈19.85〉	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
28	4	SB１	深鉢	Ｂ２	13	28.4	不明	〈14.8〉	ナデ＋縄文＋隆線＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
28	5	SB１	深鉢	Ｂ２	9ａ	30.4	不明	〈29〉	ナデ＋隆線＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴下部
28	6	SB１	深鉢	Ｂ２	13	28.6	不明	〈16.1〉	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
28	7	SB１	深鉢	Ｂ２	13	19.8	不明	〈11.1〉	ナデ＋縄文＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
28	8	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	13.2	不明	〈7.4〉	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
28	9	SB１	深鉢	Ｄ２	7ａ	15.6	不明	〈20.5〉	ナデ＋縄文＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴下部
29	1	SB１	深鉢	Ｅ１	7ａ	34.4	不明	〈19.5〉	ナデ＋縄文＋隆線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
29	2	SB１	深鉢	Ｅ１	7ｂ	25.9	不明	〈11〉	ナデ＋短沈線文＋隆線＋勾玉文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
29	3	SB１	深鉢	Ｅ１	7ｂ	37.8	不明	〈18.7〉	ナデ＋隆線＋刺突＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
29	4	SB１	深鉢	Ｅ１	10	不明	不明	〈38〉	ナデ＋縄文＋隆線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴下部
30	1	SB１	深鉢	Ｅ１	10	41.2	不明	〈14.6〉	ナデ＋縄文＋隆線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
30	2	SB１	深鉢	Ｅ１	不明	47.4	不明	〈13.8〉	ナデ＋隆線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
30	3	SB１	深鉢	Ｅ２	10	41.3	不明	〈17.2〉	ナデ＋隆線＋縄文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
30	4	SB１	深鉢	Ｇ	13	18.4	不明	〈11〉	ナデ＋縄文＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
30	5	SB１	深鉢	Ｇ	13	26.6	不明	〈9.75〉	ナデ＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部
30	6	SB１	深鉢	Ｇ	13	不明	不明	〈21.6〉	ナデ＋縄文＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	胴上部～胴下部
31	1	SB１	深鉢	Ｇ	16	47.4	不明	〈34.6〉	ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴下部
31	2	SB１	深鉢	不明	16	不明	11.8	〈19.95〉	ナデ＋隆線	ナデ	ナデ	胴下部～底部
31	3	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	〈19.55〉	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	胴上部～胴下部
31	4	SB１	深鉢	不明	不明	不明	8.8	〈12.5〉	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	胴下部～底部
31	5	SB１	深鉢	不明	不明	19.1	不明	〈14.4〉	ナデ＋沈線＋隆線	ナデ	不明	口縁部
31	6	SB１	深鉢	不明	不明	不明	5.6	〈８〉	ナデ＋沈線	ナデ	ナデ	胴下部～底部
32	1	SB１	鉢	Ｈ	13	29.2	不明	〈21.8〉	ナデ＋隆線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴下部
32	2	SB１	鉢	Ｈ	13	不明	不明	〈17〉	ナデ＋隆線＋把手＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	胴上部～胴下部
32	3	SB２	深鉢	不明	16	不明	7.5	〈34.4〉	ナデ＋条痕	ナデ	ナデ	胴上部～底部
32	4	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
32	5	SB１	深鉢	不明	9	不明	不明	不明	ナデ＋把手＋縄文＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
32	6	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋把手＋縄文＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
32	7	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部
32	8	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部
32	9	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部
32	10	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	粘土紐貼付＋刺突＋ナデ	ナデ	不明	鈎手
33	1	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	鈎手
33	2	SB１	注口	Ｉ	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋刺突	ナデ	不明	口縁部～胴上部
33	3	SB１	深鉢	Ａ１	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
33	4	SB１	深鉢	Ａ１	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋短沈線＋隆線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
33	5	SB１	深鉢	Ａ１	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
33	6	SB１	深鉢	Ａ１	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
33	7	SB１	深鉢	Ａ２	7ｂ	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部

図版NO	遺物NO	遺構名	種別	器種	文様	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技法の特徴			残存部位
									外面調整	内面調整	底部	
33	8	SB１	深鉢	Ａ２	13	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
33	9	SB１	深鉢	Ａ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
33	10	SB１	深鉢	Ａ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
33	11	SB１	深鉢	Ａ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
33	12	SB１	深鉢	Ａ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
33	13	SB１	深鉢	Ａ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
33	14	SB１	深鉢	Ａ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋条痕	ナデ	不明	口縁部～胴上部
33	15	SB１	深鉢	Ａ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋条痕	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	1	SB１	深鉢	Ａ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋条痕	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	2	SB１	深鉢	Ａ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	3	SB１	深鉢	Ａ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋条痕	ナデ	不明	口縁部
34	4	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	5	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	6	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	7	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	8	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	9	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	10	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	11	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	12	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	13	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	14	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋勾玉文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	15	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	16	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	17	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
34	18	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	1	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	2	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	3	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	4	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	5	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	6	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	7	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	8	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	9	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	10	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線＋沈線＋勾玉文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	11	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	12	SB１	深鉢	Ａ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	13	SB１	深鉢	Ｂ１	4	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部
35	14	SB１	深鉢	Ｂ２	8	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部

図版NO	遺物NO	遺構名	種別	器種	文様	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技法の特徴			残存部位
									外面調整	内面調整	底部	
35	15	SB１	深鉢	Ｂ２	８ａ	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	16	SB１	深鉢	Ｂ２	８ａ	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	17	SB１	深鉢	Ｂ２	９	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
35	18	SB１	深鉢	Ｂ２	９	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	1	SB１	深鉢	Ｂ２	９	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	2	SB１	深鉢	Ｂ２	13	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	3	SB１	深鉢	Ｂ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	4	SB１	深鉢	Ｂ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋条痕＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	5	SB１	深鉢	Ｂ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋縄文＋ナデ	ナデ	不明	口縁部
36	6	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	7	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	8	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	9	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	10	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	11	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	12	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	13	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	14	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	15	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	16	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	17	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部～胴上部
36	18	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	1	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	2	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	3	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	4	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	5	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋刺突	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	6	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	7	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	8	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	9	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋勾玉文＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	10	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	11	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	12	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	13	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	14	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	15	SB１	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
37	16	SB１	深鉢	Ｅ１	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
38	1	SB１	深鉢	Ｅ１	不明	不明	不明	不明	ナデ＋貼付＋押圧	ナデ	不明	口縁部～胴上部
38	2	SB１	深鉢	Ｅ１	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋縄文	ナデ	不明	口縁部～胴上部

図版NO	遺物NO	遺構名	種別	器種	文様	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技法の特徴			残存部位
									外面調整	内面調整	底部	
38	3	SB１	深鉢	Ｅ２	10	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋隆線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
38	4	SB１	深鉢	Ｅ２	16	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋条痕	ナデ	不明	口縁部～胴上部
38	5	SB１	深鉢	Ｅ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
38	6	SB１	深鉢	Ｅ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文	ナデ	不明	口縁部
38	7	SB１	深鉢	不明	13	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部
38	8	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部
38	9	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部
38	10	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部
38	11	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線	ナデ	不明	口縁部
38	12	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文	ナデ	不明	口縁部～胴上部
38	13	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
38	14	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線	ナデ	不明	口縁部
39	1	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋刺突	ナデ	不明	口縁部
39	2	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線	ナデ	不明	胴部上下部
39	3	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋ナデ	ナデ	不明	胴部上下部
39	4	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部
39	5	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋貼付＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
39	6	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋沈線＋条痕	ナデ	不明	口縁部～胴上部
39	7	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋粘土紐貼付＋刺突	ナデ	不明	口縁部
39	8	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋ナデ	ナデ	不明	口縁部
39	9	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文	ナデ	不明	口縁部
39	10	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋刺突	ナデ	不明	口縁部～胴上部
39	11	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線	ナデ	不明	口縁部
39	12	SB１	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋短沈線文	ナデ	不明	胴部上下部
39	13	SB１	鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋縄文＋沈線	ナデ	不明	口縁部～胴上部
39	14	SB１	蓋	不明	不明	15.6	不明	不明	ナデ	ナデ	なし	胴部
39	15	SB１	蓋	不明	不明	18.6	不明	不明	沈線＋ナデ	ナデ	なし	胴部
39	16	SB３	鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋刺突	ナデ	不明	口縁部
39	17	SB３	鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋貼付＋沈線	ナデ	不明	口縁部
40	1	SF３	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋刺突	ナデ	不明	口縁部～胴上部
40	2	SF３	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線	ナデ	不明	
40	3	検出面	深鉢	Ｂ２	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋刺突	ナデ	不明	口縁部～胴上部
40	4	検出面	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋隆線＋沈線	ナデ	不明	口縁部
40	5	検出面	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部

※〈　〉内は残存している部位の法量。

表付表４　塩田若宮遺跡（第２次）出土土製品観察表

図版NO	遺物NO	遺構名	種別	直径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	技法の特徴	備　考
40	6	SB１	土製円板	4.80	1.31	30.50	ナデ	
40	7	SB１	土製円板	3.85	1.00	13.60	ナデ＋沈線	
40	8	SB１	土製円板	4.10	1.00	16.20	ナデ＋短沈線文	
40	9	SB１	土製円板	2.95	1.38	11.40	ナデ＋隆線	
40	10	P６	土製円板	3.85	0.64	8.90	ナデ	

付表５　塩田若宮遺跡（第２次）出土縄文時代石器観察表

図版NO	遺物NO	遺構名	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	二次加工・調整技術、使用痕跡など
41	1	SB１	石鏃	チャート	1.4	1.1	0.3	0.5	凹基無茎鏃。左右非対称。両面に素材面残。尖端一部欠。
41	2	SB１	石鏃	黒曜石	〈1.0〉	1.2	0.2	0.3	凹基無茎鏃。石器の中間部より上の尖端側を欠。基部の抉りやや大きい。現状、両面全面調製品。
41	3	SB１	石鏃	チャート	〈1.2〉	0.9	0.2	0.2	凹基無茎鏃。尖端一部、片脚欠。小形。両面全面調整。
41	4	SB１	石鏃	チャート	2.5	1.6	0.5	1.8	小型寸詰りの木葉形状。尖端一部斜めに折れ、両面全面調整品。
41	5	SB１	石鏃	チャート	3.9	2.6	0.6	7.5	木葉形状。横打ちの剥片素材。片面ほぼ全面調整。片面周縁調整品。
41	6	SB１	石鏃	黒曜石	3	2.3	0.8	4.6	石器基部丸く整形される。両面に素材面一部残存するが、ほぼ両面全面調整品。押圧調整あり。
41	7	SB１	石鏃	チャート	〈2.3〉	〈1.6〉	〈0.3〉	1.3	凹基無茎鏃。尖端、片脚欠。基部の抉り深い。両面全面調整。
41	8	SB１	石鏃	チャート	3.2	2.3	0.7	4.6	寸詰りの木葉形状。左側縁一部欠。両面全面調整品。内面深くにくい込む長く平坦な剥離調整主体。石器の裏面は両極剥離状。
41	9	SB１	石鏃	チャート	〈3.4〉	2	0.6	6.2	石器の右側縁尖端近くから基部にかけ、斜めに節理面で折れ、石器の基部は側縁に対して広角に形成される。縁辺は交互剥離。
41	10	SB１	石鏃	チャート	〈2.2〉	〈1.6〉	〈0.6〉	2.5	木葉形尖頭器の一端。斜めに折れる。両面全面調整品の可能性大。
41	11	SB１	石鏃	不明	〈2.3〉	1.6	0.3	0.9	凹基無茎鏃。尖端側斜めに欠。基部の抉り深い。両面全面調整品。
41	12	SB１	石鏃	チャート	2	1.3	0.3	0.6	凹基無茎鏃。片脚欠。中間部に膨らみ。
41	13	SB１	石錐	チャート	2.6	1	0.5	0.8	石器の基部に素材面表裏を残す。そこから錐先が作出される。錐先は表裏から入念な全面の二次加工により、断面形は菱形をなす。最先端は尖る。
41	14	SB１	石錐	チャート	〈2.0〉	1.4	0.5	1.9	石器の基部側に折れ、錐先は表裏両面からの二次加工により、薄手レンズ状に整形。錐先以外の表裏両面に素材面残。
41	15	SB１	石錐	頁岩	〈3.2〉	〈4.4〉	〈0.9〉	11	礫打面の横打ち剥片素材。素材腹面側は打面部を除きほぼ全周に小剥離痕主体の急角度な二次加工。
41	16	SB１	削器	チャート	〈3.4〉	〈3.4〉	〈0.7〉	10.7	素材剥片の基部側欠損。素材腹面側は連続した二次加工により鋭利な刃先角を形成する。
41	17	SB１	削器	チャート	3.2	2.5	0.9	8.1	縦長剥片素材。楕円形状。表裏両面に素材面一部残。ほぼ全面、全周に鋭利な二次加工。
42	1	SB１	使用剥離片	凝灰岩？	5.7	8.6	1.6	89.7	線打面、横打ちの剥片素材。自然面一部残。頭部調整痕多。素材末端部に断続な小剥離痕。

図版NO	遺物NO	遺構名	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	二次加工・調整技術、使用痕跡など
42	2	SB１	打製石斧	頁岩	7.1	5.8	1.8	74.8	準撥形。寸詰り形。基部の斜めの折れ面に再生痕。片面に自然面残。赤化。
42	3	SB１	打製石斧	凝灰岩	15.4	5.2	2.2	144.8	準短冊形。一端素材面残り、二次加工なく尖る。その他周縁は鋭利な二次加工。赤化。
42	4	SB１	打製石斧	安山岩	14	4.7	2.1	180.1	短冊形。刃部両面から内面深くまで磨痕あり。刃部は丸く磨耗。両側面に敲打痕。
42	5	SB１	打製石斧	砂岩	12.7	5.7	2.7	189.3	短冊形。刃部自然面と剥離痕に磨痕。片面の自然面主体側の基部加工なし。
42	6	SB１	打製石斧	不明	14.1	4.7	1.9	143.4	短冊形。片面基部に自然面残。刃部両面に磨痕、線状痕。激しく赤化。
42	7	SB１	打製石斧	ホルンフェルス	12.6	5	1.8	122	短冊形。片面中央に磨痕部。
42	8	SB１	打製石斧	安山岩	13.9	6.3	1.6	133.6	準撥形。刃部やや末広がる。横打ちの剥片素材。両面周縁加工。片面基部に自然面一部残。被熱による黒化。
42	9	SB１	打製石斧	輝石安山岩	11.8	5.5	1.7	110.1	準短冊形。横打ちの剥片素材。両面に自然面。両面周縁加工。刃部円弧状。基部一部折れ。
42	10	SB１	打製石斧	玢岩？	15.6	5.8	2.5	209.6	短冊形。大型の剥片素材。基部加工殆どなく両側縁。
42	11	SB１	打製石斧	安山岩	11.4	4.9	1.4	85.8	準短冊形。刃部やや末広がり。横打ちの剥片素材。表裏両面に磨痕部。
43	1	SB１	打製石斧	頁岩	9.1	4.4	1.8	60.6	刃部多少磨痕部。短冊形。石器の基部片面に自然面残。
43	2	SB１	打製石斧	安山岩	9.8	5.7	1.2	73.3	撥形。縦長剥片素材。片面に自然面大きく残。自然面側左側縁に二次加工なし。主要剥離両面ほぼ周縁加工。刃部両面に広く磨痕部。
43	3	SB１	打製石斧	凝灰岩	10.1	5.1	1.9	121	短冊形。片面に自然面残。反対面は自然面か不明な面。両側中央付近の自然面や剥離痕に磨痕部と横方向の線状痕。赤化。
43	4	SB１	打製石斧	頁岩	10.4	4.7	1.1	54.3	短冊形。横打ちの剥片素材。片面一端に自然面残。
43	5	SB１	打製石斧	ホルンフェルス	9.8	6.4	1.4	73.9	撥形。片面に自然面広く残。刃部一部に磨痕。
43	6	SB１	打製石斧	頁岩	10.4	5.5	1.5	95.8	幅広の短冊形。表裏両面の随所に磨痕部。
43	7	SB１	凹石（蜂の巣石）	安山岩	〈15.5〉	15	8.5	2710	火熱を受け、一部破損。両面に複数の凹み。両面に研磨痕。側面の一部に敲打痕。
44	1	SB１	凹石	砂岩	9.4	8.8	3.7	380	両面の中央が凹む。両面から側面にかけて弱い研磨痕。
44	2	SB１	磨石	半花崗岩（アプライト）	9.7	9.1	5.5	650	両面および側面に研磨痕。ただし火熱を受けて不明瞭。一部欠損。
44	3	SB１	磨石	砂岩	14.8	6.5	3	400	両面および側面に研磨痕。片面の一部凹む。
44	4	SB１	台石	安山岩	〈19.3〉	11.1	7.2	2400	一端欠損。正面および側面に良好な研磨痕がみられ、平滑。裏面は部分的に研磨痕。
45	1	P６	石鏃	チャート	1.8	1.4	0.4	1	不定形状。素材面一部残るが、ほぼ両面全面調整。
45	2	P９	石鏃	チャート	〈3.0〉	1.3	0.4	2.2	横打ちの剥片素材。背面の深形な周縁加工。石器の基部切断。
45	3	検出面	石鏃	チャート	〈1.1〉	1	0.2	0.2	凹基無茎鏃。尖端若干欠。小型。基部の抉り浅い。両面全面調整。
45	4	検出面	石錐	チャート	2.9	1.6	0.4	1.9	縦長剥片素材。素材背面に節理面あり。素材の基部側に錐先が作出される。錐先は約1.5㎝。断面は両面加工によりレンズ状をなす。
45	5	検出面	台石	砂岩	〈15.3〉	8	3.5	1020	一部欠損。両面から側面にかけて良好な研磨痕がみられ、平滑。両面に１ヶ所ずつ敲打による凹みあり。

※〈　〉内は残存している部位の法量。

付表６　塩田若宮遺跡（第２次）出土平安時代土器観察表

図版NO	遺物NO	遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技法の特徴			残存部位
								外面調整	内面調整	底部	
46	1	Ｐ５	土師器	坏Ａ	11.5	4.6	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
46	2	Ｐ５	黒色土器Ａ	坏Ａ	11.2	4.6	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
46	3	Ｐ５	土師器	小甕Ｄ	12.8	不明	〈7.2〉	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	口縁部～胴上部
46	4	Ｐ５	土師器	甕Ｉ	23.7	不明	〈7.3〉	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	口縁部～胴上部

※〈　〉内は残存している部位の法量。

発掘調査報告書抄録

ふりがな	へいせい21ねんどあづみのしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成21年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	塩田若宮遺跡（第２次）
巻次	
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第４集
編著者名	土屋　和章、(株)加速器分析研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	安曇野市教育委員会
所在地	〒399-7102　長野県安曇野市明科中川手6824番地１　　TEL0263-62-3001（代表）
発行年月日	西暦2011年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しおだわかみ やいせき 塩田若宮遺跡	ながのけんあづみのし あかしなひがしかわて 867ばん１ほか 長野県安曇野市明科東 川手867番１外	20220	5-512	36° 21′ 58″	137° 55′ 59″	20090615 ～ 20090731	600㎡	明科北保 育園改築 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塩田若宮遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	竪穴住居跡　１棟 竪穴建物跡　１基 その他建物跡　１箇所 土坑・ピット	弥生土器、土製品、石器、土師器	縄文時代中期後葉の敷石住居から多量の土器・石器が出土。

要約	潮沢川が犀川に注ぐ地点の河岸段丘上にある縄文時代中～後期、平安時代の遺跡。今回の調査では縄文時代中期後葉の敷石住居とした遺構（SB１）から多量の土器・石器が出土した。敷石上層には多量の礫が集積しており、この中には炭化物や骨片が含まれる。出土遺物のうち石器では打製石斧の割合が高く、該期の生業との関わりが注目される。過去２度の本調査から、未調査部分にも遺構等の広がりがあると予測される。

安曇野市の埋蔵文化財第４集

平成21年度
安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書
塩田若宮遺跡（第２次）

２０１１

発　行　平成23年（2011）３月31日
安曇野市教育委員会
長野県安曇野市明科中川手6824-1
電話0263-62-3001（代表）
印　刷　電算印刷株式会社
長野県松本市筑摩1-11-30